ISSN 1881－1981

教養・文化論集

第４巻　第２号（通巻第７号）

講　演

2011年問題について ……岡　田　裕　介

岐路に立つ日本の政治と経済……福　岡　政　行

メディア・教育・子ども・そして家庭 ……福　岡　政　行

講　義

チャベス主義を巡る南北アメリカ関係 ……阿曽村　邦　昭

論　文

外来種問題における、外来生物の定義に関する資料的検討 ……村　中　孝　司

秋田県の過疎農村地域における社会福祉面の相互扶助と
住民参加に関する研究（その12）
― 研究のまとめ、高齢者の相互扶助が
一層効果を生むと期待できる領域とその限界について ― ……高　橋　和　幸

秋田県における血液事業の展開過程 ……奈　良　　洋

２００９年３月

ノースアジア大学総合研究センター教養・文化研究所

目　　次

講　演

2011年問題について …… 岡　田　裕　介　(1)

岐路に立つ日本の政治と経済 …… 福　岡　政　行　(15)

メディア・教育・子ども・そして家庭 ……福　岡　政　行　(33)

講　義

チャベス主義を巡る南北アメリカ関係 ……阿曽村　邦　昭　(51)

論　文

外来種問題における、外来生物の定義に関する資料的検討 …… 村　中　孝　司　(65)

秋田県の過疎農村地域における社会福祉面の相互扶助と
住民参加に関する研究（その12）
― 研究のまとめ、高齢者の相互扶助が一層効果を生むと
期待できる領域とその限界について ― …… 高　橋　和　幸　(75)

秋田県における血液事業の展開過程…… 奈　良　　洋　(89)

[講　演]

ノースアジア大学　総合研究センター主催　講演会

「2011年問題について」

講　　師	東映株式会社代表取締役社長 ノースアジア大学総合研究センター客員教授	岡　田　裕　介
挨　　拶	学校法人ノースアジア大学理事長・学長	小　泉　　健
司　　会	ノースアジア大学総合研究センター副参与 本学教養部准教授	橋　元　志　保
日　　時	平成20年10月３日　午後１時30分～２時30分 (午後２時50分～４時50分まで映画上映会)	
会　　場	秋田市文化会館	

橋　元　本日は、ノースアジア大学映画祭にお越し下さいまして、誠にありがとうございます。岡田裕介氏ご講演会及び東映映画「まぼろしの邪馬台国」の先行上映会を、どうぞ最後までごゆっくりお楽しみ下さいませ。

それでは、東映株式会社代表取締役社長・本学総合研究センター客員教授、岡田裕介氏のご講演「2011年問題について」に先立ちまして、学校法人ノースアジア大学 小泉　健理事長がご挨拶申し上げます。どうぞご静聴下さいませ。

小　泉　小泉でございます。今日は沢山のお客様にご来場頂きまして、心からお礼申し上げます。昨年に続きまして、本年も秋田県で、公開前の素晴らしい映画「まぼろしの邪馬台国」を、岡田社長のご好意で上映することが出来ます。昨年の映画も大変素晴らしいものでしたけれども、それに負けないくらいの感動的な映画ですので、ぜひ最後までご鑑賞頂きたいと思います。

また、ご存知の方もいらっしゃると思いますが、岡田社長は昨日10月２日に、東映大学という俳優養成学校を創設されました。その後、すぐに秋田県に来て頂いた訳です。岡田社長は東映グループの総帥の立場におられる方ですが、大変お忙しい中にも関わらず、昨夜から秋田県に入って頂きました。その社長の心意気というものを、今日は感じて頂きたいと思います。岡田社長は大変有名な方でございまして、俳優としてもご活躍されました。皆様に改めてご紹介するまでもありませんが、本日の映画の主演である吉永小百合さんとも、若い頃から親交があったということです。映画のプロデューサー、東映の役員を経まして、非常に若くして社長になられた方です。

岡田社長は常々、テクノロジーの東映ということを言われております。前回もそういったお話をされ、覚えていらっしゃる方もおありかと思います。本日の演題にありますように、2011年問題、つまりアナログからデジタルへ、映像のデジタル化という時代において、映画がどのように変わっていくのかということをお話頂けるかと思います。また、「まぼろしの邪馬台国」にまつわる、映画制作のお話も聞かせて頂けるのではないかと思います。

そして、本日のイベントを主催しております総合研究センターも、今年で４年目を迎えます。若いスタッフが、秋田県からの知の発信、社会貢献のために日夜頑張っておりますので、皆様からもご支援頂きたいと思います。それでは映画上映に先立ちまして、岡田社長にご講演をお願いしたいと思いますので、ぜひ最後までご静聴下さい。本日はお越し頂きまして、本当にありがとうございました。

岡　田　ただ今ご紹介に預かりました、東映の岡田裕介でございます。ノースアジア大学教場での講義は勘弁して下さいということで、このような形式での講演は今回で４回目になります。いつも大学の講演会だと聞いて来るんですけれども、若い方もいらっしゃれば、大変にお年を召した方もいらっしゃいます。誰を対象に何の話をすれば良いのか、いつも決まらないまま、ここに出てくるんです。本当に決めてきていないので、色々な話になるかと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

まず忘れてはいけないものがあって、最初に申し上げておきますけれども、現在「釣りキチ三平」という映画を、東映がこの秋田県で、川を中心に５ヶ所で撮影をしています。これは、大ヒットしました『釣りキチ三平』という、自然と触れ合いながら昔からの釣りを楽しむという、非常に長い人気漫画を映画化したものです。この秋、大ヒットした「おくりびと」という

映画を監督した滝田洋二郎がメガホンを撮っています。秋田県発信の映画ですので、３月20日公開に向けて、皆さんからぜひご支援頂ければと思います。

何の話からすれば良いのか分からないので、まずは今日観て頂く「まぼろしの邪馬台国」という映画の、詳しい前解説をさせて頂ければと思います。これは、秋田県の「釣りキチ三平」とは全く関係ない話と言えばそうなんですが、ただ１つだけ関係があるんですね。それは何かと言いますと、１人の人物を中心に描かれるドラマだということです。宮崎康平は、竹中　直人という役者が演じていますが、それを支える妻との物語なんですね。この人は、九州島原地方のいわゆる偉人でして、変わっていて色々なことをやってきた男ですが、実は目が不自由なんです。子供の頃からではなくて、20歳くらいから急に目が見えなくなった人なんですが、暗い人生を送ったわけではありません。前向きに生きて、大変素晴らしいことをされた方なんです。それで、彼は目が見えないことを逆手に取って、色々なことをやろうと考えたんです。

私は、この人に非常に感銘を受けました。７年くらい前にこの話を知りまして、そして調査と言うんでしょうか、約５年間色々な人にお会いしたりして研究させて頂きまして、２年前に本格的にシナリオ作りを始めました。半年くらいでシナリオはすぐに出来たんですが、その後、撮影に１年かかって、やっと公開するに至りました。

その中で奥さんの役を、ぜひ吉永小百合さんにやって頂けないかという話を再三しました。それで、「私は何をやれば良いんですか」という話になって、「彼を支える妻との夫婦の話なんです」ということになりました。観て頂ければ分かるんですが、非常に温かい映画、ウォーミング映画なんです。自分で言うのも変ですが、大変温かい映画だと思っているんです。

次に、宮崎康平という人物とそれを支えてきた奥さんの色々なエピソードを聞いて、私が感銘を受けた点を何点か申し上げます。この宮崎康平さんは、目が見えなくなったことによって何をやり出したかと言うと、邪馬台国の研究を始めたんです。どういうことかと言いますと、邪馬台国の時代には文字がなかったんです。つまり、今の自分は本が読めなくなってきた。そういう中で、耳から聞く卑弥呼や邪馬台国の話というのは、わずかに『魏志倭人伝』のような、中国の書物の１部分にしか記述が残っていないんですね。それも、日本には文字も全くなかった時代の話なんです。ですから全部語り部を通じて、言葉から言葉へ、耳から伝わるものなんだということを言っているんです。「私は本を読めないから先入観がないので、その研究には私が１番向いている」ということなんです。こういうことから始めていった人なんですね。ですから、彼の理論は大変に面白いんです。漢字は当て字だから全部嘘なんだ、当時はどういう音で何を意味していたのかということは、今の学者達は全く間違って理解していると言った人なんです。

彼の説がユニークで面白かったのは、最後に邪馬台国がどこにあったのかっていうことになると、島原にあったんだっていう答えが最初からあることです。島原になきゃいけない、自分のふるさと島原に邪馬台国があるということで、理論を遡っていったんです。ですから、どこか矛盾もあるんですよ。

それで、何故彼が変人扱いされたかと言いますと、これがちょうど50年くらい前のことなんです。50年前に彼が言っていたことは、地方分権・地方活性化なんです。「島原地方が栄えるためには、自分達がここで頑張らないとダメなんだ」ということで、彼は島原に邪馬台国があると言いたかったんです。その頃は、日本中が中央に続いていた時期です。優秀な人達は皆東京や大阪へ行ってしまう中で、地方を活性化させて、自立していかなければ、日本はダメにな

ると言っていた男なんですね。ただ、当時は誰もそんなことに耳を傾けなかった。つまり、変人扱いされていたんです。最近では、我々の仲間の東国原君や橋下さんなんかも知事をやられたりして、地方分権に目が向けられるようになってきました。それで最近、やっと皆さんがそういう目を持ち始めたんです。

そんな時代に、彼が考えていた活性化のためにやらなければいけないことは、観光と農業でした。それで、観光とは一体何なのかと言ったら目玉商品、つまり、ここはこういう土地なんだということがないといけないんですね。その時、島原には何があるのかということを考えて、はっきり言って何もなかったんです。ですから、邪馬台国を島原観光の目玉にしようというのが、彼の大きな思いだったんですね。これは自分で調べていくうちに、何となくそうだったんだということが分かってきました。ほとんどの人は分からなかったんです。

宮崎康平は郷土研究家でもあったんですが、この男がどういう人間かって皆さんの前に現れたのは、さだまさしという歌手がきっかけです。さださんは島原出身なんですけど、売れない時に一所懸命彼を連れて回って、彼を世に出したんです。ラジオ局やテレビ局を一緒に回って、「上手い奴がいるからこいつを出してやってくれ」と言って、強引に彼を、このような世界に引っ張り出してきた男なんですね。

それから、宮崎康平という人は非常に多芸な人で、映画を見てもらえれば分かりますが、「島原の子守唄」という子守唄、これも彼が作詞作曲したんです。それと、そのうち「関白宣言」という歌をさだまさしが歌います。俺より先に寝てはいけない、俺より後に起きてはいけないという、有名な歌をさだまさしが流行らせましたけれども、モデルが実はこの人だったんです。要するに、今日観て頂く人はそういう人だったんですよ。

彼は奇人変人として、もう本当にあの人には参りましたという人が、証言なんかでも色々あるんですけれども、面白かったのは彼がお亡くなりになった時に、お葬式の参列者が大変な数で、島原地方の花という花が全部なくなって、島原始まって以来の大きなお葬式になったというのが、私が調べた中にありました。つまり、中には彼を嫌っている人もいましたが、分かってくれている人もいたんです。それは、宮崎康平が郷土を愛していたからです。郷土復興のために、一生懸命色々なことをしていたんですね。

けれど、映画を観て頂ければ分かりますが、色々なことをやっていますが失敗ばかりなんです。志だけは良かったんですが、何も成功しなかったんです。ここが面白いところで、その奇人に誰を当てていくかといった時に、「竹中直人、あんたしかいないんだ」と竹中君に頼みに行きました。すると、「大体こんなもんですね、私は」なんて言って、「役はどうでも良い。吉永小百合さんと夫婦をやれるなら、私は何でもやります。吉永さんは本当に出るんでしょうね」と言うから、「吉永さんはちゃんと出るから大丈夫だよ」ということで決まりました。

彼を支えた奥さんなんですが、実は映画の中ではあまり使っていませんが、「本当に、あの人が私より先に死んでくれて良かった」ということを言っているんです。「本当にこの人は、私が先に死んでいたら生きていけなかった。何も出来ないし、訳の分からないことばっかりやるから、私が最後まで面倒を見ることが出来て本当に良かった」と言った奥さんがいます。その奥さんは今もご健在で、もう79歳になられました。一昨日も一緒だったんですが、ちゃんと覚えていらして、全部お話してくれたんです。

そういう中でこの地方分権は、今となっては一般的なんですが、50年前は馬鹿だと言われた時代です。映画の中に出てくるんですが、彼は農業にも大変に力を入れていました。映画には

バナナの話しか入れてないんですが、島原地方で小麦から米まで、あらゆる作物を栽培していくんですね。とにかく、農業をこの地域で活性化させていかなければいけないというんです。ご年配の方はご存知でしょうが、当時のバナナっていうのは大変な高級品でした。今は二束三文で売っている１番安い食べ物ですよね。昔は、病気になった時しか食べさせてもらえなかったバナナ。そのバナナを皆に食べさせたい、「バナナを売って大儲けしようよこの島原で」ということで、バナナ園をやるんです。それで、多大な投資をして大失敗していくんですけど、とにかく色々な試みをして、牧畜業も色々なことをやります。けれども、彼が真面目にそういうことをやっているのかと思うと、バナナ園の脇でワニの飼育をしていたりするんです。何のために飼育しているのかは、よく分かりません。そういう、ちょっと変わったところもある人だったんです。

映画に関しましても、早くから目を向けた人です。どういうことかと言いますと、今でこそ全国から、「うちの地方へ映画のロケに来て下さい、宣伝して下さい」とひっきりなしに要望が来るんですが、今から数年前までは「そんなの迷惑」みたいな話で、我々はこの何十年、大変辛い思いをしてきたわけです。実はこの宮崎康平さんが１番最初に、島原地方にとにかくロケを持ってきて、それで少しでも映して宣伝してくれと言った人なんです。その結果、「君の名は」という大変に当たった映画の中に、島原のワンシーンが意味不明に入っています。これは、どうしても来てくれって監督に頼み込んで、強引に入れているんです。ですから、昭和29年の「君の名は」という映画には、ちゃんと島原が入っているんですね。

それで、あまりにも先を行き過ぎてしまって、今になって皆さんが見直しているのがこの人物なんです。非常に変わったところもありましたが、映画の中で紹介されている変わったところは全部正しくて、後で見て頂いて、笑って頂いたり泣いて頂いたりすれば良いと思っています。映画っていうのは批評することではないので、楽しく観て頂ければ良いんですが、今の時代に、何故我々がこの映画を作ったのかっていうことです。あまりこういうことは話してはいけないんですけど、映画は本当に楽しむだけで、講義や講演とはあまり関係がありません。そのまま観て頂ければ良いんですが、まあまあ面白い映画だと思っていますので、皆さんに観て、泣いて頂ければと思います。

話を変えますが、前にこの場を借りてお話させて頂いたこともあるんですが、私はアメリカにプロデューサーとして、つまりアメリカで映画を作りたくて、行こうとした時期があるんです。30歳の時ですが、その時に向こうのトップの人に、「日本映画をアメリカに持って来ようなんていうことを考えたらダメだよ。プロデューサーとしてアメリカでやりたいなら、今から君はアメリカ人になれ」と言われました。アメリカ人の心が分かる、つまり「アメリカ人にならない限り絶対に成功しないし、我々は君を雇う気もない」ということを言われたんですね。私はその意味がよく分からなかったんです。前もいろいろ話したんですが、映画に対する考え方の違いっていうのがあるんです。考え方については省略させてもらうとして、とにかく私はその時に、「アメリカ人になって国籍も向こうというようなことになると、それをあまり望んでいるわけじゃない。やっぱり日本人でいたい」と、その時初めて思いました。そして、私は大変なご好意をお断りして、日本でささやかに映画を作るプロデューサーになったんです。

どういうことかと言いますと、我々にとってアメリカというのは大変な存在で、当時はアメリカ映画と言ったら、「うわあ、すごいな」って思いますからね。１つの街を借り切ったとか、数千人のエキストラを使ってやったとか大変大掛かりで、「我々には出来ないよな」と思うん

です。戦争中、嫌というほど聞かされた「B29に竹槍で向かえるか」なんて、戦後の人間は「もう良いです」とよく言っていたんですが、ややそういう心情で、我々にとってアメリカ映画っていうのは、やっぱり高嶺の花だったんです。日本でも、「日本映画とは全然違うじゃない、すごいよアメリカ映画は」ということが、何年間も続いてきました。

ところが２年前、実は日本映画がアメリカ映画を突如として上回ったんです。日本映画が頑張っているということもあるんですが、52%のシェアを取りました。そして、アメリカ映画が40%台まで落ちるという、有史以来の出来事が一昨年に起きているんです。どうしてこういうことが起こったんだろうと思っていましたが、実は前々から、私が皆さんに申し上げていることがあります。それは、アメリカという国が何を考えて、何をやろうとしているのかっていうことが、映画界を見るとすごく良く分かりますよっていうことです。アメリカが世界制覇を夢見たのは確かなんです。今のイラクにしても、アフガニスタンにしても、これは世界制覇の一環ですよ。全部アメリカの言う通りになってほしい、それが大きな望みだったんですね。

実は映画において、それがほとんど実現されていたんです。映画については、抵抗しているフランスにおいても比率が８対２で、アメリカ映画が８、フランス映画が２なんです。皆さんもご存知の通り、フランスというのは大変プライドの高い国で、フランス語を重んじています。それでも８対２までいってしまったんです。つまり、全世界がほとんどアメリカ映画に席巻されていたんです。ロシアは違うと思うかもしれませんが、ロシアの映画は90%がアメリカ映画です。表向きは入っていませんが、裏ではマフィアを通じてフィルムが入っていまして、ロシアの人々はアメリカ映画を見て喜んでいます。アメリカは映画でもって、全世界を制覇していきました。プロパガンダ映画になっているんですね。

ですから、共和党が政権を取っている時は、例えば宇宙から敵が攻めてくると、戦って地球を守ってあげるのはアメリカなんです。隕石が落っこちてきて、隕石を何とか防がないと地球が危ないとします。すると、それを防ぐのは全部アメリカで、アメリカが犠牲になってやってきたんだということになります。そういう映画がずっと続いているんですね。皆さんもご覧になったと思いますが、「スターウォーズ」にしても、ダース・ベーダーという敵が出てきますよね。その人が何故悪いのかは分からないんです。相手は絶対主義の国で、こっちが自由主義の国だというようなことになりまして、とにかくそういう映画が多いんです。

民主党が政権を取ると、例えばベトナム戦争は間違っていたとか、今度は反戦映画ばかりになります。つまり映画は全部、国の考え方に沿って成り立っているんです。それは偉大なるプロパガンダで、アメリカは宣伝の一環としてきたんですね。それによって全世界を制してきたんですが、映画で、１番抵抗していたのが日本なんです。実は、アメリカは日本に手こずっていたんです。何故かというと、我々が頑張ったというのもありますが、日本にはアニメーションという特殊なものがありまして、なかなか子供達の関心が、アメリカのアニメーション等に向かないんです。日本のアニメーションを非常に愛するために、絶対数値がなかなか上がってこないんです。ですから最近でも、アメリカの有名な俳優さんは、映画のキャンペーンのために全部日本に来ます。ああいう人が外国に来るのは珍しいんですよ。それが日本にだけ集中的なんですが、日本はなかなか落ちませんでした。

それで、とうとうアメリカが日本に負けて、絶対シェアを40%台に落としてしまったというのが一昨年だったんです。我々も快挙だと喜んでいました。こういうことが起こるものかと思っていたんですが、これは今の経済の大きな前触れだったと思うんです。いわゆる余震ですね。

要するに、アメリカという国の絶対政権が崩れてきて、その後に経済、政治と影響が出ている訳です。証券や銀行が破綻したと言っていますけれど、映画の段階では、実はもう２年前から始まっているんです。

そういう証券や銀行とはあまり関係なく、アメリカ映画と日本映画の比率なんて、今年は誰も言う人がいなくなりました。圧倒的に日本映画が良いからです。ですから、もうそんなに争うどころではなくて、アメリカが失墜した状況が今日なんです。この１年に限って言いますと、日本映画が全体の60％くらいまでいってしまうのではないでしょうか。まだ集計が出ていませんが、日本映画が頑張っている訳ではなくて、それくらいアメリカ映画が墜落してきたんですよ。つまり、映画とともに経済その他も同じようになっていって、世の中同じように動いているんだということです。その余震というか、それは映画界を見て頂ければ分かるんです。映画界なんてちっぽけなものだから、経済界はあまり相手にしてくれませんが、そういう流れが全体にあったんですね。

それから、今はグローバルな時代だと言われていて、人間は皆一緒だということを言う人が大勢います。助け合わなければいけないとか色々なことを言いますけど、こういう席なので本音を言わせて頂ければ、アメリカ人と日本人、日本人と中国人、日本人とインド人は全く違います。同じ人間ではないんです。同じ尺度で同じことを考えてはいけないんです。もともとの感覚が、全然違うんですよ。ですから、ある部分だけは共通しているんですけど、ある部分だけで、やっぱり違うんだっていうことなんです。

食べ物の話になりますが、アメリカに行くと面白いんです。日本人で海苔が嫌いな人は、本当に少ないと思うんです。「海苔でご飯食べても良いよ」っていう人だって沢山いらっしゃると思うんですが、アメリカ人は海苔が気持ち悪いんです。それは、理解出来ないんですよね。皆さん、お寿司のカリフォルニアロールというのはご存知ないかもしれませんが、外側が全部ご飯になっている巻き物があるんです。中にちょっとだけ海苔が入っています。何なのかと言うと、手巻き寿司の逆で外側にご飯があるんですね。アメリカ人は海苔が気持ち悪いものだから、海苔を隠しているんです。私は海苔が美味しいから、カリフォルニアロールを注文すると海苔を別に持ってきてもらって、上から海苔を付けて食べるんですけど、これはいくら説明してもよく分からないですよね。タコやイカが気持ち悪いから食べないと言われるのは、何となく分りますよね。けれど、海苔が気持ち悪いって言われてしまうと、ここから話が進まなくなってしまいますが、こういうことっていうのは基本的に違うんだと思うんです。

それと、皆さん何も言わないんですが、私が不思議に思っていたのは、アメリカという国にはお城が１個もないということです。日本はもちろん、イギリスに行ってもどこに行ってもあります。ここにだって、秋田藩のお城がありますよね。アメリカの国土だけは、お城が１個もないんです。フランスのパリなんかに行くと、行きたくない時でも仕方がなくて、観光バスに乗ると、必ず全部お城に行きますよね。ですが、アメリカだとお城がありません。

どういうことかと言いますと、今まで攻められたことがなくて、全部攻める側なんです。ですからアメリカの国土の中で、何かが襲ってきたという感覚が全くないんだろうと思います。アメリカ人は、そういう感覚が全くない人間なんです。ですから、そういう感覚がない人間と持っている人間というのは、生まれた時からどこかが大きく違うんですね。言葉が違うだけではなくて、そういう人間は違うんだということを、映画を作っていてつくづく思います。ウケるところも違うんですよ。笑うところが違うし、納得するところも違います。やっぱりそこは

認めた上で、国際交流を始めないといけません。

人間の定義というのは違っていて、世代間でもすごく違ってきています。我々としても、多数の異なった年齢層の方にこの映画を観て頂くということは、大変ありがたいんです。面白いんですけれど、最新の調査で今の若い人達、10代と20代でちょっと違うんですが、10代の中に新しい世代が誕生してきています。それはどういう世代かと言いますと、我々の調査によると、アメリカ映画を観なくなった世代です。どういうものを見ているのかというと、テレビでやっているものが見たいと言うんです。ストーリーが全部分からないと嫌なんですよ。これがどういうことかと言いますと、つまり映画を観ていないんです。15分に１回はメールしないと、もう苛ついてしょうがないって言うんですよ。私はびっくりして、１人か２人だと思ったんですが、今の高校生から中学生くらいまでのかなり多数の人間が、メール中毒になってきているんです。

この現象は、我々は理解出来ません。彼らは映画を見ていても、手でやることがないから暇でしょうがないんです。映画館では一応、メールをすることは禁止していますから。そうなると、映画よりはテレビのほうが良いんです。何でテレビのほうが良いのかというと、ＣＭが入っている間はメール出来るからです。それから映画を見ていても、頭からストーリーを追っていかないと話が分かりません。もう持続力がなくて、ストーリーを追うのがしんどいんです。ですから、知っているストーリーのほうが良いんですね。それで、その時の俳優の顔の良し悪しだけを論じたいというのが、今の若者に出てきてしまっている。私も、そろそろ映画を作るのを引退しなくちゃいかんなと思ってしまいました。このように、日本人の中でも世代において大きく違ってきているんです。

中毒ということについては、私はタバコを沢山吸っていた人間なんですが、実はつい１年前に止めたんです。止めるまでの３ヶ月間、本当に死ぬ思いだったんですが、ある日突然、急に大丈夫になったんです。その時初めて、私は中毒がどういうものなのかよく分かったんですが、皆そうです、中毒になってしまう。ですから現在、新たな携帯電話メール中毒というものが出現しているんですね。そういう訳の分からない時代になってきたんです。

ちょっと前置きが長くなりましたが、本題についてお話しします。このデジタルというのだけ、皆さんに簡単にご説明させて頂きます。今、よくテレビで「2011年に地デジが始まります」なんて、アナウンサー達が出て色々宣伝していますけれども、デジタル化とは何なのかと言いますと、皆さんにとっては仕組みなんかどうだって良いと思うんです。「0101の信号におけるどうのこうの」なんて言ったって、意味がないんですよね。何が良くなるのかという話になるわけです。実は、多少画がきれいになるんですよ。これは確かなんですが、本当のことを言いますと、それ以外はあまり意味がないんです。

それで、そんなにしてまで変えなければいけないのか、誰かが大儲けするために変えるのかと色々探っていきまして、テレビ局はやりたいのかというと、実はやりたくないんです。地方局なんて、あまり言えませんけれども設備投資で今から大変なんです。アンテナも全部換えてやり直すので、ものすごくお金がかかるんです。キー局より地方局、まして秋田のテレビ局なんか、１番やりたくないのがデジタルなんです。お金ばかりかかって、皆さんがそのお金を払ってくれるなら良いんですが、払ってくれるところはない訳です。そうすると、全然意味がないんですよ。そして、視聴者からものすごく要望があって、もっと色々なものを見たい、やりたいというのは、実はあまり聞いたことがありません。どうしてこんなことになったのか、本当

に摩訶不思議なのがデジタルなんです。

これで儲かるのは、家電だけなんです。「テレビを買い替えないと見られませんよ。大きいのに買い換えて下さい、画面がきれいになりますよ」とは言われても、まだかなり高いですよね。50万円以上は必ずします。これによって、家電メーカーは非常に潤うんです。

それで、誰の戦略でこんなことになってしまったのか。ユーザーも望んでいませんし、テレビ局もやりたくないんです。我が社は、一応テレビ映画を作っている会社なんですが、我々も全然やりたくありません。結局どういうことかと言いますと、総務省なんかが色々なことをやっていく中で、「アメリカがこうなんだから、日本もこうしなければいけない」と、あまりデータを取らずに、本当に必要なものなのかということも考えることなく、こういうことを推進していくんだと決めてしまったんです。

映画会社というのは、私がここで好き放題しゃべっているように、国が怖くないんですよ。何故かと言うと、全然保護されていないからです。何のお金も貰っていませんし、「ほっといてちょうだい」というのが、我々映画業界の基本的な考え方です。その代わり、テレビ局というのは全部免許事業なんですよ。それ故に、「おっしゃることはごもっともでございます」と、テレビ局はただ、ただ総務省には弱いんです。総務省の決めたことに対して、「あんたら、やりたくないならそう言いなさいよ」という話をしているんですが、「いえいえ、それは結構です」というように、皆がサラリーマン化して声を上げなかったために、残ったのがこのデジタル改革なんです。

それで、2011年にデジタル化するんですが、秋田ではどうなるか分かりませんが、東京なんかでは大混乱が起こると思います。東京タワーから新東京タワーに移るんですね。これも意味なく移るんですが、アンテナの向きが全部違うんですよ。ですから、家のアンテナも全部変えないといけません。これは大変なことなんですが、そういうことは、今はひた隠しに隠しています。「2011年でアナログ放送は終わります」と言っていますけれども、実際は終われないんですよ。アンテナの向きを変えるだけでも、半年以上かかるんです。ですから、2012年までやらざるを得ないんですが、今はそういうことは言いませんよね。混乱が起こるので、何のためのデジタルなのかということを問わないようにしているんですが、このデジタルというのはあまり意味がないんです。

それより、私がテレビに関してすごく言っているのは、お国にも異議を申し立てて色々とやっているんですが、ＮＨＫ問題の解決についてです。ＮＨＫの経営問題、これは経営したことがない人達がやっているので訳が分からなくなっているんですが、ＮＨＫの受信料は大多数の方に払って頂いていますが、一部の方が払っていないことは確かです。これは罪なんですけれど、罰則は特にありません。「あなた、これは罪ですよ」とは言われますが、後は何もないんです。罰則をちゃんと決めないと、受信料を払っている人が馬鹿だと思われますし、払っていない人も何か後ろめたいし、変なんです。つまり、今の人達はちゃんと決めることが出来ないんですね。決めるとそれに反対者が出て嫌なので、自分の時代ではない時に決めてもらいたいんです。そうすると、全部決まらない。それから「アメリカの通りやっていれば良かった」という、何年か前の考えが大きく崩壊してきています。今はもう、大きく崩れていると思います。日本も、どうやって良いか分からなくなってきているというのが本音だと思います。

不況というのも最近やっと聞かれるようになったんですが、今年に入った時から大不況が来ているんです。これは、テレビの「スポット」というのを見て頂いたら分かるんですが、ＣＭ

を流したいというところが、ほとんどなくなってきているんです。どうしてかと言いますと、経営が上手くいかないと、１番最初に宣伝費をカットしますよね。それで、ＣＭを流したい企業がなくなってきているんです。今、すごい勢いでテレビ局の経営が悪化しています。我々の業界では、テレビ局だけはいつも良かったんです。映画においては、アメリカだけはいつも良かったんです。その柱が全部崩れてきてしまっています。それと同じように、色々な業界も全部崩れてきています。

この大きな不況を、どうやっていくのかということがあります。ちょっと生意気なことを言いますと、私が自分の会社の社員に言っていることがあるんですが、それは「成長なんかするわけないじゃないの」ということなんです。皆は「は？」って言うんですよね。「もう少し成績を上げろ」って言うのかと思うかもしれませんが、そんなことはないんです。どうしてかと言うと、日本の人口は減っていくんです。どんどんピークの時から減っていって、「減っていくのに成長していくっておかしいじゃないか。現状維持で十分だよ、これ以上会社を大きくするには外国に出て行くしかない。映画産業で外国に出て行けるのか」という話をするんですね。例えば中国みたいなところで、映画産業でこっちが儲かるようなことは何もないんですよ。アメリカでも儲かりません。

けれども、アメリカが面白いんですね。日本に企画がないのと、それ以外に憧れていたアメリカは、日本映画のリメイク、要するに同じものを作るようになってきたんです。悲しい思いで一杯なんですが、日本の真似をするようになってきてしまいました。中国なんかは、映画産業においては商売的には最低の国なんですね。仲良くしてもしょうがないので、映画業界は全然仲良くしないんです。

とりあえず不況ということですが、２年前までは皆がデフレで不況だと言っていたんですが、あれはどこにいってしまったんでしょうね。最近また不況だって言われていて、何がどうなっているのか分からないんですが、実は企業とは別に、個人的にはあまり不況ではないんです。何が不況の原因かと言うと、皆さんがお金を貯めて使わないことです。けれども、使わなくて良いんですよ。使えというのではなくて、将来に全く安心出来ることがないからこうなったんです。

今の若者の調査についてですが、我々はこういうことに、すごくお金をかけて調査しています。我々の時代は、お金がなくても車が欲しかったんです。私が20歳の頃は、とにかく車を持ちたかった。今の若者は、車は一切いらないという意見が、アンケートでものすごく多いんです。何をしているのかと言うと、貯金しているんです。私達の時代に貯金というと、私は20歳の頃、通帳がなかったんですよね。今の若者は、頭がすごく良くてバランスも良いんです。それで、将来に対して不安なので貯金しているんです。そのために、逆に面白くない人間ばかり育ってしまうんです。本当に、そういうことも不況の大きな原因なんですね。

映画でも先ほどお話しましたように、「携帯やインターネットでお金がかかるから映画に来てくれないんだ」と我々はずっと思っていたんですが、映画の料金なんか全然平気だって言うんです。それで、「携帯電話をやっていたいから行かないんだ」って言われて、もっとショックだったのが先ほどの話なんです。若者は、すごく真面目になってきていると言うか、整い過ぎています。ですから、我々はもうちょっと破天荒な、色々なことをやっていく若者を応援してやらないといけないのではないかと、私なんかは思っています。この産業を変えていくには、やっぱり個々がもう少し安心出来るように、今の政府は将来像だけはちゃんとしないといけな

いのではないかと、常々思っているんです。

政党の中には仲が良い人もいますが、自民党か民主党か、または共産党か、私はどこでも構いません。あまりこういうことは言えないんですが、はっきり言うとどこでも支障がないんです。しかし、どこでも良いとは言っても、やっぱり将来のことはきちんとしなければいけないと思うんです。今でも結局、国が財政的には破綻気味になっていますけれども、どうやっていくのかということを論議しているほうがおかしいんです。皆さんの家計だってそうでしょう、入ってくるお金より多く使ったら赤字になって、サラ金にはまって潰れていくしかないんです。個人も企業も、国も一緒ですよ。当たり前のことが、当たり前として進んでいきません。私は、お金を使うなと言っているわけではないんですが、普通の経営感覚が国の中にあるなら、どうすれば良いかというのはおのずから分かってこないとおかしいんです。どうしてこんなことを論議しているんだろうと思います。

それで、皆さんの前に示されているプライマリーバランス、要するに支出と収入を2011年までに一緒にしましょうということですけれど、実は金利が外れているんですね。「金利も入れないでおかしいじゃないの」とは言うんですが、今どれだけ皆さんの税金が、国が借金しているところにそのまま金利で払われているかということです。それがいかに多いかというのを言わないために、金利を外して収支バランスを合わせているんです。そうすると、永久にマイナスになる訳でしょう。それで、「金利の分はどうしたんですか」とは言うんですけど、全くその場の話になっているんですよ。会社を経営させて頂いている我々企業家は、金利を外して「合わせてトントンです」と言われても、「馬鹿じゃないの」ということで、どんどん赤字になるだけだという話なんです。ですから、やっぱり国と企業が一緒かと言ったら問題があるんですが、そういうことはさて置いて、国の力において、やりたくもないデジタル化に皆が向かっています。

面白いんですが、デジタルを上手く使うことが出来たのが、実は映画界なんです。これは革命的にありがたかったんですが、昔は出来なかった映画が、日本映画で沢山出来るようになりました。他社になりますが、この間も「Always―３丁目の夕日―」という映画で、東京の昭和30年代の街並を再現していました。昔は、これをセットで造ったりしたら大変なお金がかかって、「こんな企画を出すほうが馬鹿だ、いくらかかるか分かってるのか」と言われるような話だったんです。今では、ミニチュアを作ってデジタル加工することによって、本物と遜色のないものが出来るようになったんです。どういうことかと言いますと、映画界に革命を起こしたデジタルというのは、アニメーションと同じようになってきたんですよ。自分で描いたり、自分の想像の世界を作って、そこに当てはめていくことが出来ます。家屋はどうしているのかと言うと、昔の写真から起こしていくんです。それによって、今のようなことが出来るようになったんです。

アメリカも、昔のようにものすごくお金をかけて街１つ借り切ってやったとか、そういうことは一切止めてデジタルになりました。昔は国を借り切ってやったこともありましたが、全部デジタルを使ったほうが得だという話になってきて、今では全部デジタルなんです。これによって、アメリカ映画と日本映画の差が一気に埋まってしまったんです。それによって、アメリカ映画が衰退してきたことがあるんですよ。アメリカ映画の衰退の原因は、実はデジタルなんです。日本映画が上がってきたのもデジタルです。これが不思議な現象で、デジタルのすごい現象なんです。

今日映画を観て頂く時は、そういうことはどうでも良いんですよ。観て「ああ、よく出来てるな」と思って頂ければ良いんですが、本当の風景は全部撮影に行っていて、吉永さんも九州をずっと回られています。その中で、きれいだなっていうところが出てきます。干潟、要するに干拓の非常にきれいな画が撮れました。これは本当に良い画が撮れるまで、夕方まで待って撮りました。ただ、ちょっと他のところへ行きますと、何度かデジタルの画があるんですね。見ている人には分からないんですよ。そこはあまり言わないようにしているんですが、昔はこんなことは出来なかったので、我々の世代ではもう大変にありがたいんです。

例えば、秋田駅に車が突っ込むなんて言ったら警察が来て、私達は全員お縄をかけられて、「どうもすみませんでした」ということになるんです。ましてや公共のものを壊したとなると、ここは損害いくらということになります。ですが、今は秋田駅にダンプが突っ込むなんていうのは、デジタルで簡単に出来てしまうんです。「実際にいつ突っ込んだんですか」と言われても、突っ込んでなんかいないんです。全部画面上だけのことで、観ていて本当に「うわあ、すごい」ということになります。これがデジタルというもので、我々映像の世界、つまり映画界にとっては非常にありがたかったんです。

ですから、デジタル化が全て良くないということではなくて、テレビではやりたくなかったんです。何故やりたくないのかと言ったら、そんなことをしてもこの程度の画面ですから、デジタルでもアナログでも、あまり差が出ないんです。制作費３千万円だったら、３千万円の画でしかないんです。３千万円の画を、デジタルで見せてもアナログで見せても、実際はあまり変わりません。ニュース番組をデジタルで見せて、アナウンサーの顔とか毛穴が良く見えるくらいで、そんなのあまり見たくない訳でしょう。2011年になってくると、そういうことが現実に起こってしまう訳です。良く映るカメラで、全部撮るようになりますから。

色々と問題はあるんですが、皆さんはときどき録画をされていると思うんですね。デジタルになるとどうなるかと言うと、コピーとは言わなくなって、今度はダビングと言います。今まではコピーワンといって、我々はコピーは１回しかしていないんです。これは、著作権を持っているほうがうるさいからです。それで、今度は消費者団体がうるさいので、総務省が10回まで良いということになったんです。どうして10回まで良いのかって、我々は今でも１回ということで反対しているんですが、皆さんにとって何が１番良いのかと言えば、全部フリーで使わせてくれるのが良いということになると思います。実際に、例えばテレビドラマがあるとすると、それを10回もコピーしてどうするのかと思ったら、本人がとっておきたいんです。

１本で良いじゃないの、何で10本なのかという話になると、これは慶応大学の某教授なんて言ってもすぐに分かると思いますが、その人達が中心になって考えた案なんです。実際にコピーするとなると、１つは最近 iPod というのが出てきてるんですよ。あとは携帯が１つ。それから、今までの各家庭にある録画機です。今は昔と違って、出口が３個あるんだということです。そして、大体日本の世帯は両親と子供１人の３人家族だということで３×３＝９、それにプラス１回で10回だと言うんです。それを半年かかって協議しているので、「あんた達は本当に大学に行ってる頭なんですか」と私は申し上げたんですが、非常に低レベルなところで決まっています。結局何なのかというと、私達はそれがいけないと言っているのではなくて、こんないい加減な決め方で決まっているから、後々問題が起こるんだということです。

これによって、違法な人達はどうなるのかと言えば今からです。結局、それに対する法律は全く出来ていないんですね。この前もお話したんですが、盗作防止法案という法律があります。

これは安倍首相の時代に法制化して頂いて、大変助かっているんですが、以前は映画館の中で映画を録画する人が沢山いたんです。録画してどうするのかと言うと、外で売ったりインターネットにアップロードしたりするんです。こんなことは許される訳ないんですが、これを禁止する法律がありませんでした。それで盗作防止法案、つまりお客さんの間でも大変迷惑になりますし、これだけは法律を作って下さいということで、急遽作って頂いたんです。

著作権の問題からも当たり前の話になっていますが、この法案を今、本当に守って頂いているのは日本だけなんです。アメリカなんかでは、まだ違法行為が止まらずに大変なことが起こっています。まして中国では、違法行為が当たり前になっているんですね。日本だけは守って頂いて、我々は大変ありがたいんです。この法律が出来てからは、本当に違法な撮影をする人がいなくなったんです。

実は先日、仙台である人が捕まりました。この人がどれくらいの罪になるか問題なんですが、今アメリカでやっている「WANTED」という映画を、アメリカのインターネットから引っ張ってきまして、自分で翻訳して日本語を付けるんです。これが有名な人で、プロより上手いんですよ。それで、自分の腕を皆に見てもらいたいんです。これはある種の愉快犯にも等しくて、その人にとって１つもお金になっているわけではありません。何故こういうことをするのかと言うと、要するに自分の発表の場として、インターネットを使っているんですね。今は盗作防止法案があるので、それで捕まえることが出来るようになりました。

私がもともと言っているのは、映画の土臭い話をしているのではなくて、この間から言われている自殺サイトであるとか、それから殺人依頼サイトなんていうのは、社会的にどう見たっておかしい。表現の自由ではありません、こういうのは規制する法律がないとおかしいということを、前から言っているんです。法律を作る前に、こっちばかりが動いてしまうために、隙間が出てきているんです。こんなのがどんどん横行してきて、やっと昨日、児童ポルノで逮捕された人が出てきました。今まではそれも逮捕出来なかったんですが、そういうサイトを作ること自体が間違っているということです。逆に言えば、私なんかは表現の自由ということについて、「良いじゃないの」と言うべき立場の人間なんですが、そういう人間がおかしいと言っているんですから、仲間と一緒に自殺しようなんていうのは、誰が見たって社会的におかしいと思うんです。

ですから、インターネットというのは法律をきちんとしていかなければいけない。規制緩和と同時に、やっぱり法律を作っていかなければいけないんです。規制緩和自体が悪いわけではありません。ホリエモンにしても何にしても、法律がないためにこういうことが起こったんですよ、という話です。ですから、規制緩和と同時に法律を作っていくんです。アメリカの言う通りではなくて、日本は日本流の考え方を作っていかなければいけない時代にきたのではないかと思います。

それと同時に、映画はアメリカから脱却して、日本映画らしい映画となりました。これがどういう評価を受けるかについては、日本映画ではないかと思う映画を、今回ここにお持ちしましたので、皆さんに後でご講評願えればと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

橋　元　岡田裕介先生、素晴らしいご講演を誠にありがとうございました。ご来場の皆様、岡田先生に、今一度盛大な拍手をお願い致します。(拍手)

[講　演]

ノースアジア大学　総合研究センター主催　講演会

「岐路に立つ日本の政治と経済」

講　　師　白鴎大学教授・立命館大学客員教授
　　ノースアジア大学総合研究センター客員教授　　福　岡　政　行

司　　会　ノースアジア大学経済学部長
　　本学総合研究センター長事務取扱　　藤　本　　剛

日　　時　平成20年11月４日　午後１時～２時30分

会　　場　ノースアジア大学40周年記念館２階271番教場

藤　本　皆様こんにちは。本日は、ノースアジア大学総合研究センター主催のシティカレッジにお越し頂きまして、誠にありがとうございます。福岡政行先生の、平成20年度後期シティカレッジ第１回目のご講演でございます。改めてご紹介するまでもございませんが、福岡先生は白鴎大学法学部教授でいらっしゃいまして、立命館大学客員教授もなさっています。そして、ノースアジア大学客員教授として、これまでにも数々のご講演をされていらっしゃいまして、毎回参加されている方も多いのではないかと思います。

また、福岡先生は本学で自主ゼミナールも開講されており、学生はもとより、現役でバリバリ活躍されている方も含めまして、幅広い年齢層を対象にゼミ指導をなさっています。本日は「岐路に立つ日本の政治と経済」というタイトルでご講演頂きます。世の中どうなっていくのだろうというような激動の時代でございますけれども、的確な助言を頂けるものと期待しております。どうぞ最後までご静聴頂きたいと思います。それでは先生、よろしくお願い致します。

福　岡　昨日、いなほ５号に乗って、新潟から秋田まで４時間弱かかりました。そうしたら、右肩がおかしくなって「五十肩だ」と思ったら、大学の職員に「六十肩です」と嫌みを言われて、そんな状況で60です。それで、今日は黒板に字が書けないので、汚い字ですが一応レジュメを書いてきました。ミミズが這っているわけではないので、これを是非見て頂きたいと思います。

それでは最初に、今日は大学生が何十人か参加していると思いますが、これから10年、20年後、君達がおそらく50歳くらいになる頃、「あの2008年の秋、あれがやっぱり歴史の転換期だったんだ」という風にきっと思い出す、その序幕についてお話します。序幕はおそらく、あの郵政民営化選挙です。ＴＢＳは秋田では放映されていないんですが、久米　宏さんが水曜の夜10時の「テレビってヤツは!?」という番組を始めて、数週間が経ちます。実を言うと、明日はホリエモンが出てくるので、私も出ろと言われていますので、今日はちょっと急いで帰ります。報道ステーションと同じ時間帯の「ＴＶタックル」を作っているオフィス・トゥー・ワンが製作している番組です。

その関係で、ケーブルテレビを見られる方はお分かりかと思いますが、明日の夜10時からＴＢＳでやります。おそらく、ホリエモンが六本木ヒルズに出てきたあの時が序幕で、これから先１～２年、後で触れる今回の金融危機は1929年のようです。けれども、あの時はほとんどサドンデスというか、数ヶ月で全世界に広がりました。ヨーロッパは戦争状態で、ヒットラーが出てくる直前です。３番で触れますが、今回の不況は一言で言うと、ジワジワっと効いてくるボディブロー型です。不況はアメリカ発ヨーロッパ経由で日本に来ていて、今日株価は上がって９千円台に回復していますが、おそらく３歩後退２歩前進、もしくは３歩前進２歩後退のような形で、１万円位まで戻ってまた下がるというようなことだと思います。このボディブロー型について、日本には特殊要因があります。それは、私がノースアジア大学の客員教授を受けた最大の理由の一つである、人口減少という問題です。それから、おそらく日本にはジワジワ不況が来るという時に、結論は後でオバマの話をした時に言いますが、完全にアメリカの時代は終わった。そして日本史的に見ると、おそらく自由民主党による一党支配というものが終わって政界再編になると同時に、日本で初めて政権交代がかなり確実に行われて、それが大きな変わり目になるということです。明治維新の時は、篤姫に出てきているように、日本国内で徳川幕府から天皇へ大政奉還がありました。そして昭和20年８月15日、これは戦争が終わって新しい時代になるということでした。ところが2007年のサブプライムから2008年のリーマンショッ

ク、おそらく来年はもっと大変だと思いますが、この２、３年でアメリカの時代が世界的に終わり、資本主義というものが新しい形になって、ある程度ルールを決めないといけません。最後の消費国、いわゆる最後のファンドを持っていたアメリカでは、今日のゼネラルモーターズ（GM）の前月対比が40％ダウンと出ていました。そして、公的資金を導入するとも言っております。アメリカはやはり自動車生産におけるビッグスリーの国で、少なくともゼネラルモーターズという会社に公的資金という名の税金を投入しなければ、おそらくもたないでしょう。不良資産が５兆数千億円もあると言われています。そういう風になると、明らかにアメリカの時代は終わり、ものづくりを全く忘れたこの国ですから、私は結論的にはパンドラの箱を開けてしまったような気がします。それから、もう去年から触れているハゲタカファンドです。このようなことを含めて、世界史と日本史の大きな変わり目のような感じがするので、これからがとても大事だということを感じています。

実を言うとリーマンショック以来、ちょっと思い出したことがあります。ホリエモンが大阪近鉄バファローズの買収失敗やプロ野球新規参入で楽天に敗れて、その後に仕掛けたのがニッポン放送株の取得、つまりフジテレビの買収です。この時、ホリエモンに資金を800億円渡してファンドを提供したのは、リーマン・ブラザーズです。私達はテレビ朝日にいましたから、あの六本木ヒルズの中に、リーマン・ブラザーズと世界最大のファンド、ゴールドマン・サックスの２つが入っていて、リーマンはこの９月に破綻し、ベアー・スターンズがご案内の通りこの４月です。そう考えてくると、やっぱりあの時が始まりであって、ちょうどその頃からノースアジア大学の客員教授を始めたんです。当時の講演会でも言いましたが、東京地検特捜部長大鶴基成は鹿児島ラサール高校出身で、東京大学法学部出身です。六本木ヒルズに問題があるとして、国策捜査と言われているが、このエリート検事はホリエモンをターゲットにして、全国からパソコンが得意な若き検事を集めて、ライブドアの内部を全部チェックしました。

明日の番組で、私は思い切ってホリエモンに、「あなたは警察に捕まると思ったから、あの2005年の８月に衆議院選挙に出ようと思ったんじゃないの」って聞いてみようかと思っているんです。彼は怒って帰るかも知れませんが、国会議員になってバッジを付ければ、少なくとも簡単に逮捕は出来なくなります。東京地検は国会に対し、何の理由で国会議員を逮捕するのかという許諾請求をしなければいけないんです。そのためには、ある程度情報を公開しないといけません。大鶴基成は、東京大学法学部の５年生の時に、司法試験に一桁で合格したと言います。個人情報ですからそれ以上は分かりません。東京大学法学部は皆、仲間意識が強いんです。約700人位なんですが、卒業生は同窓会や同級会をしょっちゅうやっていて、それは人脈づくりのためなんです。その時にこの大鶴基成という男は、「私はこれから同級会、同窓会にはもう出ない。将来、君達と敵味方に別れる日が来るかも知れないから、しがらみを持ちたくない」と言って、以来東京大学の同窓会には出ず、東京地検の検事として、検察の一員としてやっています。その時、48歳だったと思いますが、たまたま六本木ヒルズのあの事件にぶち当たります。当時、私の後輩が検事をやっていて、ゼミのＯＢ会では何も言いませんでしたが、カラオケを歌った帰り際、「先輩、大鶴さんはとにかく仕事の虫です」と言っていました。夜の８時くらいまで桜田門で仕事をして、その後若い検事を連れて新橋のガード下まで行き、鹿児島の人ですから焼酎を飲んで、そして頑張ってやって村上世彰、ホリエモンを叩いていったという話です。あの時に、日本のいわゆるバブル的なものはある程度収まったんです。この時、村上世彰に最初に90％の資金提供をしたのはオリックスの宮内義彦ですから、そのお金で村上ファ

ンドが出来て、阪神や阪急のデパートうんぬんという事件がありました。最近、高島屋さんが阪神、阪急を買収したというか、合併することになりました。阪神と阪急だからエイチ・ツー・オーとかいうんだそうですね。実を言うと、もうその頃から阪神、阪急は高島屋にラブコールを送っていたんだそうです。こんな駅前の一等地で、しがない阪神デパートをやっていてもどうなのかということです。あれをやったのは、オリックスの宮内から金を預かっていた村上ファンドですよ。

村上世彰は名門灘高校から東京大学法学部に進み、通産官僚をやった人です。そのような者がリーマン・ブラザーズにお金を貸し、リーマン・ブラザーズからお金を借りたホリエモン。そして、そのリーマン・ブラザーズが破綻しました。アメリカに本拠地があり日本にも関連団体がある、ＡＩＧという世界最大の保険グループがありますが、９兆円の公的資金の導入が決まりました。これもカラクリがあるんですよ。今の財務長官はヘンリー・ポールソンですが、彼の前職はゴールドマン・サックスのＣＥＯ、つまり社長さんです。彼とＡＩＧのトップは友達だったため、９兆円の公的資金の導入が出来たんです。その時、ＡＩＧグループの幹部が、カリフォルニアのリゾートホテルに泊まっていたんですよ。ホテル代は４百数十万円です。それも許したくないけれども、その時に２百数十万円かけて、あの60歳～70歳のジジイ達がエステに行っていたんだそうです。メタボリックか顔の皺かは知りませんが、２百数十万円ですよ。これだから、アメリカの議会で皆が怒ったんです。公的資金というのは税金であって、投資顧問会社や証券会社はともかくとして、どう見たって保険で潰すことは出来ませんよ。けれども、リーマン・ブラザーズを潰したことで世界中がおかしくなってしまいました。

先週、トヨタの下請けのある福岡県の宮田というところを通りました。ワンルームマンションは全部電気が消えて、近くのコンビニの売り上げは３割減だそうです。いわゆるパート、非正規職員は全員解雇され、ワンルームマンションから出て行ってしまったんです。この人達は若い20代、30代ですから、おそらく食事はコンビニですよね。このようなことが、これから日本の社会にジワジワっと増えてきて、失業者はおそらく約200万人くらいになるでしょう。この後、２年間は増えていくだろうという判断が、一部ではなくかなりの人達がそういう風に思っています。

今日は何となく暗い話で始まりましたが、最後だけちょっと明るい話になりますので、これからはレジュメに沿って話をしていきます。

１番目ですが、いよいよアメリカ大統領選挙です。明日の昼過ぎにはだいたい分かると思いますが、この段階で10ポイントの差が開いています。黒人の場合には「ブラッドリー効果」というものがあって、嘘を付いたり本当のことを言わないというような人種差別が、かつて10何年前には底流にあったんです。正確ではないんですが、これから10年～15年で、マジョリティーズがマイノリティーズになります。つまり、肌の色がカラードの人間がホワイトの人間よりも数が増えるということです。アメリカでは、ホワイトがマジョリティーズですよね。私達はアジア系で、カラードですからマイノリティーズです。ヒスパニック系、アフリカ系というように別れているんですね。北京オリンピックを見ると、陸上のアメリカの選手はほとんど黒人ですが、水泳だけはほとんどいません。私達がハワイで泳いでも別にどうということはありませんが、東海岸に行くとちょっと嫌な顔をされて、私もジャップと言われたことがあります。私なんか結構色が白いほうですけれども、関係ありません。けれども、そういう時代は終わったんです。パウエル国務長官が大統領選挙に出ようと思ったのは、湾岸戦争の後ですから、今か

ら10何年前の話ですよね。それから、ヒスパニックや黒人の子供が産まれたり、移民が多かったりして、マイノリティーズが48%、マジョリティーズのホワイトが52%です。もう、後10数年でひっくり返るということを考えれば、おそらくこのまま、意外な大差でオバマ大統領が出てくるだろうと思います。彼の言う「１つのアメリカ、黒人や白人のアメリカではない、皆のアメリカだ」という演説が、４年前に民主党のコンベンションで話された時、次はオバマだろうというのが、もう民主党関係者の中にありました。ですから、最近のニュースを見ると、トゥギャザー（Together)、つまり皆で一緒にやろうよということですが、アメリカ国内に亀裂が生じてしまった中で、人種や貧富の関係なく団結するアメリカみたいなものがうけているのでしょう。

１つだけ良いことは、オバマならイラン攻撃はしないだろうということです。今までのアメリカは、経済的に苦しくなったら間違いなくどこかで戦争をやりました。ブッシュは親子で２回やっています。敵はアルカイダかアフガニスタンですよ。大量破壊兵器はなかったんでしょう。けれどもあの時、色々ありましたがイラクの攻撃に入ったんです。北朝鮮は、もうちょっと金正日が病気だということが分かれば良いんですが、残るところ、悪の枢軸はイランしかありません。イランはどうも核を徹底的にやっている。だったらイスラエルが叩きに行って、アメリカが一緒になってやるのか、それともイスラエルは防御に回るのかということがあります。しかし、オバマは話し合いをしようという姿勢の人ですから、これはないだろうと思います。おそらくアメリカ人も分かっているでしょう。もしマケインや共和党になったら、アメリカは経済が苦しくなったら戦争ですよ。そういうところは、少なくともブッシュ親子とは違います。

オバマという人間は、相当死ぬこと、つまり暗殺を意識していると言われています。アメリカ社会の中には様々な団体があって、ケネディーの時も同じでした。そう考えていったら、オバマが正式に大統領になるまで、大統領に当選してから来年の１月まで時間がありますよね。この間はもちろん警備が付きますが、大統領になれば、それはもう警備は万全ですから、多少のピストルなら跳ね飛ばすような防御をします。彼は、それでもやっぱりアメリカという国を変えなければ、「Change We Can」という言葉を自ら言い続けていて、そういう精神を持っていると言われています。直接話したことがないので分かりませんが、そういうところが周りの人間を動かしていると言われています。

戦争はしませんが、アメリカを救えるかというと、私は難しいと思っています。アメリカはものづくりを忘れてしまったので、実態経済はきっと悪いです。相当深刻です。アメリカは国民全員が保険に入っている訳ではなくて、３億人のうち４千500万人が保険に入っていないんです。６人に１人の割合です。今から20年前、私が留学をしている時に、エイズに苦しんでいたり、あるいはかなり重度の障害を持っているマイノリティーズのホールを訪ねました。彼らは「先生、私達は金がないから、ただじっとして死んでいくしかないんだ」という風に言っていました。アメリカは自由診療ですから、お金持ちは良い保険に入って、沢山良い診療を受けられますが、貧乏人は虫歯１本治すのに20万円もかかるんです。そういうことで私は、おそらくオバマは大統領としては失敗して、やっぱりアフリカ系アメリカ人では駄目というような意見がアメリカ社会の中から出てきて、４年後はまた共和党になるかも知れません。ですからアメリカの時代は、もう簡単にはバックしないと思います。ＧＭがここまで来たということからも、時代の変化だという風に考えて頂きたいと思います。

２点目です。あまりこの話はしたくないんですが、田母神俊雄は航空幕僚長という偉い人ら

しい。しかし、これ今の各社の論評聞いていると、これはクーデターじゃないですかね。私は一種のクーデターだと思っています。退職金は、６千万円ですよ。私は今、公務員に相当きついことを言っていて、今日この場にＯＢはいるかも知れませんが、現役はいないものと思って言いますが、退職金６千万円は少なくとも国会で決議をしたんです。

おそらく昭和天皇も、侵略戦争でアジアに大変な迷惑をかけたというお気持ちがあったんでしょう。昭和30年まで、昭和天皇は皇居にはお住みにならず、半蔵門の御文庫に住んでいたんです。御文庫というのは、基本的には防空壕なんです。後で分かったことですが、「皆が苦しんでいる中、自分だけ楽は出来ない」と言って、最終的には皇太子、つまり平成天皇がご結婚されるまでは、随分そちらで暮らしていたという話も聞いています。

しかし、田母神が航空幕僚長をやっていて、あの論文とアパホテルがどういう関係かは分かりませんが、50人以上の自衛隊関係者があの論文集に応募し、当然航空幕僚長が最優秀賞をとって、300万円も貰うそうです。私は、それは個人の作業なので貰って良いと思います。けれども、一般の職員は60歳定年だから11月３日で定年ということになり、昨日背広姿で出てきた。更迭じゃないので退職金として６千万円貰える。今でも、私は侵略戦争は濡れ衣だったと思っているんです。しかし日本の航空幕僚長というのは、昔で言えばトップの空軍大臣みたいなものです。その人間が、国会の議決に反する発言をする。これは文民統制、シビリアンコントロールに反します。無視されて官邸が頭にきたっていうんだったら、退職金を投入することを停止すれば良いんです。どうしてこのところ、こんなに甘いのか。背広を着たら個人として何を言っても良いです。少なくともその職にいる時は、公務員として国の方針に順ずるべきでしょう。ましてや自衛隊です。防衛庁は、少なくとも官邸の動静を見て、麻生も辞めるんだろう、福田も辞めたし、阿部も辞めた。彼らの言うことなんか聞きたくないと思っているのでしょうか。これはやっぱり、私は簡単には済ますことは出来ません。これで本当に簡単に済むんでしょうか。ちょっとこの点は取り上げたくはなかったんですが、この田母神という人のやり方は防衛省のクーデターで、これを本気でやるんだったら二・二六事件のようですね。威嚇が背後にありますし、文民統制の中で自衛隊はあって然りですよ。自衛隊は反対しません。けれどもこういうやり方が、あの斎藤隆夫演説ではありませんが、聖戦の美名の下にどんどん軍事費を増やしていって、結局日本は収拾の取れないところまでいってしまったという部分があります。これはもう、戦前の歴史を見ればこういうところから始まるのかなと思ってしまいますので、右も左も関係なく、ちょっと考えて頂きたいと思って２番目にお話しました。

３番目は世界同時株安についてです。、冒頭でも触れましたが、前期シティカレッジの講演の時に、サブプライムの話をしました。ファンドやファイナンスが原油の先物を買い占めていったという話をしました。あの時は100何ドルでしたが、今は60何ドルです。小麦も半分になりました。つまり、ほとんどが元の値段に戻ったんです。しかし、昨日のテレビでもやっていましたが、１億５千万人を越えるアフリカの子供達が飢えに苦しんで、自分の顔にたかるハエすら追い払うことの出来ない状態で、今日明日の命を待ち続けています。これだって、やっぱり先物として手を出した小麦、とうもろこし、サトウキビが影響しているところがあります。それが皆さんの年金であり、投資信託であるということを前期に話しました。

前期に触れなかったのが、投機マネーです。投機マネーは、現在二京円あると言われています。これを財務省の後輩に聞くと、「使ったことがないんで、ちょっとピンときません」と言われました。２京円は、簡単に言えば２万兆円です。私のゼミの後輩に寺島実郎というのがい

て、よく朝の番組に出てきて言っていますが、このお金が世界中を巡っていて、実に４分の１が日本のお金、いわゆるジャパンマネーです。ですから、皆さんのお金で石油や小麦を買い占めて、結局は自分の首を締めている訳です。けれども、ちょっと行き過ぎたなと思ったので、ぱっと60ドルに下がりました。この後、間違いなく上がってくるということは、前期の講演でも言ってきました。

それで、最大のレバレッジはいくらでやりとり出来るかと言うと、400倍までいけます。100万円までだったら棄てても良いという人がいたら、３年前はゴールドマン・サックスに100万円預けると、「石油の先物をやりましょう」ということになります。400倍ですから、４億円の勝負が出来ることになりますよね。駄目な時は夜逃げすれば良いということで、４億円で、１バレル30ドルの石油の先物買いをやったんです。しかし、７月に売ったら170ドルで、４月は30ドルだったものが約６倍です。そうすると、４億円は一応元金ですから24億円になって、返したとしても20億円あります。そして、こういうものの税金は１割ですから、２億円引かれて18億円になります。こうやって、金融工学を徹底的に使ってやり出したんです。

ところが、経済が右肩下がりになったら皆おかしくなってしまいました。これから出てくるのがレジュメに書いてあるＣＤＳです。ちょっと汚い字ですが、クレジット・デフォルト・スワップと読みます。簡単に言うと信用がデフォルトした、つまりおかしくなったという意味で、担保に置いてあった信用保証が駄目になったんです。スワップはスワッピング、交換という意味ですから。そこでもって、やりとりを皆でやろうというような商品があって、簡単に言えば潰れた時のネズミ講なんです。これが今週の週刊誌に出ていますが、とんでもない日本の企業がものすごく沢山持っているんです。これから潰れかかって危ないところがどんどん出てきて、リーマン・ブラザーズなんかに預けていた品川駅の京浜ホテルや農林中央金庫は、おそらく相当やられているでしょう。

こういうようなことを含めて、農林中央金庫の理事長は給料４千万円、農林水産省の元次官は退職金が７千万円です。結局、60兆円くらいの農家等のお金を運用していて、私の友人は「あれやっていると危ないよ」と何年も前から言われて、相当焦げ付いていました。新銀行東京くらい危ないということです。もう本当に、来年の３月になったら後から入れた400億円だって危ない。こういった問題がどんどん出てくると、金融危機は簡単には収まらないということだけは、是非頭の中に入れておいて下さい。これが、冒頭に触れたアメリカの時代は終わったという部分に繋がってきます。

株については話し出すときりがないので、レジュメに触れるだけにしておきます。１番上に書いてあるのがアメリカへの出資、今年の４月20日、BS 朝日の番組で竹中平蔵が言っていることを２点言います。これはベアー・スターンズが破綻した時の話で、世界の金融機関でお金がなくて、お金が動かなくなったんです。日本郵政が出資すれば良いということだったんですが、要は皆さんの郵便貯金のことです。日本郵政はもう民間ですから、ＳＷＦでない300兆円があるから出資せよということです。ＳＷＦというのはソブリン・ウエルス・ファンドと言って、政府のお金という意味で、特に中東のお金のことを指します。それからもう１つ、彼はこの時に重要なことを言っているんです。世界最大のＳＷＦ政府ファンドは、日本の年金基金であると言っています。皆さんの年金は、数百兆円です。「共済年金、厚生年金、国民年金等を使えば良いじゃないか」と、テレビ朝日系の「朝日ニュースター」という番組だったと思いますが、その中で言っています。それから、「カンブリア宮殿」というテレビ東京系の番組があ

ります。こちらでは映ってないんですが、その番組の中で「市場原理導入はあなたがやってきたんじゃないですか、竹中さん」という風に司会者が言ったら、「でも、私は公的資金も注入しましたよ」と、聞いたほうも作家でしたので、それで逃げられてしまいました。公的資金が駄目な時は税金を使い、自由な時は市場原理で勝つ者がどんどん勝って、負ける者がどんどん負けていけば、「秋田県は早く死んで下さい」と言われているような感覚でしょう。

私は初めて仁賀保という駅を通り、そこで初めて、駅前にＴＤＫがあることが分かりました。昨日は休みだったので、人っ子１人歩いていませんでしたが、企業が本当に秋田県に来るかどうかは、なかなか厳しいところがあるかも知れません。４月の段階で、まだ竹中はこんなこと言っていますが、市場原理を導入して好き勝手にやってデタラメになってしまったんです。リーマン・ブラザーズなんかは中身がないということで、ピーマンなんて言ってきました。私達はまだ気付いていたので言っていました。大鶴基成も気付いていたんです。けれども、前にも触れたように、森田実は全くテレビに出られませんでした。今だから言いますが、私にもかなり圧力がかかりました。皆さんもテレビを見てお分かりのように、私が発言しようとすると、必ずギャーギャー言う人がいましたね。今はもういませんが、そういうことです。ファンドというのはお金を持っているので、テレビのコマーシャルの影響力もあるんです。「小泉や竹中、そしてオリックスの宮内に逆らうやつは辞めたほうが良いんじゃないの」と、やっぱり圧力がかかるんです。今だからこうやって自由に言えるという部分もありますが、私達は信念を持ってやっていますから、そういうことはドンドン言います。これが４月の話です。

2005年７月の『ウォールストリートジャーナル』、これはアメリカの『日本経済新聞』みたいなものですが、衆議院で郵政民営化が否決された時のことです。平沼赳夫以下30数人が反旗を翻しました。この時、ウォールストリート・ジャーナルの新聞は、「これで３兆ドルは、しばらくお預けである」としています。これは、竹中の言う郵便貯金のお金のことです。しかしその数行後、「しかし小泉は頑張るだろう」となっていて、つまりウォールストリート・ジャーナルは、解散することを知っていたのかも知れません。「否決されてもやるぞ」と、ブッシュに言っていたんでしょうか。「郵政を民営化して日本からお金を借りたい」ということが、対日改善要望書の中にもありますが、アメリカの言いなりですね。

総選挙のある2005年９月のある日、ホリエモンが「郵政が民営化すれば、経済も年金も、外交も上手くいくんだ。あの時、竹中平蔵と選挙をやってたんじゃないですか。記憶を戻して下さい、竹部なんて俺達の兄弟だ」なんて、訳の分からないことを言っていました。ですから、レジュメでは「時代の寵児？」にしてありますが、時代の寵児じゃなくてピエロだと思います。私は、ホリエモンはむしろ気の毒だと思います。

一応、ここまではレジュメに触れるということにして、不況はとてつもないボディブロー型で、アメリカの実態経済は簡単には良くなりません。ＧＭも厳しいでしょう。そして、日本のトヨタ、ホンダ、日産は、十分良いです。そのトヨタが下方修正した話は前期にもしましたが、案の定売り上げは95％に減っています。けれども、やっぱりトヨタは先行っています。それから、高島屋が阪神・阪急と組み、昨日はパナソニックがサンヨーを吸収合併しました。これはすごく大きなことですが、そのくらい大変なんだということです。私は、山形県のパイオニアとずっと付き合っていますが、山古志村をボランティアでバックアップして、こんな大きなテレビを貰いました。けれども、そのパイオニアもサンヨーと合併して、日本の企業は合併再編しないともうやっていけないんです。銀行や金融機関も難しいかも知れません。これは、数ヶ

月以内に分かることだと思います。そういうようなことをやっていけば、全額保護じゃなくても良いので、皆さんの預貯金を５千万円まで保護するくらいはまず大丈夫でしょう。普通の人は、せめて全額預金保護ということを言いますが、それが１番の安心だからです。けれども、全額でなくても良いんです。５千万円も持っている人なんて、秋田県に数百人いるかどうかですから。これを是非入れて下さい。

時間を食ってしまいましたが、政治の話をします。麻生さんの景気対策は、全家庭に６万円支給するということでしたが、良いですよね。けれども、1,000万円以上の所得の人にはいらないですよね。所得500万円は微妙ですが、700万円だったらどうでしょう。私は、700万円以上の所得があるところには、この定額給付金制度は、地域振興券みたいなクーポン券になると思います。現金かも知れませんがそれは止めさせて、秋田市役所に行けば、１万円を１万1,000円の秋田市内の買い物券に換えてくれるとしたら、皆さん換えるでしょう。同じことを港区でやっていて、うちの女房が持って行って換えています。所得制限をするということを、今は徹底的に言っています。

それともう１つですが、公務員には支給しません。後で公務員についてやりますが、秋田県の職員の平均給与は年間691万円です。先週発売の『プレジデント』に、全部書いてあります。、東京都三鷹市職員の平均給与は、45歳くらいで886万円です。公務員は45歳で平均給与が700万円、秋田県は691万円です。それから、おそらく各県の信用金庫や銀行の退職金は２千万円前後ですよ。トヨタ以外のある自動車会社はブルーカラーで1,800万円です。レジュメを見て頂きたいんですが、公務員の三大お得セット、給与700万円、退職金2,700万円、共済年金は25万円より上です。

選挙は即日開票ですから、日曜日に出てきて朝の７時～８時から、夜中の２時くらいまでやるでしょう。実働20時間くらいでしょうか。18時間で、時間給はいくらかというと、日曜出勤で3,050円です。18時間で５万4,000円です。それで、残業代か何かが入って平均５万８千円になります。それを、私の弟子で横浜市長の中田　宏は、市長選を翌日開票にしたんです。翌日は月曜日でしたので、普通の勤務時間の給金で、2,400万円の残業手当代を何とかカット出来ました。偉いですね。こういうようなことがあるものですから、レジュメの最後に出ている税金を払っている人よりも、税金で働く人の方が給与が高いのはおかしいでしょう。私はこの問題を、ある番組で定期的にやろうと思っています。今年、国の税金が５兆円減るんです。企業の法人税が減りますし、皆さんの所得税も当然減ります。消費税についても、少し売り上げが減りますから。５兆円減ると48兆円になって、地方の税金が大体32兆円で、合計80兆円になります。その40%、ちょうど32兆円が公務員の給料で、公務員のために皆さんが税金を納めているんです。

国家公務員60万人のうち、半分は自衛隊です。自衛隊は、良いとします。地方公務員は360万人で、今はもう300万人を切ったと言われています。360万人に32兆円、年間平均で７百何十万円の給料を貰っていることになります。これ以上細かい話は、今日は政局の話をしないといけないので言えませんが、これについて是非考えて下さい。ですから私は、定額給付金は所得が600万円か700万円以上の人にはあげない方が良いと思います。公務員にも、もちろんあげません。それ以外の人に支給すると、６万円は10万円になります。税金を払っていない、年金で生活している人に10万円支給で良いじゃないですか。その代わり、全部クーポン券で支給して、貯金しないで買い物してもらうんです。12月15日から１週間配れば、年末は何か買えると思う

んです。年末に何もないと寂しいですからね。

それで、今日たまたま帰るのは、平沼赳夫先生と夜にちょっと会おうと思っているからです。平沼ニューディール、平成ニューディールを出したいから意見を聞かせてくれと言うんです。私は非正規社員が首を切られている今、仕事を作った方が良いと思っています。300万円までは国がバックアップして、母子家庭等の平均は172万円です。だったら、残りの分の100万円を補助するかもしくは住宅補助をして、100万人の雇用を作ります。どうやって作るのかと言うと、リニアモーターカーを前倒しして東京・名古屋間に造るんです。それから、３階建ての住宅を造るんだったら、156万円のエレベーターを国が補助するんです。私の母親も、右足にハンディキャップがありますから。３階建ての家を建てようとしたら、エレベーターが約160万円だった。それで、「政行160万円頂戴」って言うから、本当はあるんですけれどないって答えて、国が対応するようにする。それから、日本の屋根に太陽光ソーラーパネルを作ったり、ニューディールのようにあらゆることをやって、無駄な道路は造らない。そして、町中の川反の真ん中が空いているんだったら、建物を10件くらい潰してお年寄りが４時から飲めるような憩いの飲み屋街を造る等、何でも良いからやりたい。あんな駐車場、秋田キャッスルホテルと秋田ビューホテルの間をバーッと広げてないで、変な建物を造るよりは皆が集まれるような場所をバリアフリーで造れば良いと思います。青森市の「コンパクトシティ」の例なんかを、ちょっと見に行った方が良ということです。

こういうようなことを全部やって、60歳以上のお年寄り、定年で退職した自衛隊・警察・消防の格闘技の出来る人には、子どもの見回り隊になってもらうんです。特殊警棒と携帯電話、それから制服と制帽くらい支給して、本当はただでという風に思いますけど、食事代とガソリン代で１日3,000円出します。２人１組で６時間くらい公園なんかを歩いてもらえれば、安心して子供達が外に行けるじゃないですか。そうやって、アメリカはサンポリスを作ってニューヨークの治安が改善されたんです。本当はただが良いんですが、そうもいきませんので食事代とガソリン代で3,000円というような名目でやります。このようなことを10個くらい考えて、今日は全部言えませんが、何かやらなければいけないということです。

５点目は、総選挙についてです。クリスマス解散、１月総選挙というのが今の流れで、今日の読売新聞を見られた方はお分かりかと思いますが、麻生さんの支持がまた下がりました。不支持が支持を上回ったので、もう解散は出来ません。おそらく来年の春で、その段階までいくと麻生さんの支持率はさらに下がって、２割くらいになると思います。そうすると、３人目の放り投げが起きます。その時、彼は意地っ張りだから辞めずに来年の９月までやるでしょう。最近、周辺に阿部、福田よりも長くやりたいと言うそうです。ということは１年以上ですから、来年の９月末までに任期満了なら10月になります。投票はぎりぎりですよ。それで、質問はポスト麻生です。ポスト麻生って言われたら、皆さんもきっと困るでしょう。自民党の麻生の後が与謝野馨では、大蔵省の言いなりですよ。中川昭一は、国会でワンセグのテレビを見ているんですから。そうすると、やっぱり自民党は終わりつつあるのかなと思ってしまいます。私は麻生さんとまだ電話で話をしていますから、実体経済のことは分かっているので、いろいろ言われても、こうやっていろんなことをやろうとしているんです。しかし、麻生さんが駄目な時、自民党は誰が良いのかと言われたらいないでしょう。昨日聞いた人は皆出て、好き嫌いは別ですが、小沢は自民党ではありません。平沼赳夫も今は違うということです。今更、野田聖子だ、小渕優子だって言うわけにもいかないでしょう。こういうことも含めて、まだ政治家として半

人前のやつらが大臣席に座っているということです。そうすると総選挙は、来年４月の前に立ち枯れということもあります。

６点目ですが、私が最近週刊誌で嫌がらせを受けたり、自民党から圧力がかかることがあります。ある時、テレビで「200％政権交代です」と言ったら自民党が怒って、私はもう一切選挙の予測はしません。ものすごい圧力がかかっているんです。何で200％政権交代が起きるかと言うと、自民党がもう４回連続で調査しました。この週末はやっていないと思いますが、また来週やります。１回目は、過半数には満たなくても、220くらいは自公でいくと思っていました。衆議院は480ですから、過半数は241です。ところが、220くらいしかいかないと思っていたら、４回目の調査では自公で200ちょっとでした。公明党は25人くらいいて、どんなにやってもそのくらいは受かります。自民党だけで195くらいしか取れておらず、200まで届かないんです。今300人いますから100人以上が倒れてしまうんです。これは、麻生さんが選挙が出来ないと思い始めた最大の理由なんです。選挙だって言って、国民もいけると思っていたのがまた延びました。お預けで、もういらいらしているんです。すると、ますます不愉快になってきますよね。アメリカが明日おそらくチェンジする。チェンジ民主党。オバマと小沢では随分違っていて、そこが問題なんですが、それでも何となくという部分が出てきます。国民の怒りも、どんどん出始めています。

中川新党、中川秀直と小池百合子。この２人が何か、選挙のあと自民党を飛び出る。総裁選の46人はほとんどチルドレンで、ほとんど落ちます。けれども15人くらいはいますから、自民党から15人出てきてくれれば30人です。おそらく民主党が220くらいで、これに自民党から15人来れば235で過半数まであと６人、国民新党や平沼さん達が入ればそれでオーケーです。社民党でも良いんです。そういう風に、中川さんは何らかの動きをしていて、自民党をやめる覚悟を周辺に語ったということを、私は10日ほど前に自民党の方から聞きました。公明党の25人、この数が動けば簡単に過半数で、今は自民、公明党の政権です。けれども、数ヶ月後は民主、公明党の政権になって、180度くるっと変わってしまうでしょう。

これは間違いなく、小沢一郎は大臣ポストを２つ出します。自民党は１つですけれども、２つ出しますよ。それから、彼はどうして岩手４区のふるさとを捨てるんでしょうか。東京都北区赤羽の、公明党の太田代表のところに出るということが、２回くらい漏れてきました。「お前ところで出るぞ。協力してくれるんだったら出ない」というようなやりとりは、もともと新進党ですから。誰かを介してどこかでやっている、これが１つのポイントです。気を付けて見ていて下さい、きっと出ないと思います。最終的に、岩手県で出ると思います。

選挙はどんどん延びて、自民党は小沢さんが東京で出るのならそれで良いんです。東京10区赤羽で出て、公明党の太田代表は比例に回れば良いんですから。麻生対小沢の一騎打ちで、お互い比例ではなくて、負けた方は負けです。どちらが首相にふさわしいかという調査はダブルスコアで、麻生の方がやっぱり倍ですよ。小沢さんの作り笑いがいやだと言う人はいっぱいいますから。けれども麻生さんの、あのしゃべり方がいやだという人もいっぱいいます。そういう話が流れた瞬間に病気が進む。全然進んでないけど進む。仮病。もう１つ別の病気があります。わがまま病です。どのぐらいやっぱりみんな苦しんできたのか。私は自民党もひどいけれども、民主党の小沢さんも嘘が多すぎだと思います。そんな人が日本の政治をやっちゃいけいない。

もう１つのＸグループ、これはちょっと名前は言えませんが、自民党の中で５、６人、行き

場のないような人達が何人かいます。誰とは言いませんが、よく考えるとこういうルートが何人かいます。１行も表に出てこない、こういうケースの方が危ないんです。小沢さんは、二の矢、三の矢を継いでも、とにかく自民党を破って政権を取ります。そして病気ですが、岩手４区で出るということと同時に、解散になった直後に病気を理由に代表を辞めて、代わりは岡田克也か鳩山由紀夫だと思います。そうすると、自民党は攻め手がなくなるでしょう。

「ＴＶタックル」が終わって、大竹まことという男はたばこを吸って、ビートたけしさんも時々吸います。私は吸いませんが、ちょっと休憩に行く時があって、その時にたけしさんが番組でも言ったと思うんですが、「先生、民主党の若いやつって結構良いやつがいますよね」と言いました。政経塾の子達はだいたい私の教え子ですが、やっぱり何人かはすごく良いのがいるんです。自民党にももちろんいますけれど、その話をし始めたんです。そうしたら、大竹まことも「うん、そうだなー。民主党の若い連中は結構面白いよな」と言いました。私が「トップリーダーという感じじゃないけどね」という風に言うと、ビートたけしは一言、「そこなんですよね。若い連中は良いのが何人もいるけど、その上にあの小沢一郎だから腰がひける」と言いました。何となく分かるでしょう。しかし、そのことを小沢は分かっているんです。

だったら岡田克也。ジャスコイオンの買物が５％安くなるかどうかは分かりません。選挙違反ですからならないでしょう。鳩山由起夫は、オバマのようなカリスマ性はありません。岡田克也は東京大学法学部卒業の通産官僚で、ジャスコイオンの次男坊です。電話があって飯を食いたいと言ってきた。いいですよ。お酒飲まないので昼間、私はお酒飲まないから、基本的に。ちょっとしか飲まないから、昼間に行ってみましたが何の話を聞きたいのか分らない。ただご飯を注文して食べながら、「どうですかね、最近の政局は」なんて言うからこの野郎人呼んでおいて何が聞きたいのか。メモをとる訳でもない。２度目に連絡があった時は、結構忙しいからやっぱりトップリーダーとしては無理。割り箸の袋にメモをとるくらいの気持ちだったらこっちだって一生懸命しゃべります。小泉純一郎は、割り箸の袋にメモした。小沢一郎もかつてしました。麻生太郎は、ちゃんとメモ帳を持ってくる。１時間、２時間の食事会の時でも。岡田克也は、そういうところがない。鳩山由起夫そこそこのリーダーにはなってきたが、ソフトクリームの上に、蜂蜜がかかっいるくらい甘い。200％政権交代。ひとつだけそれでよくなるということは、霞ヶ関が改革できると思う。やっぱりあの天下りは何とかしなければ。公益法人に行ってる連中たち。だから渡辺喜美君という行革担当大臣。かつて霞ヶ関にいた人間が、行政改革を全部潰す。過去官僚といいます。この人達が、OB 達が問題。中山成彬は鹿児島ラサール、東大法学部卒の大蔵官僚です。奥様の中山恭子さんは、年上です。彼女は文学部に入ってから法学部に学士入学をしました。だから２歳上なんです。あんなかわいい綺麗なすごい奥さんがいるのに、あの男はだらしない。「何が薩摩何とかだ」と薩摩の人が怒ってるっていいます。彼が行革担当大臣とやってむっとした。つまり霞ヶ関を潰す役です。奥様も大蔵官僚。でもあまり知られていないが、息子が現役の大蔵官僚。受けられないです。それで国土交通大臣だとか何とかいわれたって。やってられない。俺は大蔵官僚なんだ。建設省なんてのは、あんなのは役所じゃない。そういう感覚の人です。だから大学出て学歴が高くてラサール、東大出たってたいしたことない。人間なんか。ね、１人でゴルフやっている人もいるけれどつまんないでしょー。みんなでやって楽しいんだから。

７番目。五木寛之さんの文章を読んで先輩ですので時々会って、話をする機会があります。吉永小百合さんと、秘密ですが先日携帯電話で話をしました。なんと着物を２着頂きました。

１着を日本生命のチャリティにかけたら何と、学生が、オークションにかけたら学生が飛んできて先生３桁、３桁で買うって言う人がいます。３桁って何ですか。バカヤロー、百万だろ。百万円で。小百合さんの着物を買ってくれた方がいます。涙が出る思いでした。１年間分のカンボジアのエイズの子どもたちの23人の食事代が毎月10万ですが、それのお金が小百合さんの着物で。もう１着あるんです。皆さんに買って貰おうとは思ってませんが、一応言っておきますが、「千年の恋」と言うドラマの映画の時に、舞台挨拶で着た、すごい着物、手書き友禅です。一品ものだと思います。今70万円で買うと言う人がいますが、あともう１回、あるところでオークションをやりますが、実物は見せられませんが、お写真は是非見みせられますが、等々で100万円で買ってくれた人がいた。１年分子どもたちに、おいしいものを食べるとエイズをHIV を克服できますから、もう７歳まできましたので、子どもたちはですね。そういうようなボランティア活動で２月に学生を連れて、バンコックからプノンペンまで行く予定ですが、三菱自動車がパジェロをくれました。運転をして持っていって子どもたちの色んなものに役立てると言うので三菱自動車の社長が、ゼミの後輩ですから、１台くれっていったらくれたんです。私が勉強を見ました。

五木寛之さんの言う日本が１億総鬱状態。作家でも食べれている人は、10人くらいだそうですよ。赤川次郎とかね。宮尾登美子。篤姫ですけども。限られている。もうことごとくどの世界でも、まあもう半年たったからいいですが、ハマコーさんも最近テレビでません。TV タックルにも出てこないのは、それゃあやっぱり彼が出てくれば、面白いんですよ。ギャラが高いんでしょう、きっと。竹村健一さんが、日曜日出て来ないでしょう。やっぱりギャラが高いからですよ。もう今テレビ局はもう、どこも大変です。コマーシャルがないでしょう。もう３割方、番組宣伝ばっかり出てくるでしょう。秋田魁を開いてご覧なさい。もう広告が少ない。どこもかしこも大変なんです。それゃあコマーシャルを切るのは、企業は最初に切ります。だから、ボディーブロー型であと２段は、悪くなる。でそこのところの部分です。で１億総鬱状態。日本中いたって明るくない。最近無理やり、カラオケ行ってます。だけど学生と行くと、知らない歌が殆ど。だから年寄りだけ、別室で演歌を歌ってますけども。３丁目に夕日がないと思っています。３丁目の夕日ってみんな貧乏だったんです。昭和34年、私は中学生でした。下町の５人兄弟、公務員の息子の５人兄弟の末っ子。継ぎのあたっている洋服、兄貴達の洋服着て学校行ってました。給食が始まる前に、食事の時間に、弁当がないからいなくなる子がいたもんね。農家の子は、持ってたけど、農家じゃない子は、持ってない子がいた。傘がないから、雨が降ると学校に来ない子がいた。東京都の葛飾区ですから、いろんなことを、経験をしてきた。新聞配達でがんばっているいる子がいて一緒になって３日くらいやって疲れちゃったからやめたけど、親父に殴られた。「中途半端な手伝いはするな。やるんだったらお前最後までやれ」と言って、顔が腫れるくらい殴られたことがある。今思えばそれがきっと正しいんです。その辺でもって大変だなって思ってるのは良くない。今は、もう３三丁目の夕日がないほど、貧しくなって明日の希望が持てない。そういう政治にしちゃったのが、今の日本の政治だという風に思っています。

で、最後結論。壊れてしまった日本が、次の講義のタイトルにします。その時は、学生にもレポートをさせますが、秋葉原の話は、前期しました。あそこで刺された女子学生、彼女は、２回電話をしている。110番と119番。ともに繋がらなかった。で刺されちゃった。で死んじゃった。その話をした。もう１人自動車タクシー会社の運転手さんが刺された。東京に行くと国際

興業の黒タクいとうのがある、黒いタクシー。それに乗ると名前の脇に救急救命士資格取得というのが書いてある。AEDです。この運転手さんは、空でこの交差点に止まった。暴走トラックが10何人跳ねた。無線でもって営業所に救急救命に入ります。会社は、それをやってますから。頼むよと彼は言って、その倒された人を一生懸命救急救命していた。そしたら犯人が後ろから背中を刺してきた。何やってんだと思って見たら、血がだーっと大量に流れた。肝臓一突きですから。だけど、止血の心得を知っている。自分で血を止めることを知っている。救急救命士ですから。で上着を脱いで救急救命がもう駄目だと思ってあきらめて自分で、上着を脱いでここにあてた。だんだん意識が遠くなって、血は流れていた。誰かが助けてくれた。すいません、ここんとこ抑えておいてください。最後に一言そう言って目が覚めたら、病院。三日三晩、三途の川を行ったり来たりで、彼は54歳だから助かった。まして、止血したから。あの犯人は言いにくいが、お隣の県のナンバーワン高校です。地方の中学校のベストスリー、そして高校に受かった。350人中最初の試験300何番、その日から人生の挫折が始まったと弟が全部週刊誌にしゃべった。

　で、あまり言いませんでしたが、前期も言いませんでしたが、私は東京都立両国高校という名門高校を受けた。中学野球部15人受けた。15人中、私１人だけ両国高校に落ちた。兄貴は、３人両国から東大行った。今テレビ局の社長をしているのが１人だ。その時に先生が、「福岡、失敗は終わりではない。始まりだ。『相田みつをのつまづいたっていいじゃないか！人間なんだから』」と言って、その色紙みたいなのをくれた。子ども心に分んないけれど、「とにかくお前高校行ってがんばれ」と言われた。三流都立高校、勉強しなくても学年で何番かにいた。「お前の弱点を克服しろ。お前は、算数苦手だったから」で、大学受験、東大は受からないな。算数苦手だし。分数なったら頭痛くなるし。国語と英語はできた。世界史は何を言っているか、ちんぷんかんぷん。もう、全然駄目。日本史はまだ良い。ひとよでむなしい応仁の乱。1467年だ。いちいち国を治める鎌倉幕府。そうか1192年。死にもの狂いで日本史を勉強した。で、一応現役で私立文化系を受けて、早稲田大学政経学部政治学科だけ補欠で受かった。でも出るときは、２番。50科目中48科目優ちょっと自慢してますけど、良１つ、可１つ、逮捕歴２回。学生運動です。逸見政孝を助けようと思ったら、あのバカが倒れちゃったから。目が覚めたら牢屋の中にいました。私は、就職先が17決まってました。三菱銀行、三井物産等々17。でもまあ逮捕歴があるから、やめて大学院にいきました。大学院は全優。修士、ドクターも全優。でも逮捕歴があるから早稲田大学は、冷たくしっしっ。それを拾ってくれたのが、東北福祉大学の現学長。「お前は先生の子どもの面倒を見ていた。口は悪いが、根は良いやつだ」と言って駒沢大学の専任講師にしてくれた。33歳で助教授になった。もう飛ぶ鳥を落とす勢い。しかしテレビに出始めたら教授に睨まれた。声がかからない。そろそろ教授に。５年くらいなるんですが。後輩で後から来たのが先に教授になる。助教授を10年やった。桝添要一とかいう訳のわかんないやつが、「私は10年で東大教授をばかばかしくてやめたが、先生何年」て言うから、「11年やってる。」「よくやってられますね」お前なんかに言われたくない。結局13年、後輩が教授になる。その時ゼミ生たちが励ましてくれた。「先生大丈夫、窓際だけれど陽が当たっているから。」当たり前だろうと思いながら。でも教授と助教授の給料なんか７千円しか違わない。テレビ出だしたら、言いにくいけれども、もう３万円の講演料が10倍にぱっと跳ね上がる。結局、47歳で白鴎大学に移った。その時、久米宏が「おー、やっと田舎の大学で教授になれたね。」筑紫哲也は「お前でも教授で来てくれって言う大学があるんだから、喜んで行け」そこが彼の

優しさで、とにかく行った。

結論。人間なんて失敗した時が勝負。その時、一言あの犯人に言ってやれば良い。「お前がんばれ。」私のゼミ生にはそれ言った。この間、ゼミの女の子に振られたやつがいた。こっちに連れてきたやつですけど。就職も決まらない。「でも、お前ここが勝負所だ」と励ましました。伊藤園に受かりました。もう１人のやつは、関西テレビに受かった。こっちに連れてきたやつですが。鞄持ちで連れてきた。酒も飲めないやつもいた。だけれどもそうやって、一人一人の学生に「躓いた時が、勝負だ」と言ってやれるかどうか。それが相田みつをなんです。「つまづいたっていいじゃないか、人間だもの。失敗は終わりじゃないんだ、始まりなんだ」そういうような気持ちをどう持つか。アメリカに行くと時々ぶつかる言葉がある。「グッドルーザー。よき敗北者になれ」負けた時に、いじけて愚痴るな。負けた時こそ、どこが弱かったのかね。100メートル自由形、75までは何時も１番なんだけど、残り15メーターで負けちゃって銅メダル。だったら最後に頑張って、持久力を。最後のダッシュ。あのソフトボールの上野由岐子という人は、青森出身の斉藤監督に５月に言われたんですってね。最後決勝のあそこんとこがトーナメントは複雑で、ソフトは、２日間で３試合やることになるらしい。だから、「上野、どんなことがあっても最後の決勝は、どんなことでもお前でいくんだ、お前がエースなんだから」と、５月に言われた時、上野由岐子は、「わかりました。体力鍛えておきます」と言ってうさぎ跳びか何かをずっとやり続けたから、ああやって３連投出来た。ほら、ダルビッシュなんか、途中で代えられちゃったからいじけちゃってね。星野何とかという監督。分かちあいの愛は、愛情の愛ですけれども、そういう気持ちが今日本人の中に、残念ながらないんです。で、良き敗北者たれということです。残り五分しかありませんが、質問の時間にします。どうぞ。」

鈴　木　法学部３年の鈴木です。総選挙は、やはり来年１月の冒頭にあると思うんですけど、どう思いますか。

福　岡　私が１月より４月の方が可能性があると言っても、しかし解散権は麻生太郎にある。それで結論。株価が１万１千円まで戻って、内閣支持率が少し戻った時は、麻生は抜く手を見せず解散します。だけれども今日の読売新聞を見ていないのでわかりませんが、読売でも下がって来ると、これだけの景気対策をやって、やっぱり国民の反応は良くないし、毎晩ああやって帝国ホテル、ホテルオークラで飲んでるうちは、駄目だと思う。カップヌードルが400円って言っているうちは、知らなくても良いけれども、あのいやみな金持ちという感じはちょっと、出てきちゃった。今日本人は、何となく金持って儲かっているやつがいやだという感じが出てきちゃった。11月という線はあるけれども、あなたも私も総理大臣じゃない。他に。宜しいですか。はい。

本　山　本山と申します。オバマは大変な期待を背負って大統領になるんだと思いますけれど、どの程度出来るでしょうか。

福　岡　人間としては、非常にやっぱり優秀であるということと、優しさを持った人間であるということで、おそらく、相当の高級品です。彼は優秀な人間です。だから、イランの攻撃はきっと

しない。そこは話合いに入るし、おそらく平壌の方にも入ると思います。だがアメリカのいわゆる国の中をやり出してた時に、もう先ほど言ったように簡単でない。ものづくりを忘れてしまって、６人の１人に保健がないという国ですから。しかしこの人たちは、保健を出すと言っています。しかし日本は、皆保健ですから、それでも大変ですよね。これからおそらく金額がかかります。若い国だから、何とかやってみんなでアメリカは１つだという気持ちで受かって、期待はしています。ただ暗殺、アサシネーションというこの危険性はある。私は、やっぱ、彼に頑張ってもらいたい。彼が頑張んないとマイノリティーズやアフリカ系アメリカ人は駄目なんだ。またホワイト、白人がいいんだという風潮になって、黒人でも白人でもいいやつはいい。駄目なやつは、駄目なんですよね。そこの部分なんです。私は、ほんと頑張って貰いたいし、気持ち、１月早々アメリカにひとつ行ってみようと思っているのは、肌で感じて見たいのとちょっとコネがあるんで1時間でも会ってみたいなと思っています。はい、もう１人こちらで手があがりました

津　谷　津谷と申します。先ほど今話題になっているクーポンか現金かという話ですが、仮にね１千万でも線を引くのは非常に難しいと。支給段階で、先生の言うにはいろんな制限を設けるというのは、実務的にはできないんではと思いますが。その辺についてお伺いします。

福　岡　内閣の中、麻生さんは全家庭にと言っていて、中川大蔵大臣と与謝野経済産業大臣との間でも意見が違ってます。で、最終的に、年内はちょっと難しいかも知れません。だた現金ならば12月15日前後に各市役所、区役所、村役場でもって配るということは、これは出来ます。お金は、日銀が刷ればいいですから、たったかたったかということなんです。８百兆円の借金があったって、日銀が刷ればいいことなんです。インフレになればなったでちょっと気を付けなければいけないけど、どうせデフレなんですから。毎日２兆円ドル買い支えているんですから。日銀がお金を刷ってるんです。こういうようなことを含めて、どっかで決めればいい。600万円。公務員家庭以外の600万円以下で、税金を払っていない高齢者の単独世帯は、おそらく切ればですよ、６万円は。２兆円あるんですから。子どもの数にもよりますが、おそらく10万円位になります。それでもってお年寄り１人だったらおそらく２万円とか３万円とか。そんなに難しくない。やれるかどうかです。ただ、みんながいうように１千万なんとかだと。１千万円貰っている人はほとんどいませんよ。秋田県でも。限られています。公務員でどうでしょう。知事とかね。市長が貰っているけど、もう助役とかは貰っていない。やる気になれゃあ出来るし。やるんだったら、私は年内やったほうがいいと思います

津　谷　先生、大統領がオバマになった場合に、日本に対してどういうところに１番変化が現れると思いますか

福　岡　オバマ民主党になった場合に、日本に対する要求はきつくなると思います。でも、オバマという人間の極めて個人的な能力というか、カリスマ性の中で、彼はおそらく日本と一緒にやろうと思っている。今までのように、あんまり言えないんですけど、歴代の日本の総理大臣は、少なくても５年前まで、アメリカに最初に行った時に、アメリカ側の通訳だけを入れて日本の総理だけホワイトハウスに入れて、「誰のお陰で日本の国の平和は守られているか分かってい

るだろうな。アメリカの軍事力だということを何回か確認されている」という話を首相になった人から聞いたことがあります。そういうような気持ちは、オバマにはない。おそらく日本と対等にやって協力を得なければ、日本のお金だって必用な訳ですから、そういうような目線で彼はやっている。マケインは、共和党ですから。というようなことで、これから貿易的な障壁かいくつか出てくるというようなことも、私は過去の話で、むしろ日本が良い形でもってアメリカをバックアップしてあげるような、感覚になれるかどうかだと思います。むしろサルコジってあんまり好きじゃないですけど、サルコジと麻生さんがどれだけできるかわからないですけれど、オバマが大統領になったら、とにかくやっぱりＧ７だとか皆で一緒に考えてやっていこうというような発想を、オバマは持っていると思います。その時、日本側が「おう、一緒にやろうよ」というような感覚でいけるような、そういうようなリーダーになればいいと思ってます。で、さっき言い忘れましたが、私は次の選挙やったら勝った方が総理大臣で、負けた方が副総理で３年間限定で、大連立やったほうが良い。日本の国をもう根本的に変え直す。公務員の給与をカットして、退職金は一律、全員２千万円にする。何とか航空幕僚長の6,000万円はなし。賞金の300万円は自分で稼いだんだから、あげるというようなことをはっきりやんないと。もう何も収まらない。だから、私は、緩やかなクーデターだという風に思ってます。もう１人、どなたか。手を。はい。じゃ。そちらの方最後にね。時間がないですからね。

柴　田　どうも、柴田という者ですが。ユダヤ民族の知恵であるタルムードってありますね。それはあのユダヤ民族が現在まで世界の政治、経済をリードしてきたと。そのような豊富な知恵がありますということを皆さんはご承知でしょうが。今日本の国民に対してあるいは日本の国に対してユダヤ民族のすぐれた知恵を取り入れて勉強したたほうがいいのではないかと私は常に思っておりますが、いかがでしょうか。

福　岡　非常に高いレベルの質問で、ゴールドマンというこのゴールドマン・サックスという名前は、もちろんこれもユダヤ系です。お分かりのようにね。ただその問題は、かつてのナチスの問題等々があって、こういうことについて、テレビでは、基本的に語れないというタブーみたいなものがありました。だけども基本的にファンドの多くが、アメリカ系のファンドと言ったり、グローバルファンドと言っても世界の最大のファンドは、やっぱりゴールドマン・サックスなんです。このいわゆるファンドの中に、３年後１バレル100ドルの時代が来るというシークレットペーパーがあり、多くの人はそのことに気付いています。だからルールを作って資本主義、自由主義経済をやっていった方がいい。ノーベル経済学賞を貰ったのはこの新自由主義の市場原理を導入した竹中平蔵たちの先生であるフリードマンという人です。その中にはノーベル経済学賞が２人、金融工学のいわゆる派手な金融商品、金融化賞品を考えた人間が、ノーベル経済学賞２人貰っているということです。これに反対する先生方が、慶應では金子というあの男であったり、あるいは森永何とかという人です。後は、竹中に逆らった人間は植草やリチャード・クーを含めて全部干されました。今、リチャード・クーは野村総研ですが、麻生さんのブレインです。そんなことをやっていると、今のご質問のように世界の金融ファンドと言うのは、どうしてもウォールストリートの周辺にいる、そのユダヤの関係者が莫大な影響力を持っているということまでか言えないので、今の質問には全部は答えられませんけれども、やっぱり本質はそういうところにある。で、そのことにきちんと資本主義はやってはいけないというルー

ルを作んなきゃあいけない。そういう先生方が日本に中に出てきて、公の利益になるような資本主義を考えて、近江商人の哲学である「売り手よし、買い手よし、お客様よし」という、皆がハッピーになるよう商売やんないとおれたちだけかが儲かりゃあいいというような村上や竹中や堀江たちのやり方は、日本は大鶴基成がいたから抑えたけれど、今世界がその中にマイナスのスパイラル、下に下がるという意味ですが、入ってしまったということです。さあ、本当に今まだ始まりだという風に、考えて頂だきたいと思っています。以上でございます。

藤　本　福岡先生、長時間に渡って有意義なお話をして頂き、誠にありがとうございました。皆様、福岡先生に盛大な拍手をお願い致します。(拍手)

[講　演]

ノースアジア大学　総合研究センター主催　講演会

「メディア・教育・子ども・そして家庭」

講　　師	白鴎大学教授・立命館大学客員教授 ノースアジア大学総合研究センター客員教授	福　岡　政　行
挨　　拶	ノースアジア大学経済学部長 本学総合研究センター長事務取扱	藤　本　　剛
司　　会	ノースアジア大学総合研究センター副参与 本学教養部准教授	橋　元　志　保
日　　時	平成20年12月２日　午後１時～２時30分	
会　　場	カレッジプラザ講堂（秋田市中通）	

橋　元　本日は、ノースアジア大学総合研究センター主催の公開講座シティカレッジにお越し頂きまして、誠にありがとうございます。今年、最後のご講演会となります。白鴎大学教授、立命館大学客員教授、本学総合研究センター客員教授 福岡政行先生が「メディア・教育・子ども・そして家庭」と題されまして、ご講演いただきます。ご講演に先立ちまして、本学経済学部長・総合研究センター長 藤本　剛先生よりご挨拶がございます。どうぞご静聴下さいませ。

藤　本　皆様、こんにちは。こんなに多くの皆様に、当センター主催シティカレッジにお越し頂きまして、誠にありがとうございます。当センターがスタートしましたのは、平成17年でございますから、今年が４年目でございます。本日、ご講演を頂く福岡政行先生をはじめと致しまして、著名な客員教授の先生方にお力添えを頂き、また加えて地域の皆様の厚いご支援を頂きまして、ここまでやってくることが出来ました。本当にありがとうございます。

福岡先生は、申すまでもなく著名な政治学者でいらっしゃいまして、またマスコミでもご活躍の方でいらっしゃいます。また、学生に対するご指導が本当に素晴らしい方でいらっしゃいまして、厳しくも温かいという言葉そのままという思いが、いつお会いしても致しております。真似をしたいと思うのですが、なかなか思うように参りません。これも先生のお人柄かなと思います。

今回、先生は３人の学生さんを白鴎大学よりお連れ下さいまして、ご講演会の後で自主ゼミナールも予定されています。そして、懇親会もございます。これから、学生さん達とも交流が深まっていくのかなと思います。ちなみに、先生はあまりお酒をお飲みにならないのですが、本当のところ、お好きなんじゃないかなという風に拝察しております。そう申しますのは、あるお店でご一緒させて頂いた折りに、そのお店オリジナルブランドの焼酎が置いてございました。その場で先生が「秋田だったら、焼酎じゃなくてお酒じゃないとね」とおっしゃって下さって、本当に秋田のことを思って下さっているんだなという風に思いました。また、先生がお好きなものは麺類ということで、秋田にいらして、稲庭うどんを召し上がらずにお帰りになることは、おそらく、ないのではないかという風に、これもまた拝察致しております。

本日は、教育に関する福岡先生のご講演を頂くということで、本当に楽しみでございます。どうぞ最後まで、ごゆっくりお楽しみ頂きたいと思います。どうもありがとうございました。

福　岡　福岡です。日曜日に北秋田市の浜辺の歌音楽館に行ってきまして、何で山の中なのに浜辺の歌なのかとも思いながら、でも素晴らしいなと思いました。そして、八郎潟の干拓の中を車で走っていて、もう八郎潟のほとんどが干拓されていて、残存湖というのが川くらいしかないというのが自分の記憶の中ではなかったもので、色々な意味でショックを受けながら、また、大潟村長選挙で色々なことがあって、女性の村長さんが負けてしまったというか、終わってしまった。来年は、秋田県知事選挙だとか秋田市長選挙があるようですが、今のところパッとしないようです。千葉県知事選挙では、一度こちらに一緒に来たことのある白石真澄さんが出馬するようです。彼女は上品そうに見えますが本当は嘘です。関西人なんですね。ところが、どうも民主党推薦と公明党も乗るというような話なので、そのことはもちろん千葉県ですが、この秋田県のことはちょっと知らないふりをして、本論に入りたいと思います。

今日の本論を始める前に、政局の動きがバタバタッと変わりましたので、その点について触れます。最も新しい情報は永田町、国会近辺のものです。二度あることは三度ある。結構笑え

るんですが、もう駄目なんじゃないかというような感じになってきて、昨日、白鴎大学の方に平沼赳夫先生がお見えになったのですが、平沼さんが言ったセリフは「麻生、迷走、朝令暮改。挙句の果てに暴言、失言」こういう風に言われました。番記者が何人か付いてきて「だって、安倍さん以下だという話もありますよ」と言っていたので、「どういうこと」と聞いたら「阿部はKYだけど、麻生はダブルKY」空気も漢字も読めないということだそうです。

ここまで来て、産経新聞でこの週末にやった世論調査では支持率が27.5%。テレビ朝日は29.6%。日本経済新聞は30.4%だったと思いますが、こういう状態です。この１ヵ月で10数ポイント軒並み下がって、産経新聞が30%切りました。この週末に共同通信、秋田魁新報、それから朝日新聞、毎日新聞がやると思いますが、私の推測では日本経済新聞、産経新聞で30%、27.5%ですと、通常であれば朝日新聞と毎日新聞は25%くらいまで下がります。30%を切るとイエローカードで20%を切るとレッドカードですから、おそらく、その時期で30%を切っているので、３ヵ月くらいで20%を切ります。だけど、最近は動きが速いので、来年の２月、新年早々には17%とか出ると、二度あることは三度ある。予算だけを通すことがあるので、３月末日や４月になって麻生さんが辞めざるを得なくなるかもしれない。その首に鈴を付けるのは森喜朗さんだと思います。

５日の日に、中川秀直と小池百合子と渡辺善美が中心となって、20数人で反麻生の政策集団を立ち上げ、定額給付金はやるべきではないと意見表明した。2,200億円等々の社会保障費のカットは存続すべきであるなどと言って、いわゆるポスト麻生に標準を合わせるということで、４月に小沢一郎さんが標準を合わせると言った。選挙管理内閣のようなものを作るとすると、今までは自民党の中で与謝野馨さんが出てきてワンポイントの総理か、もし女性ならば小池百合子ではなくて野田聖子あたりが出るのかと、それくらいしかいないです。中山恭子さんでは旦那の問題がありますから。等々で選挙管理内閣を長老にやってもらって、自民党、公明党、民主党の３党でやってもらって、何となく選挙管理内閣をやり、そのまま選挙に突入する。５月のゴールデンウィーク明けぐらいの投票日になって、もうやらざるを得ないと思います。９月まで、任期満了なんていう悠長なことを麻生さんに言わせたら、そんな「みぞうゆう（未曾有)」なことをしてはいけないということでしょうか。「麻生、迷走、朝令暮改」で一番新しいアルファベットは「MW」です。まるで分かっていないということです。私は言っていませんが、新聞記者が言ってきましたので一応触れます。これが今の永田町の最新情報です。

総理大臣に誰が相応しいのかという記事があって、なんと小沢さんが麻生さんを抜いてしまったことが書かれていました。もし、帰りに産経新聞を買っていくことが出来るんでしたら、買って読んで頂くと分かります。抜いたといっても１ポイントですけど、今までは60対20くらいのトリプルの差でした。それから、日曜日の番組「サキヨミ」のインターネット調査では、(間違っているかもしれませんが）麻生さんが20ポイントくらいで、小沢さんが60ポイントくらいでした。それを見ると、党首討論というよりは暴言失言が影響しているのではないか。例えば、「非常識なお医者さんがいる」と言ってみたり、「67歳か68歳になって同窓会に出ると、みんなヨレヨレでタラタラ食いやがって、そんなのに俺の金を使いたくねぇ」とか言われたらどうでしょう。どんなに注意しても病気になってしまう人もいますから、この人には社会保障という意味が何も分かっていない。また、本当かどうか分からないですけれども、選挙に出た時に「下々の皆さん」と言って、出てきたという話があるそうです。やっぱり家庭環境なのか。だけど、ちょっと２ヵ月くらいで酷すぎるという感じがします。

来週、各紙の世論調査で支持率が24、25％まで下がると、「もう、麻生は予算を通したら辞めろ」とか、「もっと早く、年明けと言わず、年越し前のクリスマスに辞めろ」とか、そういう声が自民党の中から噴出すると思う。それで、亀井静香が「やっぱり、麻生は総理になっちゃいけなかったんだ」というような趣旨ことを言いました。安倍晋三は指名をされたような形で出てきたが、彼も成蹊学園の幼稚園から大学まで、一度も受験勉強せずに上がりました。やっぱり苦労は何も知らないし、お母様は安倍洋子さん、あの岸信介のお嬢様ということ等々を含めて、その後も福田赳夫の御曹司である福田康夫であったり、そして吉田茂の孫である麻生太郎であったりと、この後はどうやっても、おそらく自民党には与謝野馨か野田聖子くらいしかいない。与謝野さんは70歳で、与謝野鉄幹の孫、大蔵省の言いなり、消費税は早く10％に上げろと言う。野田聖子はあくまでも聖子ちゃんです。自民党はちょっと苦しい。

１つだけ例証を言います。今から20数年前、私がアメリカに留学していた時にジョージア州アトランタに行って、あるシンポジウムに出席しました。その席にキング牧師の息子さんがいました。話が終わった時に、彼は私にこういうメッセージを伝えました。「We have a dream」ということを親父から教わってきた。それは、私達は１つの夢を持っている。それは白人も黒人も差別がない社会を作ること。バスに乗っていて、席を譲れと言われて怒って、あの黒人を差別することに反対する運動が巻き上がったというのがありましたが、それを見てマルチン・ルーサー・キング・ジュニアは立ち上がった。「We have a dream」という、１つの夢を持ってということです。

そして、オバマが弁護士になってまだ30歳くらいの、今から17、８年前です。この時に彼が貧民街というよりはスラムに近いところで、生活が出来ないような人達の支援活動のボランティア活動をしている時に、そこで知り合った人間が私の友人の友人で、彼も弁護士なんですが、やっぱりオバマはすごかったと言うんです。本当に１人１人の個性を見抜いて、「この人はアルコールさえやらなければ、運転は抜群なんだ。お前、アルコホーリックだけやめろ。アルコールを断て。どうやってもアルコールは飲むな」そう言って酒を止めさせて、長距離トラックの運転手にするとか、あるいは、非常に料理の上手い人には、ホットドッグ屋さんのこういうライトバンみたいなものを買って、特製のホットドッグを作ったらものすごく売れたとか、そういうような形でもって、バックアップの運動をしていたそうです。本当に困っている貧しい人達の気持ちの側に立って、「いいよ、いいよ」と言わないで「駄目だよ、自分で生きて行かなきゃ」と言っていた。

８月のある日、その話をしていた友人が手紙をくれました。「暗殺の危機というのは常にある。マルチン・ルーサー・キング・ジュニアも然り、ケネディ大統領も然りです。しかし、今のアメリカはもう、こういう経済ですから、民主党とか共和党とか言っていられない。白人とか黒人とか言っていられない。貧乏な人だとか金持ちだとか言っていられない。南部だ、北部だ、西部だ、東部だとか言っていられない。１つのアメリカになって、この困難に立ち向かわなければならない。時に、自分はもちろん家族を愛しているし、子供が大事だ。だけど、やっぱり命懸けで、今のアメリカのためにこの大統領選を戦っている」ということを、彼はこの７月、８月、９月、当選をするまで周辺に伝えたそうです。あのシカゴの最後、当選した時に子供２人と奥さんと４人で嬉しそうに上がってくる時に、よく見ると映っているけれども、周りが防弾ガラスになっていた。厚さは７センチくらいあるそうですよ。ライフルで撃たれても大丈夫なように相当厚い。

そう比べると、日本の政治家は命を懸けない。等々を含めてですが、麻生や小沢は信用できない。あんな訳の分からない党首討論を聞いていたら、チャンネルだって切りたくなる。どっちもどっちだが、太郎も太郎、一郎も一郎ということです。そんなことで、本当に情けない。それから比べれば、平沼さんは信念を持って戦い続けてきた。リーマンショックの時に「先生、郵政だけで反対したわけじゃない。こうやって金が金を生む拝金主義の中でやってきて」と。昨日、お茶を一緒に飲んでいたら「先生、この前、堀江貴文と一緒にテレビに出ていたのを見ていて、もっと厳しく言ってもらいたかった」と言われた。以前、東京地検特捜部長の大鶴基成が「額に汗する人間が報われるような社会を作りたい」と言っていた。村上世彰にお金を出していた人間は、前に言ったように宮内オリックスで、堀江貴文に金を出していたのはリーマン・ブラザーズです。こんなのを、まだやっぱり堀江は「いいと思っています」と私の質問に答えた。昨日の「サンデープロジェクト」を見ていたら、なんで竹中平蔵にあんなことを言わせるのかと思った。私はやっぱり違う。ここで本当にファンドは必要かもしれないが、だけどハゲタカファンドはいらない。こういうようなことを誰かが言わなきゃいけない。

そんなことを含めて、今の政治ではいけないと思う。とにかく、もう選挙をやって投票した方がいい。それで勝った方が総理大臣で、負けた方が副総理大臣。平沼赳夫先生は挙国一致、大連立内閣を向こう３年できちんとやった方がいいと言っておられた。定額給付金に1,800万円の所得制限を設けるかどうかという意見がありますが、色々な町で調べますと、数千人とか数万人の町でも40数人とか100人とかいるんです。多くはお医者さんです。そういうようなことを含めて、公務員には定額給付金はいらないと密かに思っているんですが、賛否については後程、誰かが言って下さい。

ちなみに、『プレジデント11月17日号』に東京都三鷹市平均給与896万円と載っていた。秋田県庁の平均給与は696万円で結構あります。その中にこういう一節があった。東京都中央区で選挙があった。この時、日曜日なので公務員は時給計算をした結果、3,050円の時給で朝の６時から夜中の２時まで20時間、日曜出勤ですから時給計算でやったので（3,050円×20時間＝）６万１千円です。これが中央区の公務員のアルバイト代です。他の県とか市もだいだい一緒です。3,500円から2,700円くらいです。これが選挙の日のアルバイト代です。もちろん一般の職員以外の、民間の人のアルバイト時給は850円です。10時間で8,500円です。

松下政経塾の出身で頑張っている横浜市長の中田宏が市長選の時、開票を翌日にしました。その結果、月曜日ですから、みんな通常業務ですのでアルバイト代はいりません。3,200万円の節税になった。いいですよね。テレビ局や新聞社の求めで即日開票しているだけですから。こんなものは翌日でいいし、出口調査だけを見て、みんなで適当なことを言えばいいだろうと思います。今、私の助手をしてくれている茨城県古河市の元市長さんが「先生、うちは管理職しか選挙はやらないんです。管理職はタダですから、ボランティアでやってもらうんです。あとは民間の方にお願いをしますが、時給850円です」こういったことを、秋田県や秋田市やそれ以外の市でやっているところがあれば、ぜひご紹介を頂きたいと思います。等々を含め、今日はそれ以上話しませんが、このオバマの話だけちょっとさせてもらいました。

トヨタ自動車が74％の減益です。２兆数千億円あった利益が６千億円になってしまいました。約４分の１になりました。パナソニックという、最後の勝ち組と言われた旧松下電器産業が90％の減益です。小松商工会議所へ２週間前に講演に行きました。後輩が工場長をしていて、商工会議所の副会長をしております。彼のセリフ「10月に入ってガクン、ガクン、ガクンと３回

も下がりました」とこういう風に言いました。先週の水曜日には、トヨタ自動車の愛知県豊田市で講演がありました。豊田市長さんもお出ででした。トヨタ自動車の副社長さんもお出ででした。週を追って、日を追ってトヨタ自動車の車が売れなくなり、云々です。懇親会で豊田の市長さんがビールを飲んでいたら私のところに来て「トヨタさんがこういう状態ですから、予算の組み替えで約80億円の住民税というか、法人事業税というか、減額修正をしなければならない」こういう風に、豊田や小松のような日本中の勝ち組でも苦しい。しかし、「ああ、秋田は良かった。そういう優良企業が無くて」という風には言えないんです。そして、今日の新聞を見ますと、国税が53兆円の予定だったが、この景気の悪さで６兆円くらい法人税等々が入らないらしい。そうなると当然、赤字国債を出します。

そんな時に秋田県庁の資料を見たら、去年の秋田県の一般会計７千億円のうち人件費1,650億円だったのが、今年は1,550億円と約100億円も減りました。団塊の世代が辞めたからです。でも、県に入る収入が1,200億円くらいしか入りません。税金以上に公務員の給与が出ている。それで減額にならないんですかね。定額給付金は３月に出るかどうか別にして、当然サラリーマンがいるから、土日にも業務をやりますよね。そうすると公務員は休日出勤ですから、時給3,050円ですから、８時間で２万４千円。土日交代で出るかもしれませんが、１ヵ月で（土日全て出ると）８日間出ますから、20万円弱ですよ。定額給付金、たかだか６万円くらいなら「いらない」と言うでしょうか。定額給付金のアンケートを秋田県庁と秋田市役所の前で学生に採らせましょうか。そんなことで腹の立つことがいっぱいあります。

それでは、今日はどうしてもやりたいのでこの問題をやります。来年の２月に『壊れてゆく日本』という本を出す予定です。今月10日頃には『政権選択』という本を出します。久々に一生懸命書きました。テレビはひどい、新聞は潰れる、教育はなっていない、子供達はどうなっているのか分からない、家庭は崩壊、親殺し、子殺し、孫殺し。おじいちゃんの年金をもらうため、遺体を半年も１年間もそのままにして、年金だけをもらいに行く。人の心は何なのか。心がないから「悲しい」とある国語の先生に言われましたが、この問題について触れます。

冒頭に、ゼミ生３人にレポートを書かせたので発表してもらいます。１人２、３分ですので聴いてやって下さい。寺田のが一番面白い。「ケータイと若者」というタイトルです。

寺　田　秋田県湯沢市出身の寺田敬久です。今回、私は携帯電話と若者について考えてきました。

現代の携帯電話の発展には目を見張るものがあり、様々なサービスや機能が付き、携帯電話は私達の生活に必要不可欠なものになってきています。ですが、便利になっていく一方で同時に様々な問題も陰で起きており、現にニュースで取り上げられる件数も年々増加しています。そこで今回は、携帯電話の普及による現代特有の問題点について触れてみたいと思いました。

まず、問題の１つ目として挙げられるのは、学校裏サイトなどのいわゆる闇サイトと呼ばれるものの存在です。現にこれらの悪質なサイトにより殺人や詐欺など多数の犯罪が行われており、技術が高度化するにつれて、これからもネットを通しての犯罪は増加し、新型の犯罪も出てくると思います。これらの犯罪が頻繁に起こりうる理由は、携帯電話がいつも手元にあり、同じ悩みや目的を共有する人といつでも会うことが出来るという点にあると思います。携帯電話を持つことに伴う、そうした気軽さやネット特有の匿名性、さらにマスメディアが事件を大きく取り上げすぎていることなどが、犯罪を促している原因であると私は感じています。

また、携帯電話の普及により、年々、人と人とのつながりが希薄になっていると私は感じて

います。現代の中高生の約６割が「メールの方が自分の本当の気持ちを伝えやすい」と答えており、このような機械を通した間接的なやり取りや、自分に都合の良い人とだけ連絡を取るケースが増えることで、過去に比べ、異なる世代の人間や異なる価値観を持った人間とのぶつかり合いが減少してきているように思われます。社会に出る以上、どんな人とも上手く付き合っていかなければならず、このような冷たいデジタル的な記号の配列に安心感を覚える感性は、深い人間関係を嫌う現代人が抱える特有の心から来るものであると私は感じます。

携帯電話が現代人に及ぼす影響は甚大であり、これらは絶えず検証していかなければならない大きな問題だと私は感じています。

福　岡　もうちょっと、汗を感じるとかドロドロッとした文章になりますと、もうちょっといい文章になりますが、しかし、レベルはかなり高いと思います。携帯電話と若者、人との接点をあまり持ちたくない今の若者。この間、OECD か何かの調査で日本の子供の約29.8%が常に孤独を感じているとあった。他の国の子供は３%から５%でした。引きこもりやニートや色々な問題がありますが、この文章を読んで色々と感じました。同じ人物でも何となく着信を拒否したい、状況によって色々ありますが、今は口をききたくないとか、きくとか。

私に、今朝から６回続けて大分県日田から電話が入っています。今度の日曜日、筑紫哲也さんの大分県日田名誉市民のお別れ会があり、そこで弔辞を読んでもらいたいという向こう側からの要請がありました。私、結婚式は得意ですが、葬式はあまり得意じゃないのと、まして筑紫さんの弔辞を読むなんていうことは、間違いなく涙は出てくるし、倒れちゃうかもしれないので、もちろんそれは誰もいないならしょうがないけれども、気持ちの中では着信拒否というか、あまり出たくないと思っています。今日は、携帯電話はカバンの中に入ったままです。そういう風に、同じ人物でも相手でもその時々に応じて言い訳は何でもついて、それが段々とズルさを生んでくるということがある。裏サイトみたいな、闇サイトみたいなものが出てくるというのは１つの考え方で、ちょっと興味がありました。それでは次、鈴木。

鈴　木　ノースアジア大学法学部３年の鈴木快士です。私は「教育について、これからの先生と保護者」について書きました。

最近、教育の現場が乱れています。それは先生の質が低下したからだと思いました。中学校のとき、よくいたずらをして先生に怒られて、ゲンコツなどされましたけれども、今は少なくなってきていると思います。高校に入ってからはゲンコツされることはなくて、反対に怒っている側でしたけれども、最近はそういう先生はいなくなってきているなと思いました。

しかし、全て先生が悪いわけではありません。その先生を怒る保護者がおかしいと思います。この前、「モンスターペアレント」というテレビ番組がありましたけれども、保護者が「あの先生はこうだ、だからこうだ、こうだ」という風に怒っているから、子供が、生徒が付け上がって、子供が怒るんだと思います。実際、私も高校の時に先生が正しいことを言っているのに保護者がおかしいんじゃないとか、あの先生はここがおかしいから反省してくれとかよく聞きました、そういうのは保護者がおかしくて、先生は何も悪くないのに何故、保護者が教育の現場について怒るんだという風に思いました。

その保護者の問題があって、その中に給食の未納費問題があります。給食というのは学校が栄養の摂れない生徒に食べさせるというもので、親が払わなければならないものを何故払わな

いのかという問題で、そこが疑問に思ってしょうがないところでした。また、学校選択制という問題もありました。学校選択制というのは特別な事情がない限り、保護者が学校を選択出来るという制度です。例えば、いじめがあって学校を変えたいとか、ちょっと遠くて近くの学校に行きたいということで学校を選択出来る制度です。

でも、これは今、東京の方では子供が通っている学校が受験勉強という点で近辺の学校より劣っているし、担任に要望しても改善されないから、学校を変えて受験勉強に有利な学校に行かせたいという、安易な理由でその学校を変えてしまうという制度があります。これはおかしいと思います。小学校、中学校の９年間は義務教育で、勉強だけでなく、集団行動や協調性を養うためにも大切な期間であると思います。この期間を、保護者が子供に受験勉強をしやすい制度のためにあっち、こっちと安易に変えて子供の負担を増やすというのはどうかと思いました。それで、この学校選択制を正しく使って、受験勉強ばかりじゃなくて協調性や集団行動を学ぶ、そういうことを考えながらこれからの教育を作っていかなければならないと思いました。

福　岡　鈴木は体が大きいだけじゃなくて、包容力もあります。結構面白いものを持っている。だから、今のも全体の文脈、脈絡でちょっと違うなというところもあると思うんですが、伝えようとする部分にはとってもいいものがあるという風に思いました。

モンスターペアレントの部分と例の厚生労働省次官殺害のテロリストについて、本当は時間があれば詳しくやりたいんですが、今日は詳しくはやりません。彼の犯罪の理由は小さな頃に飼っていた犬を、ちょっと噛んだり、吠えたりするので、お父さんが彼のいない時に保健所に連れて行って、処分されてしまった。そのことが、保健所は厚生労働省ではないんですけれども、厚生労働省が悪いというところに結びつけてしまった原因。１年ほど前から思いが強くなったのは、おそらく年金とか天下り問題のことである。

しかし、一方で彼は３年前に１千万円近い預貯金を持っていて、それを崩しながら生活をし、パソコンで株をやるデイトレーダーで、どうもこの数ヵ月で500万円以上の借金を作っていた。それでもってやれなくなったので、覚悟を決めた。そうするとこの人は昔から当たり屋を含めた、モンスターペアレントじゃないけれども、クレーマークレーマーの人間なんです。そういうものなので、本当のところは何なのかというのを、今の鈴木の文章を読みながら、きっと理由付けは他のところにあったと思う。今まで何とかお金があって、キャバクラの外国人女性と楽しくご飯を食べていたり、財布を彼女の方から居酒屋さんで出してもらっていたりしたみたい。おそらく、関係から見れば、彼は相当のお金を渡しているんでしょう。その彼女が彼に惚れて自分で払うというケースは、通常はおそらくないと思います。

そのようなことを含めると、いわゆるクレーマークレーマー、モンスターペアレントの問題があって、その時に教師や子供達が「やっぱり違うよ」という感覚は、やっぱり彼の方が正常なのかなという風に思います。もう１人、千田。

千　田　ノースアジア大学法学部３年 千田遼典です。私は「教員と親との信頼関係から見る教育問題と教育の本来の姿について」という主張でまとめてきました。

子供は絶対的に経験が少ないため、何が正しいかを判断し、どのように問題を解決すればよいのかという課題に直面したとき、困難に陥りやすいのは至極当然であると私は考えています。教育には親、教員および地域の人々の支援と協力が必要不可欠であり、それが現在の教育問題

を解決するために非常に重要性があると、私は考えています。

例えば不登校に悩む生徒がいた場合、その多くは学校に行かなければならないと自覚しています。その生徒が自覚しているから、教員や親の後押し次第で問題が解決出来ることが多いです。また、「いじめ」や「非行」は、一昔前までなら教員と親との連携で解決してきた問題でした。だが、現代社会において、この親と教員の協力関係は、皆さんご存知のようにみられなくなってしまいました。教員１人１人が頑張っているだけで、「モンスターペアレント」に代表される自己責任を放棄した親が、個々の教員や学校に一方的に責任を押し付けているのが現状です。

少し話が変わりますが、私は先月、教員免許取得のために介護等体験の実習に１週間参加してまいりました。私が行った施設では重度の知的・身体的障害者の介護と教育の現場に行きましたが、その現場で感心させられたことが、親と教員との強固なネットワークがあったことです。家庭や学校での指導について、親と教員が相互に意見を交換し合って「家庭では〇〇して下さい」「学校では〇〇して下さい」と要望する姿がありました。そういった光景は、普通教育では目にしたことのないものでした。介護等体験の実習に行く前に「特別支援教育は全ての教育の原点である」と教わったことがあります。生徒の１人１人と真剣に向き合い、家庭と学校が協力して支援する光景は、まさに教育の本来の姿であると痛感しました。

私達は、学校の持つ学習支援サービス部門ばかりに目を向け、その先にある教育という大切な事柄を忘れかけているのではないだろうかと思います。親は子供のために体を張り、教員は生徒の模範となり、時には壁ともなる。地域社会は生徒の社会規範習得のための手本となるべきであると考えます。

そんな当たり前の光景を失ってしまった現代だからこそ、まずは親と教員との間に協力・支援関係を築くことが、混迷する状況を立て直すために重要なのだと考えます。現在の多くの教育問題も、原点を探ればこの協力関係の不存在が招いたものではないかと、私は感じます。

福　岡　千田は教員志望で、岩手県で教員になりたいというのですが、岩手県の教員は数人しか採らないですから、なるのは難しい。神奈川県だったら何百人も採るんだからと言っても、本人は神奈川県までは行きたくない。しかし、自分の仕事の場があればどこまでも行くのが男なのに、どうも、この岩手県と秋田県の人はふるさとが大好きなんです。(発表者に向かって）どうもありがとう。

結論、先生が悪いという人がたくさんいる。親が悪いという人もいる。まだ、私達は結論を出せないんですが、今の千田のように、先生も親も悪いんだから一緒になって、子供達のために色々なことをやる。

最近のある調査で、おじいちゃんやおばあちゃんと暮らしている大学生は性格が優しいそうです。イマジネーションがあります。包容力があります。私は駒澤大学から白鴎大学、立命館大学、ノースアジア大学の４つの大学でゼミナールを持っていますが、おじいちゃん、おばあちゃんと話をする子は優しいです。男としては、もうちょっと物足りないかなというところもありますが、優しいです。女の子も優しいです。

私の母親は、95歳で生きています。普段は車椅子に乗って歩くんですが、手を繋いで歩くことも出来ます。それで、小学生と中学生のひ孫がおばあちゃんの手を取って歩いたり、歩かなくとも「〇〇ちゃん、おばあちゃんの手を繋いで歩いて」みたいなことを親が言うという状況

です。そういうものがあるんだったら、３世代家族がいいのか。けれども、今は間違いなくお嫁さんは（夫の両親と）一緒に住みたくないから、小さくてもマンションを買って住んでいるという状態が多いと思います。そうすると、何となく大変なのに、出かけるのにも乳母車持って、雨の日であれば傘まで持って行かなきゃいけない。そうなると、一緒に住んでいた方がいいんじゃないのか。その中でおじいちゃん、おばあちゃん達は色々な話をする。前にこの話をしたかもしれませんが、私の95歳の母親が孫と遊んでいた時、その孫に「今度は赤い積み木だけ集めよう」と声を掛ける。それで集めてきます。次は「今度は同じ形のものを集めてこよう。丸とか三角とか」同じ遊ぶのをガチャガチャやらないで、その95歳の私の母親は、きっと私にもやったと思いますが、そうやって次々と色々な形でもって遊ばせている姿を見ると、やっぱりおじいちゃん、おばあちゃんの知恵だとか、そういうものが出てくる。

アメリカにいた時に向こうの理科の授業をたまたま見たんですが、「今日は２時間理科の授業です」と先生が生徒全員に紙と鉛筆を持たせて、森の中に入っていく。「この葉っぱ、どうして網の目のようになっているのか。こっちはどうして平行になっているのか」「何でこっちの葉っぱは緑で、こっちは枯れているんだ」そうやって実物を見せながら授業を進めて、「空気がおいしいね。やっぱり都会と違うね」と体験をさせながら、その人のイマジネーションを作っていくというやり方でした。

先週の土曜日、京都の立命館大学の授業を終えて帰ろうとしたら、松下政経塾の教え子で民主党の山井和則から「先生、障害児施設で保育士をやっている教え子が今度、市会議員選挙に出るんで、ちょっと応援に来て下さい」と言われて、ちょっと手伝いに行ったら、その子がこう言いました。「やっぱりゲームだとかじゃなくて、自然の中には何とも言えない教材というか、遊び道具があるんだ。滑り台じゃないけれども、坂があってそこを滑ったり、色々な物があって、小さな池があったら、危ないということをそこで学ぶんだし、そういうようなことを自分は１人の保育士として、特にハンディキャップを抱える子の指導を仕事としてきました、10年間」こういう人が市会議員になったらいいのにと思いながら、話をさせて頂きました。

それで、メディアに関することからちょっと簡単に総括をして、質疑応答にいきます。最近、ハマコーさんがテレビに出ない。私はちょっと忙しいだけで出ていませんが、竹村健一も日曜日の朝出ない。福沢何某という人も、最近ちょっと出て手伝おうかと思ったら番組が打ち切り。福留何某という人も出なくなってきた。理由は、賞味期限が切れてきたこともあるかもしれないが、本当のところはギャラが１時間100万円と高額であること。もう、テレビ局はそんな高額のギャラを払えるところはない。「TV タックル」では、私は20万円程度で高い方ですが、普通の先生は10万円、政治家は１万円です。だから、どうでもいいような人が出ている。それは選挙運動だと思っている人もいる。だから最近は、松下政経塾の子が出ていても、私は口をきかない。もちろん向こうから来たら挨拶くらいはするけれども、今はそういう状態です。

あと、時給500円程度の吉本の芸人達が出てきて「レッドカーペット」という、フジテレビ系列で水曜日夜10時から視聴率20％ほどの番組があります。30秒か１分でお笑い芸をやる。「グゥー」とかやる彼女が流行語大賞を取ったかもしれないが、来年のいつまでもつのか。人が良さそうかもしれないが、三味線を持って何とかとやっていた芸人はどこへ行ったんでしょうか。とにかく、もう賞味期限は半年か１年です。歌手もそうですが。そういうような中で、明石家さんまのように、吉本で時給300万円の人もいる。でも、他は時給500円というようなやり方。

こっちでは「たかじんのそこまで言って委員会」という番組をやっていますか。東京ではやっていません。だって、あんな危ないことを言っていたら、ジャニーズ事務所とかみんな怒りますから。私は辛坊治郎が「１回、先生出て下さい」と言われたので出ましたら、関西の友人が「あんな番組やめとけ。TV タックルだけでも問題があるのに」と言われ、その後は出ていません。だけど、TV タックルと同じメンバーが出ていることはお気付きでしょうが、テレビの世界は柳の下にドジョウは２匹か３匹います。同じような番組は、太田総理の何とかという番組も同じです。もう、能のないようなテレビ局のディレクターとかそういう連中でいっぱいです。

とにかく数字になればいいというやり方でやってきたテレビ局が、フジテレビを除いて絶望的です。全部赤字です。もたないかもしれません。それくらい厳しいです。特に地方局。秋田は TBS 系がなく３局ですからまだいいかもしれませんが、それでもスポンサーがないから番組宣伝ばっかりです。まあ、ほとんどいらないのでフジテレビ系列と日本テレビ系列は一緒になって、あとは TBS 系列とテレビ朝日系列の２つくらいで、もう東京から垂れ流しというような状態になって、ますますくだらない番組ばかりになる。でも、NHK 特集とか見ていたら「やっぱり、なかなかすごいな」と思うようなこともあります。

ちなみに、見るテレビの番組によって、はっきりとした年収の差があります。お笑い番組を見ている人の年収は600万円以下の人が多いとか、これは私が言っているんではなくて、調査したものです。年収が600万円から700万円以上の人達は NHK 特集とか見ていますし、見る番組の中身が違う。そういうことで、これからのテレビ局はデジタル化の問題もあるけれども、やっていけないから、ますます安いタレントを使ってどうでもいい番組を作る。

今、ちょっと言い忘れましたが、テレビ東京系はこちらでは映っていないと思いますが「カンブリア宮殿」という大変面白い番組があって、村上龍という作家が小池栄子さんと司会をしています。先日は、広末涼子さんが卒業した品川女子学院という高校の校長が出ていました。以前、なんと１学年５人まで減って潰れかかったところですが、受験生が60倍くらいに増えて、偏差値が20も上がった学校です。このテレビ東京の「カンブリア宮殿」なかなかいい番組です。ビジネスモデルで色々なことをやっている社長さん達がもう100何人も出ている番組で、視聴率は５％くらいですが、それだけ補足しておきます。

それで、これがメディアというものは、テレビはもう駄目だと思う。まだ、新聞は読めば自分で何か考えるということもありますが、このテレビの問題は色々考えていかなければならない。ところで、テレビを消す家庭がいます。これは家族の会話を奪ってしまうからです。それから、２つも３つもパソコンで見られるようになると、もう全然喋っている内容に共通点がなくなってしまうということです。

２点目の子供についてですが、これは今の携帯電話の問題です。とにかく、最近の大学１、２年生がほぼ絶望的です。まず、人と一緒に何かをやろうという感じがない。一緒になって汗をかこうというのがない。それで、私は何をやっているかというと、グループ学習というか班を作らせています。例えば、限界集落の高知県の大川村。ついに人口の700人中364人が65歳以上の高齢者です。ここに立命館大学の学生４人を行かせたんです。また、福知山の病院で赤字だったのが黒字になった病院があります。どういう風にしてやったのかというのを学生に調べさせています。旅費は多少バックアップしますけれども、そうやって自分達で報告し、先輩達がアドバイスをしていくという、そうやらないと自分達で考えるということがない。今日のレ

ポートにもありましたが、今の子供達はとにかく人と触れ合いたくない、接点を持ちたくないという子が多い。

例えば、お母さんはパートに行っているので、家に３時頃帰っても誰もいなくて、机の上に300円くらい置いてあって、それでおやつを買って食べて、お母さんは７時30分頃に帰ってくるから、その頃ご飯が炊けるようになっていて、コンビニかスーパーで何か買ってきて、それで夕食だから。おじいちゃん、おばあちゃんもいない。それで一人っ子だったら喋らない。個食、１人でしかご飯を食べられないのが大学生にもいる。みんなと食えないという学生もいる。色々なことが出てくるというときに、人間なんか人と触れ合わないと生きていけない。でも、今の子はしません。だから、もっと色々な失敗をして、先輩に怒られて、私は色々なゼミナールの学生同士を会わせることを通じて、そういう機会を作っている。先輩が後輩の面倒を見る。上下の伝達がないところには成長はないです。ここをどういう風にするかということが、一番大事だと思っています。

それから、親も悪いんだし、先生も悪いんだけれども、みんな悪いんだし、みんなで一緒に子供を何とかしようと思う。私は大学の教員で、大学の授業料で生きているんだから、１人でも多くの学生達が自分の目的を持って先生になったり、あるいはどこかに受かって欲しい。教員として一番嬉しいのは、朝起きた時に携帯電話を起動させると留守番電話とかメールが入っている。「先生、〇〇受かりました。ありがとうございました」自分の望むようなところに受かれば、当然報告が留守番電話かメールに入っている。そうしたならば、すぐに電話して「良かったな、お前」と言える。そして３月の卒業式の時に、とにかく「良かった」と握手をする。そういうことを自分のゼミ生とやりたいと思うけれども、なかなか簡単ではない。同じ学年の何百人の中でもなかなか上手くいかない。高校の先生も同じですが、教員も職員もそういう気持ちでないといけない。

義家弘介は、先生というのはお節介な先生がいいと言っている。いつも元気な奴が痩せていると「どうした」と聞きますよ。「先生、１週間飯食えないんだ」それは病気だと思う。下痢して痩せたんだったらいいけども、違う。「いや、親父の会社が倒産して、俺、学校辞めなきゃいけない」と言うんだったら、「そんなこと、俺とお父さんとお母さんで考えるし、〇〇学資とかってあるんだから、学業特待もあるんだから、授業料半額になるのもあるんだから」とアドバイスをする。そういうお節介な先生はいなくて、見て見ぬふりする先生しかいない。先程の品川女子学院の30分の VTR を見たんですが、すごいですよ。昼休みに、職員室の前で数学とか英語の先生が順番にご飯を食べるそうですが、職員室の前に横に机を並べて、どうしても分からない生徒が20人、30人とそこに聞きに来る。こういった学校改革をやったのは品川女子学院の経営者の娘さんです。今、東京ではとても有名な人だそうですけれども、私は初めてそれで知りました。

子供達が独り善がりになって、インターネットオタクになって、１人でもがいているところに何かちょっとしたアドバイスをしなければならない。この間、立命館大学の学生が東京に来て、それで白鴎大学の学生や OB と色々話をしていて、立命館大学の２年生の学生が「私、文学部なんで仕事ないし、担当の先生が東大出身なので、東大の大学院に行って歴史の先生になりたい」と言うけど、簡単に決めるなと思います。受かるかどうか分からないし、歴史の先生なんか、そんなにどこでも採らない。東京大学を出た先生だから「大学院に行くんなら東大か」と言うが、先生がもっと子供の目線に立って、本当にその子の一番のチャンスが何かと言うこ

とを考えていない。けれども、全部拒否も出来ないから「おい、〇〇さん、もうちょっと考えてみろ。文学部の歴史科でもって、世界史やって飯食いたいと言ったってそう簡単ではない。東大入るのだって、最後は２科目、英語と第２外国語、もう１科目やらなきゃいけないし、どこまでやっているんだ」とか、ましてパスポートも持っていなくて、海外旅行もしたことのない学生が嘘でも「もう、２回くらい行きました」って言うんだったら分かる。実を言うと、教員は長くやるとそういうところが分かる。この子は頭でっかちだなとか、何も考えないで飛び込む子だなとか。

３点目、教育の問題ですが、教育の現場で一番多い問題は、高校中退の落ちこぼれの問題とか、中学でもどうしようもなくなる部分。中学は義務教育だから、嘘でも卒業させるんです。高校の場合は「もう、いいか」となって、辞めてもじっと見ているだけです。今、白鴎大学に大検というか、高卒認定でもって来ている学生がいる。けれども、やっぱり苦労しているから並と違う。まだまだ生意気だけれども、化けるかもしれません。一番駄目なのは、附属から来て受験勉強も何もしないで、麻生太郎や安倍晋三みたいな奴。やっぱり受験勉強して、失敗して挫折していると違う。一度言ったと思うけれども、高校受験は失敗して、中学野球部で両国高校受けた15人の中で私だけ落ちた。兄貴は３人とも両国高校に受かって、東京大学や一橋大学に行って、今テレビ局の社長とかしています。その高校受験失敗の時、相田みつを「つまづいたっていいじゃないか　人間だもの」という色紙を先生がくれた。そして「福岡、人間は失敗が終わりじゃなくて、始まりなんだ。お前、算数が苦手だから大学受験はよく考えろ」と言われた。私はズルして私立文科系で英語、国語、日本史で早稲田大学しか受からなかったけれども、それも１つの手です。

その後、駒澤大学で14年間も助教授やらせられた。私は学部の50科目中、48科目「優」で、大学院は全部「優」です。逮捕歴はありますけれども、27歳でトントンと博士課程は出たんです。駒澤大学に行って33歳で助教授になったけれども、テレビに出始めたから教授にボコボコにやられて14年間も助教授で、やっと白鴎大学に拾ってもらったという話です。早稲田大学の４歳年下で修士課程しか出ていない後輩がある時、先に教授になった。「〇〇先生、教授への昇進おめでとうございます」私も悔しいけど拍手した。そういうようなこともあるけれども、「失敗しても次だ」と言われるから頑張れる。人間なんて何度も何度も失敗する。そういうようなことを子供達にきちんと教えるというのも大事です。

今、大学での私の授業の受講者数は30人です。かつては100人いましたが、厳しくしたから今は30人しかいない。だけど、１日１回は当てようと思っている。毎回、問題を作って。昨日の問題「麻生太郎の暴言、失言について、お前、どう思う？」と学生を指す。その次、オバマ次期大統領の生き様について質問する。他には、「チロという犬が殺されたから、頭に来てテロリストになったと言うけれども、本当はデイトレーダーで500万円も借金を作って、実際のところは、佐賀大学中退の頃からクレーマー・クレーマーだったとか。本当のところ、このテロリストの真意は何だと思う？」「日本の適正人口は何人だと思う？」答えなんかないですから。１億人とか、５千万人とかと答える学生が必ずいる。けれども、90分の間で30人の学生に１日に１回でも喋らせる。その短い答えの中でも、ちょっと気の利いた答えを言った奴がいたら褒める。１人目、２人目と当ててこういう問題だと分かっているのに、自分が当てられてから考えている奴がいる。「お前、前の奴が当てられている時に、自分はどう答えるか頭を使って考えるんだ」そういう風に言うと「そうなんだ」という学生がいる。先の品川女子学院は

「心のスイッチ」を入れてやれと言う。「入っていないんだ、お前のスイッチは」と何回か言うと、やっぱり向かってくるような子がいる。そういうようなことで、この30人学級は頑張っています。

それから、何回かに１回、例えば「今日は、麻生太郎と小沢一郎と平沼赳夫の３人の話をする」と言って、ノートを出させて30分間メモさせる。記述力です。これを私もやるけれども、新聞記者になろうとしている学生の面倒をみている仲間の人間にも添削してもらう。こういうのをやると勉強になります。ちょっと本のタイトルを忘れたけれども、東京大学出身か在学中の女の子が書いた『東大合格生のノートはかならず美しい』という本が、昨日か一昨日の新聞に出ていました。きれいというのは、やはり整理する能力があるんです。例えば「小沢の特色は２点です」と言うと、小沢のところに１、２と書いて、という風に何回かノートをきちんと取るという訓練をすると、記述力の向上に繋がる。

そして、現場です。私達のゼミナールはボランティア活動をやっていますけれども、現場に行かせるんです。プーケット島の奥地に10数人、住宅建設に行かせた。隊長と副隊長を決めて、私は行けないので、看護師さんに一緒に行ってもらって「とにかく２週間行ってこい。向こうの学生や軍隊と一緒に。後は向こうの指示に従ってやれ。俺は現地のこと知らないから」と考えさせるんです。戻ってくるとガラッと変わる。授業で教えるよりも何倍も。マニュアルのないことである。

今日連れてきた白鴎大学の３人の学生は昨日、中畑清のチャリティーゴルフのオークション大会に参加した。しかし、ドジだから原辰徳が来たのに帰っちゃったらしい。彼はゴルフをやってサッと帰ってしまった。１人くらい、入り口にサインノート持って立っていればいいのにと思う。でも、そういうような時にマニュアルも何もない。だからといって、あまり図々しくじっとついているのも変だ。そういうものを、１回、２回と現場を踏んでくると色々なものが出てくる。当然後輩に伝えることも出来る。現場・現地主義というのはそういうことです。それと、先程言ったグループ学習もそうです。

最後、家庭。とにかく、おじいちゃんやおばあちゃんと暮らせるような状況になる子は優しい。妹のいるお兄ちゃんは優しい。そういうのも何となく分かりますよね。私の家は、子供が１人生まれた後に女房のお母さんが癌で寝たきりになっちゃったんで、子供は男の子１人しかできませんでした。本当は女の子も欲しかったし、出来れば３人くらい欲しかったとも思うし、兄弟があった方がいいと思うし、と色々ある。それで、私はもう１回、今日のレジュメにもあった通り、家庭というものは何かということを、日本人が真剣に考えなければいけない時であると思う。これほど親が子を殺し、子が親を殺し、いわゆる虐待というか家庭内暴力が増えている。

私のゼミナールでこの問題を取り上げた時、幼児虐待のその時の数値で30％くらいだったか、40％くらいだったか。望まれないで生まれてきた子とか連れ合いの子とか、できちゃった婚で生まれた子とかを、新しい旦那さんや同棲している男なんかが、殴ったり蹴ったりして子供を死なせたなどというケースが多い、という資料を数年前にゼミナールの中で使った。できちゃった婚とかあまりいいことではないけれども、馬鹿なテレビは「できちゃった婚です」とか言う。子供より男を優先した。悲しいことです。親の母性本能というのは、最近の心理学では嘘でなかったかという説もあるそうですが、そう言われてみればそうだというような、ちょっと中途半端になりましたが、テレビ・メディアのデタラメです。

特に今日はインターネットのことは言いませんが、インターネットの色々なものを見るともうたまらない。私はあまり見ないけれども、とにかく何でもありということです。教育の現場、学校の先生は一生懸命やっているが、見て見ぬふりをする先生がいる。自分は教員として偉いと思っている部分があるし、特に常識のないのが大学の先生。大学の教授会の中身を聞いたら、皆さん唖然としますから。この人達は社会のことをあまり知らないで、大学教授ってそんなに偉いのかなと思います。免許がなくてなれる唯一の教員ですから、大学の教員は。それから、子供達も今のままだったらどうなのでしょうか。家庭の中でどれだけ会話があるか。大変でしょうけれども、なるべく子供の話を一生懸命聞いてあげるとか、そういうようなことであります。それでは質疑応答に入ります。どうぞ。

柴　田　色々な諸問題を聞きましたが、これを簡潔に要約して１人１人の生き方をどのように表現すればよいか、学問でも科学でも１本の木に例えれば、葉っぱや枝に重点が置かれて、分析やたくさんのお話が付くけれども幹や根に当たる部分、学問の行き先の根本問題というものを簡潔に会得出来る方法が欲しいと思います。先生の分かる範囲で教えて下さい。

福　岡　大変厳しい質問ですね。『壊れてゆく日本』という本の最終章に「分かち愛」という言葉を作りました。(板書して説明) それは元々分かち合うという言葉ですがその字をちょっと変えて「分かち愛」という言葉を締めの言葉にしようと思っているんです。それは思いやりとかいたわりとか分かち合うとか。麻生太郎が「俺は元気で税金をいっぱい払っているけれども、同級生でタラタラして、糖尿病とかでヨボヨボしている奴に俺の金を使いたくない」そういうことは仮に心の中で思っていても、社会保障という意味や分かち合うという言葉を考えたら、普通は言いません。少なくとも、総理大臣はそういうことを言ってはいけない。

逸見政孝が胃癌で手術をする時に、私がある病院にお見舞いに行って「とにかくセカンドオピニオンを聞け。切る前に、もう１人くらいに診てもらえ。私が医科歯科大とか、東大紹介するから行ってくれ」と言って、枕を投げつけて喧嘩をしたんですが、結局はああいう結果になりました。その逸見正隆が明治生命のコマーシャルに出ていた。板を持って割る「いたわり」重い槍を持って「思いやり」唯一、面白いコマーシャルだなと思いました。思いやりとかいたわりという気持ちは、本来なら日本人の原点なんです。分かち合うのもみんなで分け合って、農家だって、みんなで一緒に田植えをするというのをやってきた。

そして、日本ぐらい町並みがない国もないじゃないですか、東京駅の前だって色々勝手にやっている。町並みだって、同じような色や形でもって、フランスだとかイギリスのようにやるのが町並みであって、自分勝手な鉛筆ビルがいっぱい建っているでしょう。どうでもいいような、５坪くらいのビルが10軒くらい建っている。みんなで仲良く、一緒の入り口やエレベータを作ったっていいのに。

色々あるこの問題の元は宗教的な言葉になるけれども、私は最終的に「心」だと思う。駒澤大学の野球部前監督で太田誠先生が必ず言うセリフは「絆」でした。(板書して説明) 絆という字は糸が半分という風に書きますが、では残りの半分は何で繋ぐんだというと、心で繋ぐんだということです。箱根駅伝に出場する駒澤大学陸上競技部が必ず１月１日の夜、福島県出身の大八木監督は襷を持って全員を集めて「明日、心で繋げ」と言って襷を渡す。それが太田監督の言う「絆というのは家族の絆、社会の絆というのがあるが、糸が半分しかないんだから、

心で繋ぐんだ」ということです。そういう風にして絆というのは分かち合う、お互いに良かったなというような気持ちになれる。番組収録の中で、私が堀江貴文に「やっぱり拝金主義の中で、あんただって本の中で金があれば人の心でも、何でもどうにでも出来るというようなことを書いてあったけれども、そう思っているのか」ということを聞きました。彼は答えませんでした。だけど、人間って金の量じゃないでしょう。小室哲哉を見れば分かるでしょう。どこかでもって「友情って良かったなあ」そうやって一緒になって喜び合える力、そういうものだと思います。

齋　藤　下の子が大学に入学して、入学した以上は学生をきちんと卒業させると言われました。先程、先生がおっしゃった通り、大学の教授というのは色々ありますということで、今は２年生でゼミナールに入っていますが、何故か先生と息子だけというゼミナールです。高校を卒業して最初に触れる大人というのがゼミナールの先生だと思います。福岡先生の授業では30人ということでしたけれども、息子のところは１人のゼミナール生ですので、先生の都合に合わせてゼミナールをやっているような状況らしいんです。息子は自分が選んだ先生ですから、それはそれで満足しているようですが、その子供の将来にとって、ゼミナールの時間というのが人生に大きな影響を及ぼすと思います。それで、そのゼミナールにおいて子供達に対する大人としてのサインというのが、これからある程度求められてくると思います。まして、それが社会に出たときの布石になると思うんですけれども、そういう意味でゼミナールを担当される大学の先生達は子供達をどういう風に見ているかというのを、子を持つ親としては考えておるところがあります。その辺のところのご見解を伺いたいです。

福　岡　今のご質問者のお気持ちはよく分かります。私は息子が１人いまして、ある高校に入れました。その高校はたまたま私の教え子が先生をしていて、結果的に良い指導を受けて大学に入りました。今、その先生には、ちょっと白鴎大学でも教えてもらっています。今年初めて、私は白鴎大学の入学式に出て、教員が退場した後で事務局からのお知らせということで、私は学生と出て「公務員コースをやります」と言って、パワーポイントを使って説明しながら「過去にこういうところに○○高校出身の学生が行って、社会科の先生はこれ、英語の先生はこれ、私も少しやります」と言って、色々なことをやったら60人くらい学生が来た。それで、先々週の土曜日に、白鴎大学の１、２年生の父兄懇談会があった。600人くらいの父兄が集まって、私は今日のように１時間くらい政治の話をし、残りの10分でもう１回公務員コースの説明をした。「これから景気が悪くなって大変なので、とにかく公務員は色々な意味でやりがいがあるので、公務員というのは本当に困っている人のために働くというのが原点ですから」そうしたら、昨日になってまた10数人増えました。教える時に１人の先生では偏りがあるので、私のところは何人かの先生でやります。人間って色々な意味で相性があります。ですから、色々な先生の相性を見ながら、逆に私が他の先生を褒めたりして、「おい、○○先生が○○でこういうところがあるんだ」こういうことを言いながら、「自分の目でもって授業を受けて考えてみろ」そうやって幾つかの選択肢があった方が、子供にとってはやっぱり一番いいと思います。

立命館大学では、１年生から２単位のゼミを２つか３つ受けられるようになっているんです。私の立命館大学のゼミナールは自主ゼミナールなので単位はありません。ノースアジア大学でも単位はありません。それでも、20人だ、10人だと集まってきてくれるのは、「単位がなけれ

ば卒業出来ない」と言うせこい学生もいるけれども、それ以外に何か学べるし、今はOB達が来て、後輩達に指導が出来るという場があるからだと思います。そういうシステムが出来上がると、随分と変わってきます。

そして、色々な先生が教えてくれて、色々な選択肢があると、例えば公務員志望で入ってきた子にも「お前、他の仕事でも出来るぞ。考えてみろ」ということが言えます。中には性格が歪んだ子もいるけれども、時々、ビシッと怒ってみるといい意味でまっすぐになって向かってきます。私も教員を27、８歳から35年間やっていますから、この子はこういうタイプだな、あの子はこういうタイプだな、あいつは突っ張っているけれど、本当は気が弱いんだろうというようなことが分かります。こいつはなかなか人当たりがいいから、営業がやらせたらいいだろうということで資生堂でベスト10になった子もいます。ですから、最後は学歴とか学校名ではないです。

そんなことを考えると、色々な人から色々なものを得て、どれだけその人達から感じる能力を高めるか。馬の耳に念仏とか猫に小判とかありますけれども、言って分からない奴は駄目です。でも「それじゃ駄目だぞ」と言って、少し踏み込んで話して、もっと人の話を素直に聞けるようになってもらう。この間、薬害肝炎訴訟の山口美智子さんが大学に来てくれた。彼女は小学校の先生ですが、ゼミ生７人と飲んだ時に「みんな、素直になりなさい。素直に人の話を聞ける人は伸びるよ」と最後に言ってくれて、そのことに何かを感じた学生は何人かいたようで、私も全く同感でした。そういうことで、どうぞ色々な人のアドバイスを参考になさって下さい。

来年の講演会もやる方向で、知事選挙とか色々あるみたいですし、限界集落についてもちょっとまとめてみたいと思っています。どうもありがとうございました。

橋　元　これをもちまして、ご講演会を終了させて頂きます。福岡先生、素晴らしいご講演をどうもありがとうございました。(拍手)

[講　義]

チャベス主義を巡る南北アメリカ関係

阿曽村　邦昭

１．はじめに

この講義では、既に権力分立論の具体的制度化の事例として米国の大統領制について説明し、ついで、大統領選挙の実体を知るために共和党のマッケイン候補と民主党のオバマ候補のテレビ・ディベートの内容を映像を通じて紹介し、更にオバマ候補が当選した後では、この米国史上始めての黒人大統領出現に至るまでの米国における黒人の人権運動の歴史について、差別撤廃の持つ重大な意義を我が国自体における様々な差別問題とも関連させつつお話したのであります。本日は、南北アメリカの関係について、私がかつて在勤しておりましたベネズエラのチャベス現大統領の動向との関連においてお話ししようと思います。今日は、本学の先生がたのうち若干の方々がおいでになっているようでありますが、聴講者が殆どが学部の学生であることを考慮し、まず、中南米についての基本的な歴史、政治、経済に係わる特徴を概論的にお話し、次に、ベネズエラのチャベス現政権の性格と政策、その南北アメリカ関係に及ぼす影響について触れることといたしたいと存じます。

なお、お手元に配布致しました資料は政治、経済情勢を内容とする資料１と最近の主な動きを内容とする資料２からなっておりますが、これは外務省の中南米局作成のものでありまして、現在のラテンアメリカの情勢をパッと一目で分かるように要領良くまとめられております。また、チャベス政権につきましては、昨年12月にチャベス大統領が事実上の終身大統領制をねらって憲法改正を試み、国民投票で破れた辺りを中心にイタリアのテレビ局作成の映像を10分間見て頂き、現地の雰囲気を味わって頂こうと考えております。

２．地域の概要及び呼称問題

さて、私は、これからお話しようとする地域に関して既に「中南米」という言葉を使いました。「ラテンアメリカ」という言葉も使いました。「南北アメリカ」、つまり、アメリカ大陸の南部と言う意味の呼び方もしたのであります。これは一体何処にある地域かといえば、お手元の資料「最近の中南米情勢」１．「政治」の右側にある地図に記載されている米国以南の地域であります。

この地域は人口約５億５千６百万人、世界人口の8.5%を占めております。国の数では33カ国で、世界192ヵ国中の17.2%、面積は２千41万平方キロメートルで世界の15.2%です。経済力指標である GDP (国内総生産）総計では２兆９千４百52億ドル―これは2006年の世界銀行の統計が出典ですので、世界の6.1%です。ちなみに、日本は世界の GDP の9.0%、中国は5.5%、北米が30%、欧州連合全体で29.8%です。つぎに、一人当たりの GDP で言いますと、この地域は同じく2006年で５千２百98ドルで、世

界の平均である７千４百２ドルよりは低いのですが、中国の２千34ドル、ASEAN の１千８百75ドル、アフリカの１千１百50ドルに比べれば遙かに高く、様々な後進性を抱えているとはいえ、世界の中では「中進国」的地域と申せましょう。ちなみに、日本の一人当たり GDP は３万４千23ドルで、世界の中での順位が可成り低下したとはいえ、高所得国です。最近円高が急速に進んでいますから、ドル表示での一人当たり GDP はもっと高くなっていることでしょう。

つぎにこの地域の資源力について申し上げますと、石油産出量は世界の12.9%、銀産出量は38.5%、鉄鉱石は19.6%、銅産出量は44.7%、モリブデンが34.2%、リチュウムが48.3%です。食糧供給力も極めて高く、大豆は世界の44.6%、コーヒー豆は61.2%、砂糖キビは47.5%、オレンジが40.5%です。

さて、コロンブスは地球球体説を航海に取り入れた点では新機軸を生み出したと言えましょうが、その他の点では中世的迷妄から脱却しておらず、聖書にあるアジア、アフリカ、ヨーロッパ以外の新大陸が存在するなどとは夢にも思わなかったのであります。で、この地域を最後までアジアの一部と考えておりました。アメリカ大陸がアジアとはまったく別の新大陸であることを始めて示したのはアメリゴ・ヴェスプッチでありまして、彼の名前にちなむ「アメリカ」という呼称が植民地時代にコロンブス起源の「インディアス」に次第に取って代わられるようになります。ちなみに、このアメリゴ・ヴェスプッチは今のベネズエラ東部にあるパリア半島に1499年にやってきたのでありますが、一年前にコロンブスが此処に上陸しているので、自分が最初の発見者であると言い立てるために航海日誌を改ざんし、1497年にこの半島に到着したと言う虚言を公にしたのであります。1820代のこの地域の諸国独立に至るまで、この地域の人々は、こういうあまり感心出来ない人物の名にちなんで、一般に自分のことを「アメリカーノス」、つまり「アメリカ人」と呼んでいたのです。

ところが、19世紀半ばになりますと米国が発展し、南下を試みるようになります。これに脅威を感じたパリ在住の旧スペイン領諸国の知識人が自分たちを米国と区別するために、彼らが世界文明の中心地であると信じていたフランスとの一体感を出すためにラテン系民族であることを示す‘ America Latina ’の呼称を使い始め、これがナポレオン３世下のフランス政府によって多用され、英米でも英訳である‘ Latin America ’を使うようになったのです。他方、南米にはスペイン系ではない、ポルトガルが植民して出来た大国ブラジルがあるところから、フランスはこの地域におきまして大して領土を持っていないこともあって、スペインとポルトガルを包摂するイベリア半島という地理的起源を示す「イベロアメリカ」という名称も用いられるようになります。

ところが、1962年以降、旧イギリス領、オランダ領の国々が独立し、これらは主にカリブ海の国々であるところから、全体として「ラテンアメリカとカリブ海」と表現する傾向が強くなっております。

日本では「中南米」という呼称がよく使われます。日本語としては、「中」をメキシコ、中米諸国、カリブ海地域諸国、「南」を南アメリカ大陸とする限り、地理的表示として優れていると申せましょう。ただ、「中南米」を英語で Central and South America と致しますと問題が起こるのです。英語で申します Central America というのはメキシコ以南の狭い地峡からパナマ地峡に至る細長い中米地峡を指す地理学上の名称であって、メキシコとかカリブ海の諸国は入らないのです。地理学上メキシコは北米に属するのです。まあ、日本語では「中南米」と言うのが便利ですが、外国人と英語などで話す場合には「ラテンアメリカ・アンド・ザ・カリビアン」とすればまず間違いありません。

なお、北米は基本的にゲルマン系のアングロサクソンを中心とするアングロアメリカンでありますが、このアングロアメリカンにとって南に位置する「ラテンアメリカ・アンド・ザ・カリビアン」は自分たちとは可成り異質な、相対的に後進的な地域と伝統的に認識されて来たことも事実であります。

３．中南米の特徴

（１）言語と宗教

一口に中南米と申しましても、それぞれの国でお国ぶりというものがある訳ですが、一つ一つやっている時間がありませんので、共通しているように思われる特徴をごくおおざっぱに、独断と偏見を懼れずに述べてみたいと思います。

中南米で一番広く使われているのはスペイン語で、約３億人以上、つぎにブラジルのポルトガル語で、約１億９千万人。スペイン語、ポルトガル語を話す人々がこの地域の全人口の約９割を占めております。そして、このスペイン語とポルトガル語というのが実によく似ているのでして、通訳なしで大体は通ずるのです。私は1970年代にブラジルに約３年間在勤し、ポルトガル語はある程度話せましたので、1994年にベネズエラに赴任致しました時、最初はポルトガル語で話していました。そうすると、辺りの人たちは「やあ、あなたの言葉は“ポルトニョール”ですね」、つまり、「ポルトガル語風のスペイン語ですね」と、そこは新大陸らしい鷹揚さであまり気にも留める様子もなかったことを記憶致しております。

言語の共通性の他に、宗教の勢力が強いのですが、その宗教とはスペイン。ポルトガル語圏については圧倒的にローマンカトリックです。ですから、国際慣例として、外交団の長は、通例、最古参の大使がなるのですが、カトリック教徒の多い中南米では大体ヴァチカンのローマ教皇使節が着任順とは無関係に外交団長を務め、この人物は当該国のカトリック教会に大きな影響を持ち得るので、接受国政府としても結構気を遣っております。場所によっては、一応カトリックの形を取りながら、奴隷として連れてこられて来た人々が持ちこんだアフリカ起源の土俗信仰が濃厚に入り混じっているところもあります。

（２）個性的

言語、宗教の共通性の他に、この地域の大きな特徴は、個人の多様性とその主張の強さです。これは、聖徳太子の［和をもって貴しとなす」の反対、極端に言えば「千万人といえども我行かん」に通ずるところがあると云えましょう。

（３）肉体労働蔑視

これは西洋人社会全般にも見受けられることですが、労働、ことに肉体的労働を蔑視し、嫌う傾向が特にこの地域に目立ちます。日本人は水田耕作民族で集団的、継続的で勤勉な民族ですが、こういう地道な勤勉さとか努力にあまり価値を認めないのです。機知、弁舌、抜け目のない立ち回りなど、儒教的な倫理からいたしますと少なくとも建前としては卑しまれることが、この地域では結構美徳としてまかり通ります。かってブラジルでは日本人が農業移民として歓迎されたのですが、これも当時のブラジルの支配層がブラジル人一般が大嫌いな農作業を日本人がこつこつ勤勉にやってくれるというので大歓迎したからだともいわれております。

（4）マッチョ

個性の強さとも関係致しますが、中南米というのは、基本的に「男社会」なのです。勿論、男社会の反面として母親を慕う気持ちは強いし、現在中南米で女性の大統領もチリとアルゼンチンに二人いるわけですが、それでも伝統的には男中心の社会です。その「男社会」の中の「男の中の男」がいわゆる「マッチョ」で、男性的魅力に溢れ、女性を魅惑します。信ずるところ、愛のためには一身をなげうって顧みない、言うなれば、かっての東映のヤクザ映画スター高倉健さんの世界です。ですから、政治の世界でもしばしば、マッチョ的な、ある意味では普通の軌道からはずれている、時としてドンキホーテ的人物が伸して来るのです。キューバのカストロ、そのカストロを崇拝するベネズエラのチャベスなど、大義のために命がけで革命をやる、クーデターを起こす、そして超大国米国相手に「帝国主義」と戦う、など大向こうをうならせる役者なのです。

（5）親分・子分関係

中南米ではタテの温情的主人の支配とそれに従属する下層人民との関係が伝統的に濃厚です。これが政治の世界にも投入されます。つまり、なにがしかの恩を着せられた人々は恩を着せた人に対して、機能的な関係を越えて全人格的な服従、忠誠関係にはいることが世間的に期待されるのです。少し、古い映画ですが、シシリー島出身の米国マフィアの世界を描いた「ゴッドファーザー」という映画があります。いまでもまだ結構人気があって、ビデオ屋さんに行けば間違いなく備えてありますから、ぜひ見て下さい。ラテン的な親分子分関係―英語で「パトロネージ」と言いますが―がどんなものか。映像を通じて鮮明に理解出来ることでしょう。

（6）アミーゴの世界

中南米は「アミーゴ」の世界であるとも云えるかもしれません。[アミーゴ] とはスペイン語でもポルトガル語でも [友達] という名刺の男性形です。どんなところでも友達と友達でないものには差がつけられるのが当たり前ですが、これが単にプライベートな領域にとどまらないことが少なくないのがこの地域の特徴と申せましょう。若い時からの友人同士で片や大臣、片や会社の社長ともなれば、アミーゴの世界の法則が働いても少しもおかしくありません。これは一つの文化、伝統であって、外国人があれこれ言っても仕方がないのです。

「アミーゴ」をもっと広く捉えれば、「コネ」の社会と言ってもいいかもしれません。「コネ」とは、一般に英語の connection を短縮したものと考えられていますが、そうではなくフランス語の “Je connais.” (私は知りあいだ) から来ていると主張する人もいます。ヨーロッパなどでは公務員は別として、一定の時期に多くの会社が大学生なり、高校生を競って公募する習慣はあまりありません。大体は人脈を通じての「コネ」就職が多いようです。中南米では会社の規模が個人企業的と申しますか家産的経営のところが割りに多いこともあって、まず「コネ」が必要です。雇う側から見ると、少しくらい頭がよくても、入ってから何をやらかすか分からないような青年を雇うよりも、親兄弟なり係累のはっきりした、悪いことをしそうもない人物を雇うのが普通です。だから「コネ」なのです。

公務員でも、私が在勤しておりました10年前までのベネズエラでは警官採用は「コネ」で行っていました。国で行う統一的な警察官採用試験などは存在いたしませんでした。ですから、警察官と言っても、あまり社会的に信用される度合いは高くなかったように思います。商売をやっているものが泥棒に入ら

れたので、警察にとどけたところ、それでは調べてやると警官の一隊がどやどやっと倉庫に入り、立ち去った後には何も残っていなかったというウソのような話を二重の被害にあった本人から聴いたことがあります。日本の警察もいろいろと批判にさらされているのですが、ここまでひどいことはないのです。世界的にみれば、可成りいい方に属するのではないでしょうか。

（7）国家の経済運営介入

経済運営に国家が介入する度合いが大きく、おおざっぱに言えば、国内で投資に必要な貯蓄を生み出す力がないので、政府なり政府機関が外国からお金を借りて投資する。国が経済の機関車役を務めるところが少なくありません。どうしてこういうことになるかともうしますと、金持ちは自分の国を信用しておりませんので、外国で預金するなり、不動産投資をする。貧乏人は、それこそ「手から口へ」ですから貯蓄余力がありません。仮に、なにがしかの蓄えが出来ても、どうも現世享楽的な傾向がありまして、リオのカーニヴァルのように派手に一晩でお金を使い果たしてしまう。ですから、国内経済の発展を図るための投資のもとに貯蓄が十分に生みだされず、外国からの借金と直接投資に可成り依存する、そしてそこに政府がしばしば介在するのがこの地域の特徴です。

４．ベネズエラという国

ベネズエラはお手元の資料１の地図を見て頂くとすぐお判りになりますように、南米大陸の最北部にありまして、北はカリブ海に面し、西はコロンビア、南はブラジルに接しております。

コロンブスという人はイタリアのジェノヴァで毛織物職人の息子として生まれたことははっきりしていますが、出身に関わるそのほかのことはあまりよく分からないのです。スペイン系のユダヤ人説もかなり有力です。彼が第１回の航海に出た正にその日がスペイン在住のユダヤ人の退去期限日であったため、かなり多くのユダヤ人が第１回の航海に参加したなどとも言われております。彼は、要するに、マルコ・ポーロの「東方見聞録」に描かれた「ジパング」(日本のことです) など東洋の金銀、それに東洋にしかないと思われていた真珠などを略奪する一攫千金の夢で胸を膨らませた略奪者でありました。第３次航海中の1498年８月、オリノコ河の河口を発見した後、現在のベネズエラ東部パリア半島に上陸致しました。豊かな自然と海なのにパリア湾の水が淡水であるところからに豊富な水量が大河から注ぎ込まれるに違いないと確信いたしまして、これが聖書の創世記に出ている四つの河の源であるエデンから流れ出ている河であろうと思いこみます。そこで、中世的迷妄からコロンブスはこれぞ「エデンの地」と思いこみ、この地を「神の恵みの地」と名付けたのであります。尤も、コロンブスは「黄金は最上のすばらしいものです。黄金があればこの世の望みは何でもかない、魂を天国に送ることも出来ます」と書いているくらいで、金のためなら何でもやる、アメリカ大陸の原住民を奴隷化し、この大陸を彼らにとって「神の呪いの地」としてしまったヨーロッパ植民者の最初の人物であります。さて、ベネズエラは、ありあまる鉱物資源―石油、鉄鉱石、ボーキサイト、金―にめぐまれています。それに広大で肥沃な土地と豊富な水。水力発電による電気供給価格はきわめて低廉ですし、国内では使い切れないほどです。

海岸は光り輝くカリブ海に面し、果てしなく続いております。首都カラカスは海抜900メートル、常温摂氏23度でこの上もなく過ごしやすい気候です。私はいろいろな国で生活しましたが、カラカスほど

気候に恵まれた都市はないのではないかと思っております。
　ベネズエラの国土は日本の約2.4倍で、人口は２千７百50万人、一人当たり所得は2007年で７千３百20ドル。中南米の主要国の中でチリの８千３百50ドル、メキシコの８千３百40ドルには及びませんが、アルゼンチンの６千50ドル、ブラジルの５千９百10ドルを上回り、隣国コロンビアの３千２百50ドルの倍以上であります。

　第二次対戦後の石油ブームで急速に発展し、その影響で古くからの植民者の子孫に加え、新たなスペイン、イタリア、ポルトガルなどの欧州白人移民が社会の上層なり中間層にいる国で、白人の比率が22％、他方、大衆は混血（66％）と黒人（10％）であり、先住民は２％に過ぎません。所得の配分が人口比率とは正反対になっているのがこの国の大きな特徴です。

　ベネズエラの確認原油埋蔵量は約７百60億バーレルで世界第６位、可採年数は60年とされております。また、オリノコ河流域には確認埋蔵量1.2兆バーレル、可採埋蔵量１千７百億バーレル（これはサウジアラビアの原油埋蔵量に匹敵する）と言われる超重質油が賦存しており、開発が進んでおり、日本も触媒を使って水に溶かしたオルマリジョンを火力発電用に輸入しております。こんな訳で、ベネズエラは22世紀に入っても石油輸出国として残るであろうといわれております。

　私が成田空港を出て、ニューヨーク経由でカリブ海に面するベネズエラの入り口、マイケッタ空港に降り立ったのは、忘れもしない1994年12月４日の夜11時55分でした。海抜900メートルのカラカスまでは可成り急な坂道を上って行くのですが、車窓から丘陵のあちらこちらに灯が瞬き、美しい眺めでした。車に同乗していた参事官に聞くと、これは「ランチョ」と呼ばれる貧民の小屋で、昼の日の光の下では限りなくみすぼらしいが、そのみすぼらしさが夜の闇に隠れ、おおむね盗電している灯だけが輝くとこうなるのだ、との説明でした。ああ、これは、かって在勤したブラジルのリオ・デ・ジャネイロの「ファベイラ」と同じことか、石油の富に恵まれたベネズエラもブラジルほど、あるいはメキシコほどではないにせよ、貧富の差が激しいのだな、というのが第一印象で、1998年９月30日、第13代目の大使としての任務を終え、現在のチャベス大統領が当選する直前にと同じ空港を去るまでの３年10ヵ月の間、頭の中にこびりついて離れませんでした。

５．台風の目　―チャベス主義―

　現在ベネズエラで10年近く大統領の座にあるウーゴ・チャベス・フリアス（Hugo Chavez Frias）は、急進的な経済社会政策を実施いたしますと共に、米国のブッシュ大統領を「悪魔」と罵り、反米左派外交を展開し、資源ナショナリズムを売り物にして中南米地域の台風の目となっております。

　ベネズエラと言う国は、中南米の国々で60年代、70年代に軍事政権が続出したなかでも民主主義を維持した、いわば民主主義の優等生であったのですが、90年代に入ってさまざまの理由で経済的困難がつづくなかで、これまでの二大政党およびその支持基盤である富裕層、中間層が政治を支配しているだけで、ベネズエラの民主主義というのは単なるオリガキー（寡頭支配）に過ぎない、と言う批判が噴出します。国民の大半を占める大衆層は政治から疎外されて来た。石油収入も富裕層、中間層を潤すだけで、一般大衆―これが混血、黒人、原住民の肌の色と密接な相関関係があるのですが―にはまわってこなかっ

た。こういう風にこれまでの「民主主義体制」なるものを批判し、従来、政治参加や経済的恩恵から阻害されてきた大衆層の経済的権利の拡大を目指す、いわゆる「ボリバール革命」なり「21世紀の社会主義」実現を掲げるのがチャベス主義です。

チャベスさんには1999年でしたか、日本を非公式訪問された折に帝国ホテルで行われたレセプションでお目にかかったことがあります。もと陸軍中佐という職業軍人らしいがっしりした、見るからに頑健そうな体躯を持ち、人懐っこく、気働きのある、人の名前など実によく覚えている、混血系の政治家でした。

このチャベス大統領の与党は、野党が選挙をボイコットしたため、国会で議席の100%を占めているのですが、立法権は議会から大統領に委譲されておりますので、議会は形骸化しております。三権分立はこの国ではもう事実上機能していないということを頭に入れてください。中央銀行と国営ベネズエラ石油に対しても介入し、双方とも完全に大統領の支配下におきました。

経済運営では、すべてにわたって国家管理を拡大させ、資源国有化、電力、通信部門、石炭、製鉄、セメント企業の国有化を実施するか、あるいは少なくとも実施の意図を表明しております。他方、大掛かりな公共事業、低所得層向けの大規模な住宅建設、スラム街などへの医療スタッフ派遣、識字教育、失業対策としての企業に対する解雇禁止措置などをとっています。

こういう社会開発の費用は石油の値段が上がっていたので捻出が可能になっていたのでありまして、識字率の向上などプラスの面も報告されております。しかし、膨大な国家の石油収入を上回る支出を行ってきたため財政赤字で、インフレが続いております。私が在勤しておりました時分に教育大臣と話しをしていたところ、教育省の予算の７割でしたか８割でしたか、圧倒的大部分が大学などの高等教育に割り当てられており、初中等教育に向けられる部分が極めて少ないのに驚いた記憶があります。大臣は「これは伝統なので、なかなか変えられない」と言っていましたが、ベネズエラの教育が長い間大衆無視であったことは明らかでありまして、インフレとはいえ、チャベス主義の下ではこの点が是正されているか少なくとも是正の方向を目指していると言っていいかと存じます。

ただ、問題は、このような社会政策の受益者がチャベス支持者を偏重しており、チャベス個人と受益者間の親分・子分関係ともうしますかパトロネージ関係の道具になっているとか、政策実施の際の非効率、汚職、横領などがベネズエラの常識からしてもひどすぎ、膨大な予算を使っている割には成果が限られているとの批判もあります。

財政赤字、供給サイド軽視の経済政策の結果、中南米主要国では物価の上昇率が５%以下に抑えられているというのに、ベネズエラでは昨年21.6%、今年は１～９月で既に21.8%ですから、一年を通じますと少なくとも23～24%のインフレとなるでしょう。インフレが進行するなかでコスト無視の低価格水準で公定価格が設定されたため、市場からは牛乳、卵、食肉、薬品などが消えてしまいました。キューバに石油を提供し、その見返りにスラム街へキューバ人の医者を派遣するところまでは出来たのですが、薬はただというわけにはいかず、その薬も市場にない有様です。

資本逃避を防止するために外貨管理をやっているため、輸入財に依存するベネズエラの工業はセクターは部品輸入が出来なくなり、生産困難、生産停止に追い込まれています。日本企業の直接投資にかかわる製造業の中には、難しい局面を迎えているところもあるようです。

マスメディアに対する介入も激しく、10テレビ局のうち８局が政府管理下に置かれています。ここで、反政府系テレビ局に対する免許更新拒否に端を発して、学生を中心とする反チャベス運動が盛り上がり、昨年12月の国民投票で事実上の永久政権樹立を目指す憲法改正が失敗に終わる過程を10分間映像でお見せいたします。

６．チャベス主義と南北アメリカ関係

以上、チャベス大統領が国内で行っている政治についてお話したわけですが、外交面におきまして「ボリバール革命」の中南米諸国への拡大を図っております。チャベスさんが信奉する独立の英雄シモン・ボリバールは、19世紀はじめに中南米諸国がスペインから独立した際に、欧米の覇権から新生諸国家が独立を守るためには統合して大きな国家を作るべきであると主張いたしました。この構想は時期尚早で、結局失敗に終わったのですが、チャベス構想はボリバール構想の現代版であります。つまり、圧倒的な影響力を有し、中南米諸国にとってうっとうしい存在である米国の影響力を中南米から排除して、「われらアメリカ諸国のためのボリバール的代替」(略称 ALBA) と名付けた構想の下での中南米諸国の統合を図ろうと言うものです。なにを「代替」するのかと言えば、これまで米国が積極的に推進して来た米州自由貿易地域（NAFTA）に代替するのでしょう。つまり、米国抜きの中南米、カリブ諸国の協力、連帯、補完の原則を基盤とする統合構想なのです。南米銀行を地域銀行として設立したり、新たな動きを見せてもいます。

こんな風に、まず反米なのです。反米のために米国との間にいろいろ問題を抱える対抗勢力と手を組もうといたします。それはロシアであり、中国であり、イランです。ロシアの事実上の国境拡大であるグルジアへの介入について、チャベスは、メドベージェフ大統領に「グルジアでのロシアの行動を全面的に支持する」と述べ、ベネズエラ・ロシア両国はカリブ海での合同軍事演習でも同意いたしました。これは、チャベスにとっては米国に対する示威行為であり、ロシアにとってはグルジア紛争への対ロシア圧力として米国が黒海に艦隊を派遣したことへの意趣返しであったのです。

お手元の資料１の「経済情勢」の右側の「原油」の項目を見ていただきますと、ベネズエラの生命綱とも言うべき原油の対米輸出依存度は2006年で45%となっておりまして、このように大きな対米依存度を軽減するために米国以外の国々、たとえば、中国などへの輸出努力をいたしております。日本にも若干の原油が国有石油公社への大規模融資の見返りとしてベネズエラから最近来るようになりました。中国の石油資源獲得への努力は大変なもので、私の在任中にベネズエラの油田再開発プロジェクトへの国際入札がありましたが、中国は業界常識の数倍―確か３倍と記憶しております―のビッドをして落札し、ベネズエラへの進出を果たしました。少なくとも、短期的な採算は度外視するやり方でした。中国は資源確保の観点から胡主席の最近の中南米訪問などの際に中南米諸国との協力関係を促進しております。ロシアも一生懸命ですが、中国にはかなりの遅れをとっているようです。このほか、米国・EU と対立するイランとは核開発技術協力を行うなど、米国を逆撫でする挙にも出ている訳です。とにかく、米国

とはできるだけ積極的に対立していこうという政策のようにおもわれます。

中南米の国の数は33か国ときわめて多いのですが、GDP の観点からしますとブラジル一国で地域全体の約３割を占めます。これに、アルゼンチン、メキシコ、ベネズエラの三カ国を加えますと全体の約８割を占めることになります。ですから、中南米全体の動向を考えるにあたっては、これら四か国の状況に十分注意を払う必要があります。もちろん、国連総会の投票などの場合のように人口10万の国であろうが13億の国であろうが、一つの国は１票という規則のある場では国の数がものを言うのですが、しかし、実力と言いますか、少なくとも経済的な影響力の観点からすれば中南米の大勢はこれら四ヵ国で決まるのです。

現在チャベスさんの反ブッシュ政策に同調する国々としては、キューバ、ボリビア、ニカラグア、エクアドル、パラグアイなどの国々があります。このなかでキューバ、ボリビア、ニカラグアはベネズエラとともに ALBA 参加国でありまして、米国と距離を置きつつ、相互の関係を強化するとともに中国、イランなどとの関係強化を試みております。このなかで、歴史上初めての先住民出身大統領の下でボリビアは天然資源による収益の国民への還元、貧富の格差の是正、先住民の権利拡大の実現を図っており、チャベス政権の目指す方向ときわめてよく似ております。なお、このような親チャベス主義の国々はベネズエラが石油を割安輸出するとか、あるいは石油マネーを梃子に親チャベス派の大統領候補に肩入れして当選させるとか、石油マネーを通ずる公然たる影響力行使が目立ちます。

他方、対米協調外交を維持する国々としては、米国・カナダと北米自由貿易協定を結んでいるメキシコや米国の支援の下で麻薬掃討作戦をおこなっているコロンビア、米国と自由貿易協定交渉を進めているペルー、米国と既に自由貿易協定を結んでいるチリなどが主だったところです。チャベスさんはこれらの国々に対し激しい批判を繰り返し、反感を買っております。

アルゼンチンのフェルナンデス現政権に対しましては、反米的なポーズを評価し、大統領選挙資金を提供したり、2007年12月当選後に何処も引き受けてのないアルゼンチン国債を年利25%で購入するなどの支援をいたしておりますが、アルゼンチン現政権の基本的体質は現大統領の夫が大統領を勤めていた前政権と同様にペロニスタ的ポピュリズムでありまして、たとえば、女性である現大統領はブランドもので身をかため、一日３時間もお化粧に使うなどと伝えられるなど、とてもチャベスの唱える「21世紀の社会主義」に同調するとは思えません。

残る最大の大国ブラジルの動向ですが、此処も左派政権で、社会政策の実施と非米ラテンアメリカ同盟、つまり、米国の参加を排除した地域統合の促進などではチャベス主義と似ております。しかし、民間企業の活動保障、民主主義的手続きの尊重、そして何よりも米国との話し合い路線と言う点でチャベスと大きく政策をことにしておりまして、いわば、中南米における親チャベス派と反チャベス派諸国の間のバランサーの役割を果たししていると言ってよろしいかと思います。なお、付言すれば、ブラジルは新幹線の建設を計画しており、日本の技術導入が可成りの程度有望視されております。

７．チャベス主義と南北アメリカ関係の展望

さて、それでは今後、チャベス主義と南北アメリカ関係はどのように展開するのであろうかという問題を考えて見ましょう。

まず指摘しなければならないのは、チャベスの影響力には９・11以後、ブッシュ政権の精力がアフガン、イラクでの二つの戦争とイランに集中し、中南米のことにまで手が及ばなかったという、いわば鬼のいぬまの命の洗濯的要因があったということであります。オバマ新政権が公約どうり政権担当後16ヵ月内にイラクから軍を撤退させ、本来のあるべき関心を中南米に向ければ、おのずから、鬼のいぬ間的要因は減るわけで、チャベス主義なり、その支持国に対する締め付けはもうちょっと厳しくなる可能性もありましょう。

つぎに、チャベス主義の展開はこれまで石油収入、なかんずく、石油価格の高騰による財政収入増大を武器にしていたのでありますが、米国発の世界金融危機なり不況の到来により石油価格はいまや１バーレル当たり50ドルを切り、暴落いたしました。11月27日にカラカスの友人から得た情報によればカラカスでの原油相場は44ドルにまで低下したとのことであります。原油相場は不況の深刻化と共にもっと下るでしょう。ベネズエラの国家財政経常収入に占める石油の比率は６割近く、歳入予定は原油価格１バーレルあたり60ドルを想定して組み立てられているのでありますから、このような原油価格暴落はいわば石油モノカルチュア経済とも言うべきベネズエラにとって大打撃でしょう。米国発の金融危機、不景気の影響もあって米国の共和党は大統領職のみならず議会両院における支配権をも失い、ここに明年１月には民主党政権が成立するというチャベスさんの言う「悪魔」とその一党が政権の座を去る情勢が生じたのであります。しかし、皮肉なことに、それは同時に「21世紀の社会主義」実現のための梃子であり武器であった石油価格の暴落と重なり、今後のチャベス主義貫徹にとって不安材料となって来たといえるでありましょう。チャベス主義の同調者であるあるエクアドルも石油輸出国で石油暴落は現政権にとっては大気な打撃であります。ボリビアは鉱物資源輸出依存度が高いのでこれまた、ピンチです。このように、米国が困ると、反米諸国も同じかそれ以上に困るのです。それでは中国やロシアは助けてくれるのかといえば、この不況下で石油と天然ガス、つまりエネルギー資源輸出モノカルチュア国のロシアは財政困難、中国も輸出不振、失業の増加、各地暴動の発生でもうチャベス主義支援どころではなくなるでしょう。

第三に、これはあまり日本の新聞に出ませんでしたが、ブッシュ大統領は2007年３月にブラジル、グアテマラ、メキシコ、コロンビアを歴訪し、ブラジルとメキシコとの間にエタノール戦略に関する覚書を交わしております。要するに、砂糖キビを栽培してエタノールを共同して作り、地球温暖化防止、エネルギー源多角化を図り、世界的普及を共同して行いましょうというものです。ブラジルはこの方面のパイオニアーでありまして1970年代からもうはじめておりました。ガソリンにアルコールを混ぜて燃料とするので、排気ガスを吸うと良い気持ちに酔っ払うなどと、嘘かホントか知りませんが、いわれておりました。ブラジルはもとよりメキシコを含むカリブ海一帯は砂糖キビ生産の適地でありまして、米国が本気でエタノールを輸入すると言うことになれば、砂糖キビ生産は大幅に増加し、生産国の経済に好影響を与えるでありましょうが、それは同時に米国のベネズエラ石油輸入量なりベネズエラ石油への以存度の減少を意味するでありましょう。これはチャベス主義にとっての武器たる石油輸出にとり新たな

マイナス要因となりましょう。なお、日本は既にブラジルから可成りのエタノールを輸入しております。

第四に、オバマ新大統領は米国初めての黒人大統領と言うことで、中南米人の大半を占める混血、黒人、原住民の共感を得ており、しかも彼の掲げてきた「所得再配分」「雇用対策」「医療サービス」などは中南米左翼政権の政治的傾向と軌を一にするものであります。また、ブッシュ政権の特徴でありました一極主義、有志同盟主義が新政権の下で転換され、多数国間協調主義、対話路線を取ることが期待されるのでありますから、チャベス大統領なりその同調者も少なくともしばらくの間は様子見で、いたずらに批判、「口撃」を加えることは避けるのではないかとも思われます。オバマはカストロとの対話に柔軟な態度をを示しているとも伝えられていますし、カストロがどのような反応を示すのか、興味深いところであります。

他方、オバマさん自身中南米には足を踏みいれたことがないと言われているくらいで、この地域に関する政策についてはかなりのところ白紙状態であると思われ、選挙中の発言などを整理いたしましても、メキシコなどからの不法移民への市民権付与を内容とする包括的移民法改正案支持、「公平な貿易」の観点からの若干中南米諸国との自由貿易協定への賛否表明を除きますとまだ良く分からないところが多いのです。12月１日に民主党の大統領候補としてオバマさんと対立関係にあったヒラリー・クリントン上院議員が国務長官に就任することが内定しましたので、彼女―概して言えば、オバマさんよりも外交路線が鷹派的と見られている―の考え方も今後の米国の対チャベス主義外交にかなり影響するであろうと考えられます。

なお、11月23日にベネズエラで行われた統一地方選挙で、22の州知事選挙とカラカス首都区長官のうち17州でチャベス派が勝利いたしました。しかし、有権者の５割近くを占める首都区、ミランダ、スリア、カラボボなどの５州では野党連合が勝利し、チャベス政権にとっては手痛い結果となりました。カラカスの民間調査会社データアナリシスによりますと、チャベス支持率は昨年５月の75.4%から本年９月の58%と大幅に低下いたしております。どうやら風向きが変わってきたようであります。にもかかわらず、チャベスさんは一度失敗に終わった終身大統領制を目指す憲法改選案を再提出するとの発言をしているようであり、今後の動向が注目されます。

しかし、チャベス政権が、いつまで存続するか或いはいつつぶれるかという問題とは別に、中南米一帯に広まった社会正義の実現、貧困、格差の是正とこれまで植民地時代から政治や経済的利益分配の主流から阻害されてきた人々の社会への全面的参加をもたらそうという social inclusion（社会的包摂）への動きは今後とも続いていくでしょうし、それはまた正しい政策方向であろうかと考えます。

参考文献

阿曽村邦昭、「ヴェネズエラと日本」、季刊「海外日系人」、第49号、2001年８月刊、(財）海外日系人協会
ウーゴ・チャベス「ベネズエラ革命―ウーゴ・チャベス演説集」伊高浩昭訳、VIENT、2004年刊
国本伊代・中川文雄編著、「ラテンアメリカ研究への招待」、新評論、1997年刊
遅野井茂雄・宇佐美耕一編「21世紀ラテンアメリカの左派政権」、アジア経済研究所、研究選書、2008年刊
外務省、「外交青書」、平成20年版（第51号)、時事画報社、2008年刊
山田篤美、「黄金郷伝説」、中公新書、2008年刊
ラテンアメリカ時報　各号、(社）ラテンアメリカ協会

追　記

本稿は2008年12月４日にノースアジア大学で行った「政治学」講義の内容である。この後、2009年１月15日、チャベス大統領は大統領の連続再選を無制限に認める憲法修正案を国民投票に問い、賛成54.3%、反対45.6%で勝利を収めた。これにより、これまでの憲法規定では2012年末に終了するはずの任期が、選挙に勝ちさえすれば無制限にのび得ることになり、終身大統領制への道がひらけたと言えよう。チャベスは、既に「次の選挙も、その次の選挙も私は戦う」と公言しており、国論が真二つに割れている中で反対派にチャベスに対抗する人物が今のところいないこともあり、長期政権が続く可能性は可成りあると見られているが、他方、今回の国民投票に際しても反対派の集会、運動の妨害等の不正行為が広汎に存在したことが指摘されており、また、原油価格の続落からする石油収入の半減は年率30%にも達するインフレと相まって、政権の今後に暗影を投げかけていると言えよう。ベネズエラ国民は今回の国民投票を通じ、民主的な制度よりもチャベスという「マッチョ」を選択した訳であるが、これがチャベスの言う「人民の勝利」につながるのかどうか、前途は必ずしも楽観を許さないようである。

（資料１）

最近の中南米情勢

１．政　　治

内政面

1990年代より民主主義・市場経済が定着

多くの国で中南米地域が根源的に抱える問題（貧困、格差）に焦点

近年、特に2006年以降成立した各国政権は問題解決に向け、社会正義の実現を標榜して政策運営

社会正義実現の取組において、各国政権は種々異なる対応

- 現実的、漸進的 社会開発に努める国
- 憲法改正等を通じた急進的な社会改革を追求する国

外交面

●対米関係について政策の違いが顕著に

- 対米協調外交を維持する諸国（メキシコ、チリ、ペルー、コロンビア、中米諸国等）
- 反ブッシュ政権を掲げる諸国（キューバ、ベネズエラ等）

地域大国の動向に変化

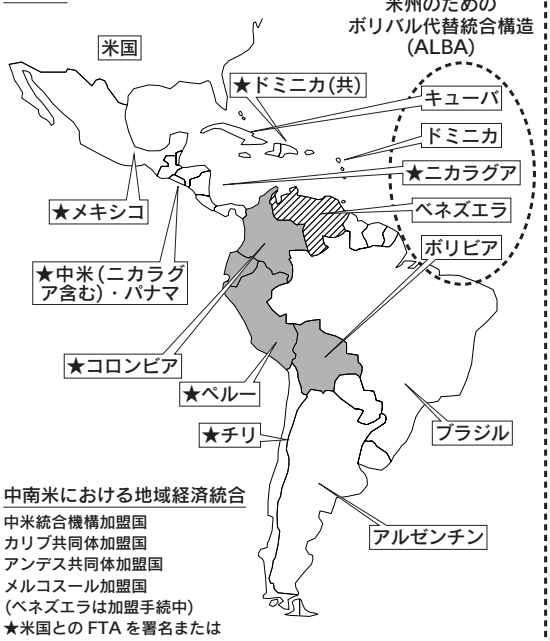
ブラジル＝地域の安定装置としての役割を認識
→途上国中心外交と米国等先進国との協調外交のバランスを指向

●地域統合にも新たな動き（参考１：地域統合の動向）

①統合促進　②対域外国（米国）関係　③域内主導権争い

・南米諸国連合の設立　・南米銀行の設立
・米州ボリバル代替統合構想　・ベネズエラのメルコスール加盟手続、エネルギー統合

参考１：地域統合の動向



２．経済情勢

●プラス成長、為替も安定（07年成長率5.6%）

→メキシコ、チリ、ブラジル等主要国で経済自由化を推進、堅実なマクロ政策を維持（参考２：高い対米依存）

→インフレ率（07年）6.1%
（チリ4.4%、メキシコ3.9%、ブラジル4.2%）

●資源・エネルギー供給地域としての重要性

→**ブラジル**：鉄、石油、パルプ　**チリ**：銅、モリブデン
ペルー：銀、銅、天然ガス　**メキシコ**：銀、鉛、石油
ベネズエラ：石油　**ボリビア**：亜鉛、銀、天然ガス
エクアドル：石油

→バイオ・エタノール、CDM 等新分野でも注目

→但し、一部の国で資源の国家管理強化の動き（ベネズエラ、ボリビア、エクアドル）

→食糧資源の供給地としても重要（ブラジル：大豆、アルゼンチン：大豆、小麦、とうもろこし）

●グローバル経済における生産・輸出基地としての可能性

→域外国も注目し、中南米諸国との FTA、EPA を推進

米国：メキシコ（94年発効・NAFTA）、チリ（04年発効）
ペルー（07年12月米国議会可決済）
コロンビア（07年６月署名）、パナマ（06年12月合意）
中米・ドミニカ(共)(コスタリカを除き発効)

ＥＵ：チリ（03年発効）、メキシコ（05年発効）
アンデス共同体（07年交渉開始）、中米（07年交渉開始）
カリフォーラム（07年交渉妥結）

参考２：高い対米依存

貿易(06年)

―米国の貿易総額に占める対中南米の割合：**約19.3%**
（対 EU 18.9%、対中国 11.9%、対日本 7.2%）

―中南米の貿易総額に占める対米国の割合：**約41.3%**

原油

―原油輸出量に占める対米輸出の占める割合：
メキシコ：80%(07年)、ベネズエラ：45%(06年)
エクアドル：63%(05年)

―米原油輸入に占める対中南米輸入の割合：
34%(06年)

移民(06年)

―米国における中南米出身移民(成人)：
約1,723万人

―在米国中南米出身移民の家族送金額：
約452.7億ドル
（参考：在スペイン・ヒスパニック系移民：180万人、海外送金50億ドル）

（資料２）

主な動き
メキシコ（カルテロン大統領）
・日墨首脳会談（2007年９月）、気候変動問題で日本の提案を評価
・麻生外務大臣の訪問（2007年８月）
・エスビノサ外相訪日（2007年11月）
キューバ（ラウル・カストロ国家評議会議長）
・カストロ前国家評議会議長は、2008年２月辞意を表明、同月実弟のラウル・カストロ第一副議長が新議長に選出された。
・ポスト・カストロ体制を注視
ハイチ（ブレヴァル大統領）
・西半球最貧国（国民１人当たりの GNI 450米ドル）
・ハイチの安定は国際社会の関心事項
・国連 PKO 展開中
・菅義偉総務大臣が総理大臣特使として訪問（2007年８月）
中米
・中米諸国は台湾と国交を有していたが、2007年６月、コスタリカは中国と外交関係を開設
・2007年１月に発足したニカラグア・オルテガ政権は、キューバ、ベネズエラ、イランに接近
ガイアナ（ジャグデオ大統領）
・大統領が2007年６月訪日
・「クールアース50」発表後初となる環境・気候変動共同声明を発表
ペルー（ガルシア大統領）
・2008年 APEC 議長国
・フジモリ問題を乗り越え、関係再活性化へ
・日本企業の鉱山投資への高い関心
ベネズエラ（チャベス大統領）
・反米国ブッシュ政権の姿勢鮮明
・石油等の天然資源の国家管理強化
・石油生産による資金を梃子に中南米地域での影響力拡大をねらう
・憲法改正否決（2007年12月）
ボリビア（モラレス大統領）
・同国初の先住民出身大統領
・「社会正義」実現を重視した政策を実施
・天然資源に対する課税を強化
・大統領が2007年３月訪日
・日本企業による銀・亜鉛鉱山への投資
ブラジル（ルーラ大統領）
・2008年は日伯交流年（移住100周年）
・開発途上国のリーダーを自認
・対先進国外交とのバランスにも留意
・麻生外務大臣の訪問（2007年８月）
チリ（バチェレ大統領）
・大統領が2007年９月訪日
—大統領訪日中の９月３日に FPA 発効
—「クールアース50」を高く評価する環境・気候変動共同声明を発出。
アルゼンチン（フェルナンデス大統領）
・フェルナンデス新政権誕生（2007年12月）
・債務問題が日本との最大の懸案

[論　文]

外来種問題における、外来生物の定義に関する資料的検討

村　中　孝　司

要　　約

外来生物が本来持っている意味と、外来種問題として取り扱われるべき外来生物の範囲の相違が、外来種問題に対する数多くの認識のずれをもたらしている。本論では、外来生物、帰化生物および外来種問題の対象としての外来生物の範囲を明確にするため、既存の科学的知見に基づいた用語および概念の整理を行った。主に1945年以降に出版された資料を検討したところ、それぞれの用語・概念に対して次のように定義されることが望ましいと考えられた。すなわち、「外来生物」とは、渡来年代を問わず国外からもたらされたすべての生物を含むこと、「帰化生物」とは、その「外来生物」のうち、概ね15世紀以降に渡来したことが確実で、かつ野生状態で見いだされる生物であること、「外来種問題の対象となる外来生物」とは、概ね「帰化生物」に近いが、「帰化生物」に加えて国内移動による国内外来種を含むこと、である。外来種問題で取り扱われるべき外来生物の範囲は、「外来生物」の語が持つ本来の意味とは異なっており、使用には注意が必要であることが示唆された。

キーワード：外来生物、帰化生物、外来種問題
Key words：Alien (exotic) species, Naturalized species, Problem of Biological invasion

はじめに

「外来生物」とは過去あるいは現在の自然分布域外に導入された種、亜種、変種などの分類群を指し、生存して繁殖することのできるあらゆる器官、配偶子、種子、卵、無性的繁殖子を含むものをいう。人間によって意識的もしくは無意識的に移入された外来生物が生態系や生物多様性、産業などに被害をもたらす問題を外来種問題と呼んでいる（Mooney & Hobbs 2000 ; 日本生態学会 2002 ; Myers & Bazely 2003ほか)。近年、日本国内においても外来生物の侵入によるさまざまな影響が報告されるとともに防除に関する取り組みも進められるようになってきた（たとえば、宮脇・鷲谷 1996 ; Kadono 2004 ; Ikeda et al. 2004 ; Muranaka & Washitani 2004 ; Yamada & Sugimura 2004 ; 江口ほか 2005 ; 村中ほか 2005 ; Goka et al. 2006 ; 橋本ほか 2007 ; Inoue et al. 2008 ; Muranaka 2009)。

2005年６月、外来生物の侵入による生態系等への被害を防止することを目的とした「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」(略称「外来生物法」、平成16年法律第78号）が施行され、生態系等に著しい被害をもたらすもの、もしくはその可能性の高いものを「特定外来生物」に指定し、輸入や利用を規制することが定められた。2009年１月現在、タイワンザル Macaca cyclopis Swinhoe、アライグマ Procyon Lotor Varius、オオヒキガエル Bufo marinus (L.)、ウシガエル Rana

catesbeiana Shaw、カダヤシ Gambusia affinis affinis (Baird & Girard)、オオクチバス Micropterus salmoides Lacbpkde、セイヨウオオマルハナバチ Bombus terrestris (L.)、アルゼンチンアリ Linepithema humile (Mayr)、オオフサモ Myriophyllum brasiliense Cambess.、オオキンケイギク Coreopsis lanceolata L. などが指定されている（環境省自然環境局の外来生物法 HP 参照：http://www.env.go.jp/nature/intro/；2009年１月21日に確認）。

一方、外来種問題に対する批判的な意見もマスコミを中心に目立つようになってきた。外来生物の中には、さまざまな利用性を持つものがあり、現在でもなお数多くの外来生物が利用されている。外来生物の利用規制は、さまざまな産業を制限するものであるという論理である。たとえば、緑化植物の利用の規制による産業・安全性への影響、園芸植物やペットに対する規制による娯楽の制限、さらに、イネ Oryza sativa L.、コムギ Triticum aestivum L. などの農作物も外来種なのだから、それらを法によって規制するのはおかしい、というのである（たとえば、池田 2006；近藤 2006a, b）。そのような問題のあいだには外来生物の定義および外来種問題として取り扱うべき外来生物の範囲に対して、行政、研究者、あるいは市民（団体）の間での共通の認識が得られていないことが課題として残されていそうである。また、2000年頃以降、公文書等においては社会的背景を考慮し、「帰化生物」から「外来生物」へと用語の置き換えも混乱の原因となっていると推測される。本論では、このような混乱を解消するとともに、今後、外来種問題に対して迅速な管理を進めるために、外来生物およびかつて使用されてきた帰化生物との関係について、用語の使用状況および使用頻度の変遷を調査するとともに最近の知見を交えて再検討し、外来種問題として取り扱う生物の範囲について明確にすることを目的とした。

材料と方法

国内において主に1945年以降に刊行された著書および論文、総説・解説、短報、ノート（これらを総称して雑誌記事と呼ぶこととする）の中から、外来生物および外来種問題に関係する知見のうち、著書および雑誌記事の表題中に外来生物もしくは帰化生物に関する用語が使用されている資料を出版年ごとに抽出した（2008年11月以前）。この際、外来生物およびかつて使用されていた帰化生物の用語を区別した。「外来」の語が使用されている資料については、外来生物、外来種、外来植物、外来雑草、外来樹木、外来動物、外来昆虫、外来魚、外来寄生生物など、「外来」を冠する語のいずれか１つ以上が含まれること、「帰化」についても同様にして、帰化生物、帰化種、帰化植物、帰化雑草、帰化動物、帰化昆虫など、「帰化」を冠する語のいずれか１つ以上が含まれることを条件とした。ただし、雑誌記事のうち、外来生物等に関する特集が組まれ、特集のタイトルとして該当する語が含まれている場合はこれを無視し、各々の雑誌記事のタイトルに使用されている場合のみ該当するものとした。また、著書の一部分や学会発表要旨集については該当しないものとした。

次に、外来生物および帰化生物の定義や概念を取り上げた主要な著書の内容の整理・分析を行った。特に、外来生物もしくは帰化生物の用語と定義に関する事項、さらに、外来種問題の対象として該当する区分や渡来年代に係る概念について重視した。この際、すでに外来生物、帰化生物についての概念に対する説明が検討されてきた維管束植物（以後、植物と呼ぶことにする）を対象とした。

結　　果

外来生物と帰化生物の用語の使用とその変遷

外来生物もしくは帰化生物を取り上げた資料（著書と雑誌記事）のうち、表題中に使用されているものの刊行年ごとの頻度分布を示したのが図１，２である。

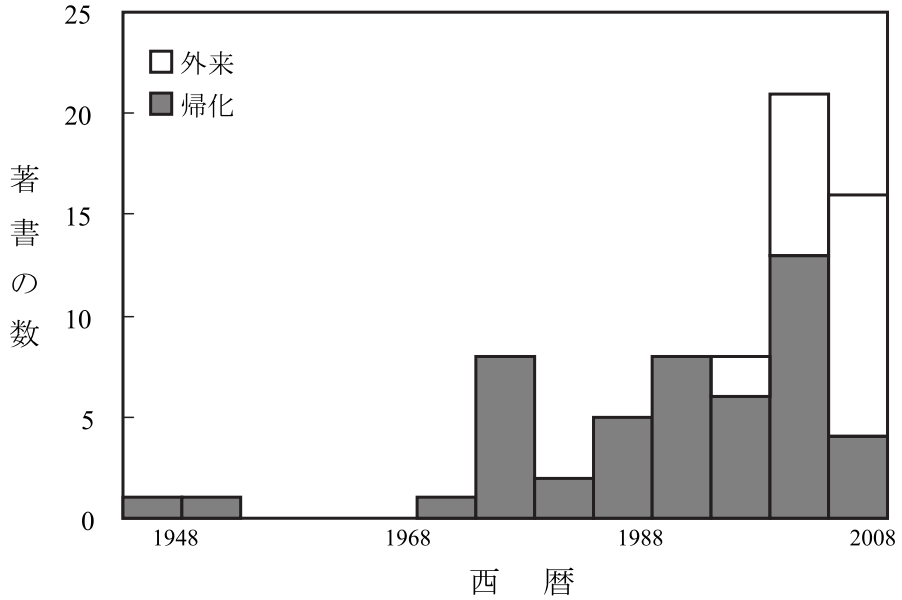


図１．外来生物もしくは帰化生物に関する語を表題に含む著書の頻度分布
５年間を１つの年代に区分し、外来、帰化を区別して示した。ただし、左端のバーは５年間ではなく、1947年以前の合計を示す。

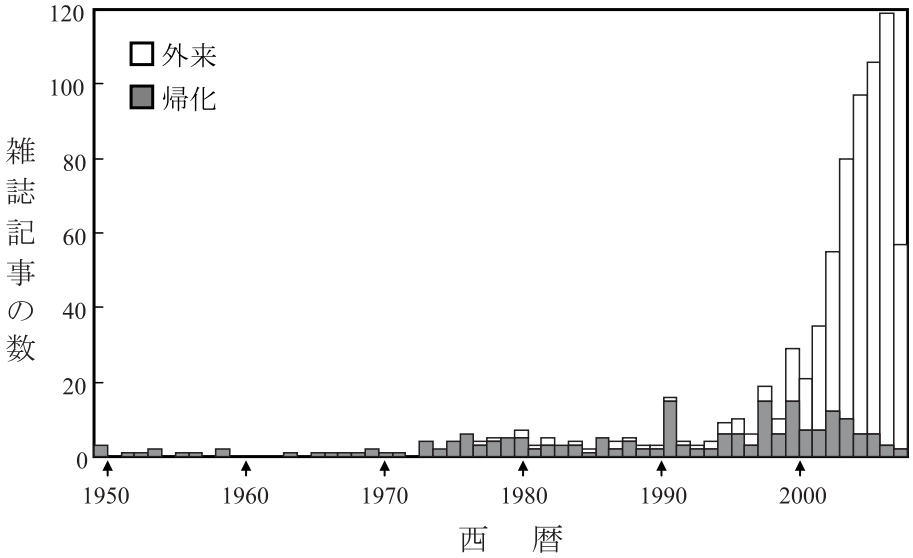


図２．外来生物もしくは帰化生物に関する語を表題に含む雑誌記事の頻度分布
外来、帰化を区別して示した。ただし、左端のバーは1949年以前の合計を示す。

1970年以前に刊行された著書は少なく、平山（1918）の『日本に於ける帰化植物』を最初とし、久内(1950)『帰化植物』、長田（1967）『帰化植物図譜』が代表的なものである。1970年代から1990年代後半にかけては１年間におよそ１～２冊程度の頻度であり、国内最初の帰化植物図鑑である長田（1972，1976）『日本帰化植物図鑑』、『原色日本帰化植物図鑑』が刊行された。また、長田・富士（1977）『帰化植物　雑草の文化史』、浅井（1993）『緑の侵入者たち　帰化植物のはなし』、鷲谷・森本（1993）『エコロジーガイド日本の帰化生物』などの普及書が刊行された。1990年代末から現在にかけては、１年間で約４冊であり、清水ほか（2001）『日本帰化植物写真図鑑』、清水（2003）『日本の帰化植物』、多紀(2008)『日本の外来生物』などの図鑑などに加えて、日本生態学会（2002）『外来種ハンドブック』、佐久間・宮本（2005）『外来水生生物事典』などの外来種問題を取り扱った著書も刊行された。なお、1990年代以前には「帰化」の語が多く使用されていたが、2000年代以降では「外来」の語の使用頻度が増加した（図１）。

1997年以前では、1991年の16件、1996年の10件の例外を除くと、１年間の記事数は10件に満たなかった。その雑誌記事の多くは新しい帰化植物の報告や帰化植物の新産地に関するものであった。1998年以降はいずれの年においても10件以上、特に2006から2007年にはそれぞれの年で100件を超え、外来種問題に関するテーマが数多く含まれていた。なお、2008年の頻度が比較的少ないのは、年内に出版された資料が十分に収集されていないためである。また、2000年までは雑誌記事の半数以上が「帰化」を使用していたが、2001年以降は「外来」の語が多くなり、2005年以降は雑誌記事の表題ほとんどが「外来」を使用していた（図２）。一方、2000年以降においても「帰化」の語が使用されていたのは、主に新しい帰化植物の記録などの新産地に関する報告であった。

外来生物と外来種問題の対象としての外来生物

外来生物・帰化生物に関する定義・概念を文献に基づいて作成した（図３）。なお、ここで参照した資料は、半澤（1910)、平山（1918)、白井（1929)、松崎（1934)、前川（1943)、久内（1950)、長田(1967，1972，1976)、沼田（1975)、長田・富士（1977)、出口（1979)、堀田ほか（1989)、浅井（1993)、鷲谷・森本（1993)、太田（1997)、山口（1997)、五十嵐（2001)、神奈川県植物誌調査会（2001)、川道ほか（2001)、清水ほか（2001)、外来種影響・対策研究会（2001，2003)、日本生態学会（2002)、清水（2003)、千葉県史料研究財団（2003)、佐久間・宮本（2005)、荒木（2006)、亀山ほか（2006)、近田ほか（2006)、根本ほか（2006)、土田・横内（2006)、太刀掛・中村（2007)、多紀（2008）である。

外来生物・帰化生物に関する概念においては、植物を対象とした記事が多く確認された。平山（1918)、久内（1950)、では渡来年代に関する議論があまり行われず、近代化に伴って数多くの帰化植物が渡来したこと、それらは江戸時代末期の開国によって多量にもたらされたことが記述されている。前川(1943）および長田（1976）以降は、渡来年代に基づく区分を行っている。これらの資料によって、外来植物、帰化植物、野生化の状態や渡来年代区分などから、おおよそ２つのパターンに区分された。それは、日本国内の社会的情勢や文献資料を重視するもの（図４；長田 1976；浅井 1993)、および世界全体の社会的情勢を重視するもの（図５；堀田ほか 1989；清水 2003）である。

長田（1976）は「帰化植物とは自然の営力によらず、人為的営力によって、意識的または無意識的に移入された外来植物が野生の状態で見出されるものをいう」と指摘しているように、外来植物と帰化植物の定義と範囲は異なっていた。帰化植物は外来植物のうち、野生状態で見いだされるものである。また、前川（1943）は稲作の伝来と前後して渡来した植物は現在の言う帰化植物とは異なるとして、「史前帰化植物」として区別した。長田（1976）は、その時代と前後して、さらに江戸時代の鎖国時代に至

<table>
<tr><th>日本の時代区分</th><th>日本の主な社会的事象</th><th>世界の主な社会的背景</th><th>平山(1918)
久内(1950)
沼田(1975)</th><th>前川(1943)</th><th>長田(1976)
浅井(1993)</th><th>堀田ほか(1989)</th><th>清水(2003)</th><th>日本生態学会(2002)
外来生物法</th></tr>
<tr><td>～弥生</td><td>稲作の伝来</td><td></td><td rowspan="5"></td><td rowspan="5">史前帰化</td><td rowspan="5">史前帰化
旧帰化(長田)

準史前帰化(浅井)</td><td rowspan="5">史前帰化</td><td>史前帰化</td><td rowspan="6"></td></tr>
<tr><td>飛鳥・奈良・平安～鎌倉・南北朝</td><td>遣隋使，遣唐使
日宋貿易
文永・弘安の役</td><td></td><td>古代帰化</td></tr>
<tr><td>室町・戦国</td><td>1467　応仁の乱
1549　ザビエル来日
1568頃　伊吹山薬草園</td><td>ヨーロッパ人による15世紀の大航海時代</td><td rowspan="2">近世帰化</td></tr>
<tr><td>江戸(初期～後期)</td><td>1641　鎖国
1690　ケンペル来日
1775　チュンベリー来日
1783　天明の大飢饉
1792　ラックスマン来日
1823　シーボルト来日
1853　ペリー来日</td><td rowspan="2">17世紀末～産業革命</td></tr>
<tr><td>江戸(末期)</td><td>1859　開国
1862　シーボルト再来日</td><td>帰化</td><td>帰化</td><td>帰化</td><td>帰化-1</td><td rowspan="3">現代帰化</td></tr>
<tr><td>明治～昭和(戦前)</td><td>1868　明治維新
日清戦争，日露戦争

太平洋戦争</td><td>第二次世界大戦</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">外来</td></tr>
<tr><td>昭和(戦後)・平成</td><td>1945　終戦

2005　外来生物法施行</td><td></td><td>帰化-2</td></tr>
</table>

図３．外来植物・帰化植物に関する主要な文献における帰化植物（外来植物）の渡来年代による区分

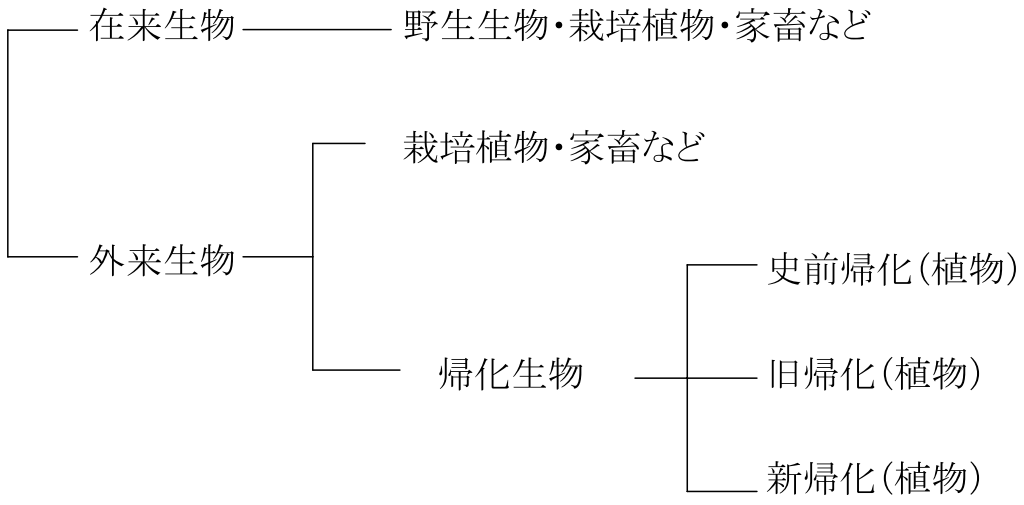


図４．在来生物と帰化生物の区分Ⅰ
長田（1976)、浅井（1993）などに基づく区分を示す。

るまでの時代に渡来した植物を旧帰化植物、江戸時代末期以降に渡来した植物を新帰化植物として区分した（図３，４）。この区分については、（１）鎖国によって一時的に国交が制限されていた江戸時代から、開国によって国外との貿易が急激に盛んになったこと、（２）江戸時代にはすでに貝原益軒（1708）『大和本草』、岩崎灌園（1828）『本草図譜』、飯沼慾齋（1856）『草木図説前編』などによって国内の植物に関する知識は豊富であり、国外から持ち込まれたことが文献から判断できることの２点が根拠となっている。つまり、日本国内に現在見られる植物は、まず、在来植物と外来植物に区分され、外来植物のうち、栽培植物を除くものを帰化植物と呼ぶが、帰化植物は上記の（１）、（２）において渡来年代によって２つないし３つに分けられることを示している。一方、堀田ほか（1989）は、日本国内の社会的背景だけでなく、世界規模の社会情勢にも注目している。それは、農耕の開始、大航海時代、産業革命、第二次世界大戦による影響である。それらに基づき、史前帰化植物、新帰化植物―１、新帰化植物―２の区分を設けた（堀田ほか 1989）。さらに、清水（2003）は史前帰化植物、古代帰化植物、近世帰化植物、現代帰化植物の４区分を提案した（図５）。

外来種問題において取り扱うべき外来植物は、これまで述べてきた外来植物とは内容が異なっており、日本生態学会（2002）では、1868年（明治維新）以降に渡来したものとした。既存の外来種問題に関する資料に基づいて、外来種問題の対象として取り扱う外来植物の条件として、野生状態であることは共通の認識として判断された。ただし、渡来年代にはいくつかの異なる指摘があり、（１）明治維新以降、（２）江戸時代末期以降、（３）大航海時代以降の３つのパターンが識別された（図５）。また、国内移動による国内外来種（日本生態学会2002）や地域性系統（小林・倉本 2006；吉田 2006）以外の生物の導入も同様に含めることが検討されていた。

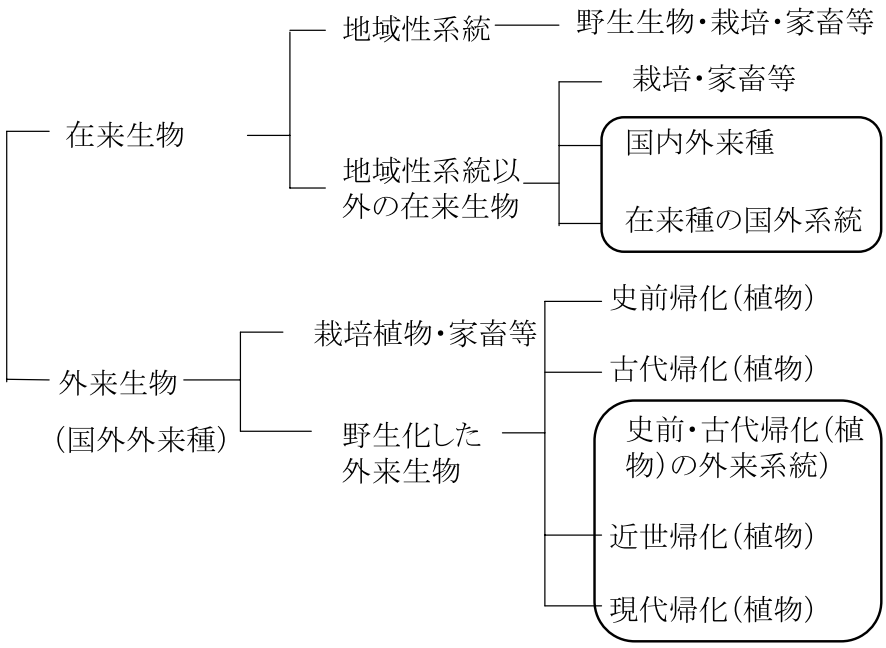


図５．在来生物と帰化生物の区分Ⅱ
堀田ほか（1989）、清水（2003）などに基づく区分を示す。囲いは外来種問題として取り扱う外来植物の範囲（日本生態学会 2002ほか）を示す。

考　察

本研究から、外来生物や外来種問題に対する関心が1990年代後半以降、急速に高まっていることが示された。また、日本国内では、特に外来種問題を扱う場合においては、使い慣れた「帰化」の語から「外来」の語への置き換えが2000年以降に急速に進行していることが確認された。

外来生物の本来の意味は、外国から人為的営力によって意識的または無意識的に移入された生物全体を指すものである。植物を対象として、長田（1976)、堀田ほか（1989)、浅井（1993)、清水（2003）など、数多くの示唆が与えられてきた。長田（1976）ほかの指摘を参照すると、帰化植物とはその中で野生の状態で見出されるものに限定している。特に、長田（1976)、堀田ほか（1989)、清水（2003）などによって、現在では、一般的に「帰化生物」の指す渡来年代の範囲は概ね15世紀以降（もしくは江戸時代末期以降）が妥当であるとされている。それらの植物を、新帰化植物（長田 1976)、もしくは近世帰化植物、現代帰化植物（清水 2003）と呼ぶ。前川（1943）と長田（1976）などの言う史前帰化植物あるいは旧帰化植物は、その渡来そのものが推測に過ぎず、根拠が乏しいためである。また、それと同時に、近代以降の都市化の進行の指標としての帰化植物として、そのような史前帰化植物などはふさわしくないという理由も含まれている。したがって、このような新帰化植物（近世帰化植物、現代帰化植物）を外来種問題の対象とすることは、ほとんど問題はない。しかし、それが「外来植物」に置き換わってきている現在、外来植物の含む本来の範囲の中に、野生状態で見いだされない栽培植物、有史以前もしくは古代に渡来した（と推測される）植物が含まれていることが、数多くの混乱を引き起こしたものと考えられる。これらのことを考慮すると、帰化生物、外来生物とは別に、外来種問題の対象となる生物の範囲を新たに定めることが必要である。

まず、広義の外来生物の中から古代以前に渡来した（と推測される）生物と、野生状態で見いだされない生物を除外すべきである。有史以前に渡来した（と推測される）種で、野生状態で見いだすことのできるもの、たとえばチョウジタデ Ludwigia epilobioides Maxim.やヒデリコ Fimbristylis miliacea (L.) Vahl などの水田雑草はすでに日本の自然の主要な構成要素となっている。野生状態で見いだすことのできない栽培植物や家畜などはそもそも生態系等に被害を及ぼし得ない。これらの種のふるまいについては、外来種問題として取り扱うことは適切ではない。したがって、かつての帰化生物の範囲にほぼ近くなる。ただし、日本および世界の人間や物資の移動の程度（長田 1976 ; 堀田 1989 ; 村中 2008 など）を考慮して、概ね15世紀以降（もしくは江戸時代末期以降）に渡来し、かつ野生状態で見いだされる生物を対象とするのが妥当ではなかろうか。

一方、これまで議論してきた外来生物はすべて国外から持ち込まれた生物を取り扱っている。しかし、国外から持ち込まれた外来生物だけではなく、国内の他の地域から移入された種に対しても外来種問題として取り扱われるほうが適切である(日本生態学会 2002)。国内の他の地域から移入された種であっても、影響としては外来種そのものであり、そのような地域間の移動も重視すべき観点からである。国内の他の地域からもたらされる種（分類群）を国内外来種と呼ぶ。それに対して、国外から持ち込まれたものは国外外来種と呼ぶ。一般的に「外来生物」や「外来種」と呼ぶ場合は、概ね国外外来種を指すと考えて良いだろう。なお、国内外来種の中には、南西諸島などから小笠原諸島に持ち込まれたアカギ Bischofia javanica Blume の事例はよく知られている（e.g. Yamashita & Abe 2002)。また、他の河川由来のメダカ Oryzias latipes (Temminck & Schlegel) やゲンジボタル Luciola cruciata Motschulsky の移設（放流）は、地域系統との交雑を通して遺伝的な撹乱を生じ、生物多様性に深刻な問題を引き起こすため避けるべきである（竹花・酒泉 2002 ; 大場 2006ほか)。地方（都道府県や市

町村、特定の自然保護地域など）の生物相が明らかにされていれば、国内外来種の侵入や影響に対しても把握することができる上に、国外外来種の侵入を含め、地域において侵略性の大きい外来植物の侵入を未然に防止することが可能になるであろう（村中 2009)。また、近年では、太田（1997)、五十嵐(2001)、土田・横内（2006）などによって、地方版帰化植物誌（目録）やそれらの普及書が出版されるようになった。その中には、部分的に国内外来種も含められているのは国内外来種に対する認識の普及・啓発の意味を含めて、今後いっそう必要になってくると推測される。

また、在来種であっても国外から在来種もしくは地域系統とは異なるものが持ち込まれることがある。近年、東アジア原産の緑化植物が全国各地で使用されるようになった。その中に、ヨモギ属 Artemisia、メドハギ属 Lespedeza などの在来種（または史前帰化植物）と同じ種が含まれている（たとえば、大橋・村松 2008)。それらは、国外外来種、国内外来種のどちらでもない。緑化業界ではしばしば「郷土種」として使用されている。しかし、そのような他の地域の系統の移入についても、外来種問題として取り扱うのが望ましい。これらを地域外系統と呼ぶ。近年では、このような問題の高まりによって、たとえば緑化植物などの有用植物の在来種利用に対して、移動可能な範囲スケールにおける検討が進められるようになった（小林・倉本 2006 ; 吉田 2006)。それらが明らかにされれば、外来植物の利用による生態系影響を低減するとともに、国内外来種の侵入による遺伝的多様性の損失をも抑制することが可能になる。

結　論

帰化生物、外来生物、および外来種問題の対象としての外来生物の範囲について、本論に基づいて整理すると表１のようになる。

外来生物法による特定外来生物の指定、全国各地で自然再生事業等において実施されている外来種の防除など、外来種問題に対する取り組みにおける外来生物の範囲と、「外来生物」の語が本来持つ意味との間に大きなずれがあることには常に注意を払わなければならない。外来種問題における外来生物の

表１．外来生物、帰化生物、外来種問題における「外来生物」の定義

用語・概念	定義	備考
外来生物	人間によって国外より意識的もしくは無意識的にもたらされたすべての生物（国外外来種)。	ただし，国土（領土）の範囲は現在の範囲とする。
帰化生物 (新帰化生物)	外来生物のうち，野生状態で見いだされるもの。 ただし，概ね15世紀以降（もしくは江戸時代末期以降）に渡来したことが明かな生物に限る。	野生状態で見いだすことのできない生物に対しては，その対象としない。 古代に渡来した（と推測される）生物に対しては，原則として帰化生物の対象としない。
外来種問題における「外来生物」	帰化生物（国外外来種）に加えて国内移動による国内外来種を含む。 地域性系統以外の在来種を含む。	国内外来種と認められる地理的スケールについては注意が必要である。 現在扱われる外来生物の範囲は，概ねこの範囲にあるものと考えてよい。

範囲に、渡来した時期が著しく古い生物や野生状態で見いだされないものを含むことは妥当ではない。渡来した時期の古い生物は、その渡来したことに対する根拠が乏しいだけでなく、たとえば、農地における水田雑草などのように、その侵入地域の自然の構成要素となっているためである。また、野生状態で見いだされないものは生態系等に被害をもたらすことは勿論あり得ない。これらを外来種問題における外来生物に含めることは、外来種問題の定義に反するからである。

外来生物法における特定外来生物の指定は、外来生物の侵入による生態系等への被害を防止するものであるが、現在の外来生物法の性質上、特定外来生物に指定されたものに対して、一部では利用しつつ野外に逸出したものを防除する方法は困難である。そのため、指定されたものは特別な場合を除いてその利用は制限される。したがって、社会的な背景（特に利用性）などを考慮することが求められることが問題視されている。また、対象となる外来生物の渡来年代が明治維新以降と狭いこと、地域的な蔓延の程度、侵略性の大きさの違いなどは考慮されていない。また、アカギのように国内移動による国内外来種を指定することは現行法では不可能である。外来生物法の見直しにおいてこれらの点を十分に検討するとともに、各々都道府県や市町村による取り組みが併せて必要である。

引用文献

浅井康宏（1993）緑の侵入者たち　帰化植物のはなし．朝日新聞社，東京

荒木徳蔵（2006）宮崎の帰化植物．宮日文化情報センター，宮崎

飯沼慾齋（1856）草木図説前編

五十嵐博（2001）北海道帰化植物便覧2000年版．北海道野生植物研究所，札幌

池田清彦（2006）外来生物事典．東京書籍，東京

岩崎灌園（1829）本草図譜

江口佳澄・佐々木晶子・中坪孝之（2005）河川氾濫原における外来草本アレチハナガサの繁殖とその生態学的影響．保全生態学研究 10 : 119-128

太田久次（1997）改訂三重県帰化植物誌．ムツミ企画，津

大場信義（2006）ゲンジボタルの遺伝的多様性と放虫問題．昆虫と自然 41(13) : 27-32

大橋広好・村松正雄（2008）愛知万博尾張旭駐車場跡地に帰化した中国産メドハギ類．植物研究雑誌 83 : 359-363

長田武正（1967）帰化植物図譜．第一学習社，福岡

長田武正（1972）日本帰化植物図鑑．北隆館，東京

長田武正（1976）原色日本帰化植物図鑑，保育社，大阪

長田武正・富士堯（1977）帰化植物―雑草の文化史．保育社，大阪

貝原益軒（1709）大和本草

外来種影響・対策研究会（2001）河川における外来種対策に向けて[案]．リバーフロント整備センター，東京

外来種影響・対策研究会（2003）河川における外来種対策の考え方とその事例―主な侵略的外来種の影響と対策―．リバーフロント整備センター，東京

神奈川県植物誌調査会（2001）神奈川県植物誌2001．神奈川県植物誌調査会，小田原

亀山章監修・小林達明・倉本宣編（2006）生物多様性緑化ハンドブック．地人書館，東京

川道美枝子・堂本暁子・岩槻邦男（2001）移入・外来・侵入種―生物多様性を脅かすもの．築地書館，東京

小林達明・倉本宣（2006）生物多様性保全に配慮した緑化植物の取り扱い方法―「動かしてはいけない」という声に応えて．（亀山章監修，小林達明・倉本宣編）生物多様性緑化ハンドブック．地人書館，東京，pp13-57

近田文弘・清水建美・浜崎恭美（2006）帰化植物を楽しむ．トンボ出版，東京

近藤三雄（2006a）「外来生物法」負の連鎖への懸念―都市緑化の視点から断固，立ち向う．緑の読本 76 : 67-71

近藤三雄（2006b）「外来生物法」の逆風の中で　芝生の新たな用途と魅力：時流とビジネスチャンス．芝草研究 34 : 107-111

佐久間功・宮本拓海（2005）外来水生生物事典．柏書房，東京

清水建美（2003）日本の帰化植物．平凡社，東京

清水矩宏・森田弘彦・廣田伸七（2001）日本帰化植物写真図鑑．全国農村教育協会，東京

白井光太郎（1929）植物渡来考．岡書院，東京

多紀保彦（2008）日本の外来生物―決定版．自然環境研究センター，東京

太刀掛優・中村慎吾（2007）改訂増補帰化植物便覧．比婆科学教育振興会，広島

竹花佑介・酒泉満（2002）メダカの遺伝的多様性の危機．遺伝 56(6) : 66-71
千葉県史料研究財団（2003）千葉県の自然誌―別編４―千葉県植物誌．千葉県史料研究財団，千葉
土田勝義・横内文人（2006）しなの帰化植物図鑑．信濃毎日新聞社，松本
出口長男（1979）神奈川帰化植物．出口長男
日本生態学会（2002）外来種ハンドブック．地人書館，東京
沼田眞（1975）帰化植物．大日本図書，東京
根本正之・冨永達・森田弘彦・村岡裕由・高柳繁（2006）雑草生態学．朝倉書店，東京
橋本佳延・中村愛貴・武田義明（2007）洪水が都市河川に侵入した外来樹木トウネズミモチ（Ligustrum lucidum Ait.）の分布拡大に与える影響―兵庫県猪名川河川敷における一事例．保全生態学研究 12 : 103-111
半澤洵（1910）雑草学．六盟館，東京
平山常太郎（1918）日本に於ける帰化植物．洛陽堂，東京
久内清孝（1950）帰化植物．井上書店，東京
堀田満・緒方健・新田あや・星川清親・柳宗民・山崎耕宇（1989）世界有用植物事典．平凡社，東京
前川文夫（1943）史前帰化植物について．植物分類・地理 13 : 274-279
松崎直枝（1934）近世渡来園芸植物．誠文堂，東京
宮脇成生・鷲谷いづみ（1996）土壌シードバンクを考慮した個体群動態モデルと侵入植物オオブタクサの駆除効果の予測．保全生態学研究 1 : 25-47
村中孝司（2008）外来植物の侵入年代・原産地とその用途との関連性．保全生態学研究 13 : 89-101
村中孝司（2009）外来植物の用途・生活史・原産地・確認年代からみた地域の定着特性．教養・文化論集（ノースアジア大学総合研究センター教養・文化研究所紀要）4 : 89-99
村中孝司・石井潤・宮脇成生・鷲谷いづみ（2005）特定外来生物に指定すべき外来植物種とその優先度に関する保全生態学的視点からの検討．保全生態学研究 10 : 19-33
山口裕文（1997）雑草の自然史．北海道大学図書刊行会，札幌
吉田寛（2006）在来種の種子を用いた法面緑化工法．（亀山章監修・小林達明・倉本宣編）生物多様性緑化ハンドブック．地人書館，東京，pp155-170
鷲谷いづみ・森本信生（1993）エコロジーガイド日本の帰化生物．保育社，大阪
Goka K, Okabe K, Yoneda M, Niwa S (2006) Bumblebee commercialization will cause world migration of parasitic mites. Molecular Ecology 10 : 2095-2099
Ikeda T, Asano M, Abe G (2004) Present status of invasive alien Raccoon and its impact in Japan. Global Environmental Research 8 : 125-131
Inoue MN, Yokoyama J, Washitani I (2008) Displacement of Japanese native bunblebees by the recently introduced Bombus terrestris (L.) (Hymenoptera : Apidae). Journal of Insect Conservation 12 : 135-146
Kadono Y (2004) Alien aquatic plants naturalized in Japan : History and present status. Global Environmental Research 10 : 163-169
Mooney HA, Hobbs RJ (2000) Invasive species in a Changing World. Island Press, USA.
Muranaka T (2009) The restoration of gravelly floodplain vegetation and endemic plants to riparian habitat in a Japanese river. Landscape and Ecological Engineering 5 : 11-21
Muranaka T, Washitani I (2004) Aggressive invasion of Eragrostis curvula in gravelly floodplains of Japanese rivers : Current status, ecological effects and countermeasures. Global Environmental Research 8 : 155-162
Myers JH, Bazely DR (2003) Ecology and control of introduced plants. Cambridge University Press, Cambridge
Yamada F, Sugimura K (2004) Negative impact of an invasive small Indian Mongoose Herpestes javanicus on native wildlife species and evaluation of a control project in Amami-Ohshima and Okinawa Islands, Japan. Global Environmental Research 8 : 117-124
Yamashita N, Abe T (2002) Size distribution, growth and inter-year variation in sex expression of Bischofia javanica, an invasive tree. Annals of Botany 90 : 599-605

[論　文]

秋田県の過疎農村地域における社会福祉面の相互扶助と住民参加に関する研究（その12）

― 研究のまとめ、高齢者の相互扶助が一層効果を生むと期待できる領域とその限界について ―

高　橋　和　幸

はじめに

現在、過疎農村地域における人口高齢化の局面は、社会問題として大きくクローズアップされているが、いずれも介護の必要な高齢者の増加や医療費の増加につながるといった暗いイメージが先行しがちである。しかし、高齢者を画一的に社会的弱者としてみてはならない。高齢化が進む過疎農村地域ほど、現役で地域の自治会活動に携わっている元気な高齢者は多く、むしろこうした活躍場面での可能性を見出すことができるからである。とりわけ、高齢化が進む過疎農村地域では、生活の不便なところを高齢者同士で助け合ったり、皆と集まる機会が見守りになるといった活動が存在していることを忘れてはならない。本研究はそうした前向きな視点に立って長年に渡って継続する住民の相互扶助実践の福祉的な有用性を検証するものであり、これまで得られた知見をもとに本稿でまとめをおこなうことにする。

Ⅰ　研究の経過

Ⅰ－１．秋田県平鹿町の平地農村の集落を研究対象としてデータの蓄積をおこなった経験から

本研究（その１）[1]では、農村社会学や地域福祉論等の先行研究を参考にして、社会福祉の観点から住民の相互扶助が有する福祉的な有用性を分析すると共に、研究をすすめる上での仮説設定をおこなった。その上で、（その２）[2]では、秋田県平鹿町[3]Ａ集落（69世帯、住民252人）を対象に、住民の間で実践されている様々な相互扶助について調べた結果を提示した。Ａ集落の調査では、16歳以上の住民全員を対象としたアンケートを実施すると共に、高齢者全員及び自治会役員等への聞き取りもおこなった。一連の調査結果の中から、①平地農村のため２ha 以上を所有する農家が17世帯と比較的多く、山間地に比べて耕作地に恵まれ農業生産性が高いこと、②専業・兼業含む農家数は56世帯、非農家数が13世帯という混住化が進んでいること、③地方都市近郊に位置するため兼業就労が比較的容易なこともあり若年人口を中心に恒常的勤務者が多くなっていること、④その結果、普段の自治会活動になかなか参加できにくい実態が浮き彫りにされたこと、⑤1963（昭和38）年に共同機械小屋を建設してりんご共同防除組合を設立したのが発端となって総面積12ha の害虫防除を続けているため、他地域よりも共同作業の機会が多いこと、⑥若年人口が地域外に就労していることもあり専業農家として地域内を仕事場にしている年代は50歳代が中心となっており、その人たちが集落の自治会活動の主力になっていること、⑦自治会の下部組織である班（６～７世帯毎に構成）を五人組と呼び、回覧板等の情報伝達、農村公園の清掃当番をおこなっていることや、自治会の親睦行事の際に班対抗の試合をしていること、⑧高齢者の割合も

徐々に増えつつあるが、そうしたなかでも普段の近所との交流は高齢者が主に担っている傾向にあること等を明らかにした。

（その３）[4]では、集落行事（祭り、神社や会館・公園・道路の清掃）等への参加意識について、Ａ集落で実施したアンケートの調査結果をもとに世代間での比較を試みた。その結果、中高年層では「ほとんど参加する」または「ときどき参加する」と回答した割合が高かったのに対して、16歳から29歳までの若年層では「全く出ない」と回答した割合が高く、若年層ほど相互扶助への関心が低い傾向にあることが示された。また、兼業農家や恒常的勤務者が多い若年層あるいは中年層も含めて、平日に開催されることの多い住民活動や日常的な近隣とのおすそ分けなどの実践については、世帯内の高齢者に任せているといった傾向もみられたこと等を報告した。

（その４）[5]では、Ａ集落に暮らす高齢者世帯（３世帯）への聞き取り結果から、高齢者世帯であっても近隣はじめ集落内の人たちと対等な立場で支え合い、なおかつ集落内に存在する各種の互助組織の一員として役割を果たしているといった生活実態を明らかにした。たとえば、高齢者の一人暮らしや高齢者のみで暮らしている世帯であっても、自家栽培の野菜のおすそ分けをしてもらった際や除雪等に手伝をしてもらった際にはその対価や労働力に見合うだけの謝品や謝金の提供（お礼）をしていること、また、自治会をはじめ様々な互助組織に加入し、会費や各種負担金、祭りの開催費等への金銭的協力、神社や会館・公園・道路の清掃への作業協力をおこなっていること等であった。さらに、事例とした３つの世帯ともにこうした協力関係を通じて近隣や本分家、集落内に住む同級生あるいは、自治会や農事組合をはじめ諸組織とのつながりをもっていることをエコマップに表し、３つの世帯同士の結び付きを示す関連図も作成することで、「集落ぐるみの相互扶助ネットワーク」の中にこれらの世帯が組み込まれている実態を描き出すこともできた。くわえて、労力・金銭ともに平等に負担するといった前提条件があったとしても、高齢者一人の力ではできないことについては減免してもらっているものや、近隣の助力に支えられてその任を全うするものがあること等も確認することができた。また、彼らの互助組織との関わりから、そのような活動に参加した高齢者同士がお互いの健康を気遣うことや、話をすることが楽しみになっているといった副次的に得られる効果があることも把握することができた。

Ⅰ－２．秋田県西仙北町の市街地に位置する町内会と山間にある集落を調査し比較を試みた経験から

（その５）[6]では、住民の相互扶助を活用した要援護世帯への「見守りネットワーク」構築（小地域ネットワーク活動）に先駆的に取り組んだ経験を持つ秋田県西仙北町を研究対象地とした。まず、小地域ネットワーク活動が盛んになった経緯を知るため西仙北町社会福祉協議会で情報収集にあたり、同活動をはじめとする住民福祉活動が活発な地域を紹介してもらうことにした[7]。すると、市街地に近いＳ町内会のことが話題になったため、西仙北町内の農村集落と比較するデータがここから得られると考え先行して調べることにした。同社協によるとＳ町内会は100世帯、高齢化率24.9％（後述調査時点）となっており、規模が大きいため全ての住民から意見を拾い集めることは困難と判断し、同町内会長等への聞き取りを調査の方法として選択した。第１回目の調査（2000（平成12）年３月12日～16日）結果では、同町内会は雄物川の氾濫や大規模火災に見舞われた経験があり、とくに水害時の助け合いについては江戸時代に遡ることができるほど長らく続けられていることが明らかになった。また、水害に悩まされる一方でその対策として堤防の改良工事を建設省に陳情する住民運動を続けていたり、同町内会は国道沿いに街並みを形成していることもあり、その影響で自動車公害（騒音・振動・水跳ねと跳ねた水が家屋を凍結させる被害等）にも見舞われていたこと、そして道路改良工事実現に向けて住民運動を展開した歴史を有していることがわかった。住民のまとまりの源流がそれらの活動にあるのではないかということ

を示唆するデータが集まったが、詳細は次回の調査の課題とした。

（その６）[8]では、2003（平成15）年３月17日から20日までＳ町内会で実施した２回目の聞き取り結果を提示した。水害・道路公害への住民運動を展開した当時の町内会活動とそれらの運動の連動性、そのときどきにどのような町内会長が誕生したか、そして町内会長がどのような呼びかけをすることで住民の共同行動につながったかという観点から調べ、その歴史的背景を明らかにした。また、国道と堤防の改良を求める住民運動が実を結び生活環境改善が進んでからもその結束力が劣えなかった要因についても追求した。その結果、町内会をあげての住民運動として署名活動・陳情活動等[9]を長らく続けきたことによる結束が確認される一方で、それらの完成式典を町内会主催で開催し、その際に「この結束力を今後も生かしていこう」という呼びかけによって結束力が維持される機運が作られたことも把握することができた。

（その７）[10]では、2004（平成16）年３月15日から18日までＳ町内会で実施した３回目の聞き取り結果を提示した。前稿に引き続き住民運動終結後にもその結束力を維持できた要因として「少子高齢化を地域の共通課題に据えることができたからではないか」という点に的を絞って報告した。その調査結果によれば、住民運動当時に活躍した人たちが平成時代に入ると高齢者となって町内会活動の担い手から身を引く時期にきており、今度はこの人たちのかつての活躍を見ていた若者たちが担い手となる時期を迎えていた。そして彼らは「自分たちも（親世代に負けないよう）地域をよくするために何かできないか」という意欲に燃え、その意欲が「消滅してしまった地域の伝統行事を復活させること」に向けられたのであった。とはいえ、祭りのしきたりや用意する道具作りの方法がわからない彼らは高齢者の力を借りることが求められ、またそれを実演する子どもたちの手を借りることも必要となり、こうして三世代交流が自然に活性化していったのであった。また、皆で協力して一つの行事を成功させその喜びを分かち合うことで、次の行事のアイデア（例えば復活させたい伝統行事等）も提案されたり、Ｓ町内会だからこそ実現できる川原や堤防を使った祭りを実施するといった工夫等、住民の発想によって様々な活動が誕生していったことも明らかにされた。こうして子どもから高齢者までが交流する機会の増加を通じて「住民同士の助け合いについて普及啓発が進む」といった発達経過を把握することができた。

（その８）[11]は、2004（平成16）年12月25日に同町内会長へ４回目の聞き取りをし、住民運動展開期に求められるリーダー像と終結後に求められるリーダー像の違いについて聞き取りした結果を提示した。とりわけ、自身が町内会長になる前の町内会事務局長の立場での住民へのかかわり方、町内会長になってからのかかわり方を中心に、回答してもらった結果を分析した。また、住民運動終結後の伝統行事の復活等の際に、準備作業の担い手となる若い人たちの心を動かすため具体的にどのようなかかわり方（発言する際に気をつけていること等）をしているのか、町内会活動を引退している高齢者たちに伝統行事復活のための協力心を引き出すためにどのようなかかわり方をしているかなどを聞き取りした結果についても示した。なお今回の調査では、前述のようなまとめ役として板ばさみになって苦労している部分についても聞き取り結果から明らかにすることができた。

（その９）[12]では、西仙北町の山間にあるＩ集落を調査対象地とし、限界集落となっているものの高齢者同士の相互扶助実践場面が多く、むしろ結束力があるようにみえるのはなぜかその要因を探った。西仙北町社会福祉協議会からの情報によれば同集落は21世帯の小規模な集落であるが、高齢者の自主グループである親幸会[13]の活動が盛んとのことだった。また実際には22人程の高齢者が登録し毎回20人前後が週に１回のグランドゴルフに集まるといった高い参加率を維持していた。Ｉ集落高齢者の結束力の源がこうした生きがい活動の輪によるところが大きいと考え、2005（平成17）年８月23日に集まってくれた同会員17人に対して聞き取りをおこなった。協力してくれた17人の男女比は男性が７人、女性が10人で

あり、一人暮らし高齢者が３人、高齢者のみで暮らしていると回答した人も７人含まれた。また、17人のうち15人までが現在でも農作業をしていると回答し、残る２人は無職等となった。聞き取りの結果をまとめると、ほぼ全員がグランドゴルフに集まることを楽しみしており、また、日頃から近所付き合いを大切にしている人が多いこと、長年同じ土地に住み続けてきた中でお互いの心境を察することができる間柄であることも明らかにされた。そして高齢化を前向きに捉え、高齢者が多くなったからこそ皆で助け合って自治会の様々な共同作業にあたることが大切だという回答が多く見受けられ、共通認識が形成されていること等も明らかにすることができた。

(その10)[14]では、積雪寒冷地の山間にあり、交通の便が悪く、耕作地にも恵まれていない条件が重なる中、Ｉ集落ではどのような助け合いをおこなって生活してきたかについて、2005（平成17）年８月24日に親幸会の会長等へ聞き取りした結果を提示した。その結果、住民の助け合いによっておこなってきた行事や作業のなかでも、消滅したものもあれば受け継がれているものもあることを洗い出すことができた。もちろん継続しているもののほとんどが親幸会のメンバーである高齢者によっておこなわれている実態も把握できた。たとえばグランドゴルフの開催もその典型例であり、活動費の平等負担や遠征費への負担の協力はもとより、集落内の休耕地を借りてグラウンドを整備し、必要時に皆で草刈をおこなうといった助け合いが実践されていた。また、親幸会はかつての農事研究会の改組で生まれているといった経緯も把握することができた。

(その11)[15]では、2006（平成18）年９月11日と12日に渡ってＩ集落に暮らしている一人暮らし高齢者（３世帯）に対して聞き取りをした結果を提示した。調査結果から、集落内に暮らす一人暮らし高齢者が近隣住民とどのような助け合いを実践しているかその詳細を把握したり、集落内に存在する各種の互助組織の一員となってどのような協力をし、また、その組織に所属することによってどのような恩恵を享受しているかを詳細に把握することができた。さらに、こうした助け合い関係を維持していくためにはどのようなことに留意したり工夫したりしているかについても焦点を当て、３世帯に共通する点をいくつか見出すことができた。

Ⅱ　研究のまとめをおこなうための課題設定

上述のとおり、住民の相互扶助実践の活動場面が有する福祉的機能を明らかにすること、その関係維持の方策や住民同士の支え合いの限界について検証し、その複雑な構造を明確化しようと試みた。また、むしろ高齢化がすすむことでこうした住民による相互扶助機能が一層の効果を生む領域の拡大につながるのではないかという可能性についても追求しようと試みた。もろちんそれが、過疎農村地域の特有のものなのか、あるいは秋田県内では市街地も含めてそのような人間関係の形成が育ちやすい環境にあるのか等も視野に入れ、多角的視点から考えを巡らせてみたりもした。

総まとめにあたる本稿では、研究開始当初（その１）に設定した５つの仮説と一連の調査から得られたデータの中から比較検討を試みたいと考えたのだが、焦点が絞り切れなくなる恐れがあったため、実際には前章で紹介した農村集落のＡ集落とＩ集落調査のデータ比較を主にせざるを得なかったことを予めことわっておきたい。

仮説の第１に、図１に示すとおり、農作業の共同作業が消滅して一旦は著しく低下したとみられた相互扶助であるが、若年人口の流出による人口減少や担い手の高齢化に伴い、自治機能維持のために高齢者を中心として新たな助け合いが生まれ、再び結束力が上昇に転じていくのではないか。

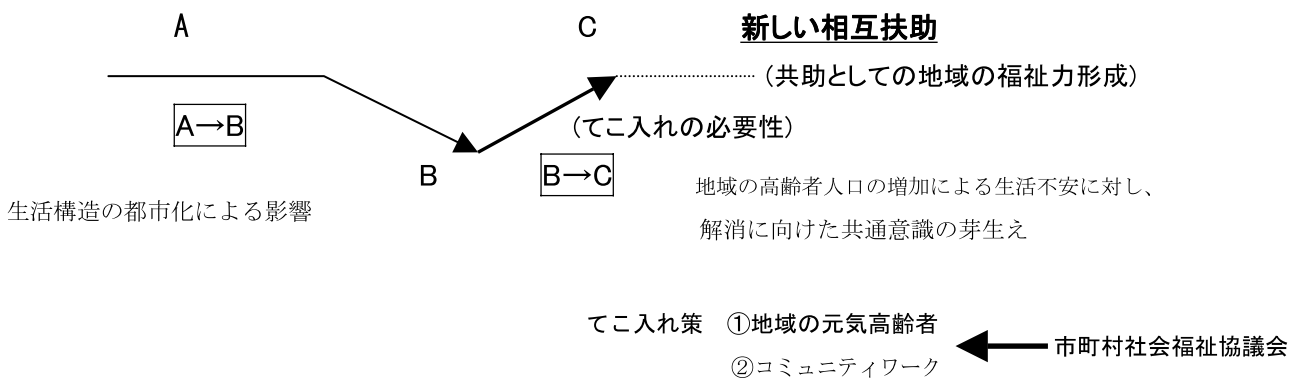


図１　人口高齢化による「新しい相互扶助」(共助としての地域の福祉力形成)

仮説の第２に、だとすれば、高齢者が集まって活動する場面が多くなること自体が持つ福祉的な有用性が指摘できるのではないか。

仮説の第３に、秋田県の過疎農村地域においては、こうした住民の相互扶助による実践が地域の福祉活動への最も自然な参加方法なのではないか。

仮説の第４に、農村でもプライバシーに配慮し他家の生活事情に深く立ち入らないという意識が浸透したため、かつての運命共同体のような関係と、自治機能維持のためにまとまる現在の相互扶助の性質は異なってきている。そのため、高齢者が集まって共同解決できる活動領域について明らかにしたい。

また、高齢者世帯が互助組織の中でどのような役割を果たしているのか実態を詳細に把握することにより、相互扶助の成り立ちについて解明をすすめたい。

仮説の第５に、相互扶助意識の機運の高まりに欠かせない危機意識の共有と、そうした状態に置かれた場合にどのような住民リーダーが誕生しているか、そのリーダーシップの発揮の仕方についても検証することにしたい。

Ⅲ　仮説の１点目の検証について

本研究によって得られた知見をもとに、仮説の検証を試みたい。まず仮説の１点目についてである。

若年人口の流出による人口高齢化によって、むしろ高齢者同士の助け合いが活性化するのではないかという点については、自治会活動をする人たちも高齢化しているという危機意識が働いている限界集落のＩ集落でしかその傾向を明らかにすることができなかった。また、その意識共有に欠かせないのが、週に１回グランドゴルフに集まる機会を通じて自治会としてやらなければならない各種の作業の進め方について話し合われ、合意の上で動くという体制が構築されていることであった。リーダーが一方的に問題を指摘したり、こんなふうにしなければならないという呼びかけをして集まってもらうのではなく、グランドゴルフに集まった際に皆で話し合って決め、「自分もその場で賛成したからには協力しよう」という雰囲気づくりがおこなわれていたのである。もちろんこうした仲間意識は一朝一夕に形成されたわけではなく、農事研究会活動を通じて若い頃から親しく交友を続けてきたという基礎があることを忘れてはならないし、これ以外にもいろいろな要因が複雑に絡んでいたのだが、まずは主な要因に的を絞り、その他については後述することにする。

ところで、本研究の取りかかりとなったＡ集落の場合、上述のＩ集落とも共通しているのは田植えや稲刈り等を中心に農業生産の機械化が進んでいなかった頃に労働力の交換をおこなった助け合い経験が

あること、そして、現在ではそうした助け合いが殆ど見られなくなったものの高齢者の間に共通する記憶になっているということであった。また、両集落ともに入会地や集会所、神社、ゴミ集積場、公園・広場などの管理作業、季節ごとの行事を開催するときに費用を出し合ったり、作業当番に協力したり、回覧板を回すついでに悪質商法に遭っていないかなどの防犯の声がけや健康状態を気遣うような見守り、収穫した農作物のおすそ分け、留守にする際に近所に頼むといった助け合いが続けられていた。このように、住民の相互扶助でおこなわれてきた各種の行事やしきたりのうち、とりわけ農業生産に関するものの減少が進む一方で、自治会活動として欠かせないものや親睦といったものは残っていたり、あるいは生きがい活動のようなものはその機会を増やすといった関係が生まれていたのである。こうした側面から捉えれば、福祉的な有用性を帯びた相互扶助実践の割合が高くなっているとも指摘できるのではないか。

たとえば、岡村重夫は著書『社会福祉原論』において「同じ地域に生活する者、同じ職業に従事する者、また共通の信仰をもつ者の間においては、自然に仲間意識・問題意識が成立し、他人の苦痛が同時に自分の苦痛と感じられるようになり、特別な理屈を必要とせずに助け合う」[16]という趣旨の指摘をしている。それに加え、「援助を受ける者と与えられる者との間にある連帯意識に基づく援助であるために上下支配の関係による保護や援助のような屈辱的な心情を伴わない」という点についても指摘し、評価しているが、まさに調査結果と重なっている面が多いように見て取れる。また、松岡昌則は「生活互助の地縁に即した関係の比重が増大している」[17]と指摘しており、本研究結果においてもやはりその傾向が示されたといえる。

Ⅳ　仮説の２点目の検証について

仮説の第１点目の検証部分でもふれたが、高齢者が集まって活動する場面が多くなること自体が福祉的な有用性を持つものではないかという観点から掘り下げてみたい。人口高齢化が進むと高齢者世帯も多くなり、とりわけ一人暮らし高齢者が地域の人々と接点をもつ機会が「安否確認」としての機能を有することになるのは言うまでもない。Ｉ集落においても欠席した人を気遣う関係が見受けられたからである。また、現役で自治会活動の担い手として活動し続けることは生きがいへとつながっており、こうした活動に参加することを通じて他者とのつながりの中から自己の存在価値を見出したり、一つの目的を皆で達成した満足感や一員としての責務を果たした充実感が得られているとも指摘できる。高齢者だけが集まってもこれだけの作業（会館の雪囲いやグラウンド除草等）ができるといった達成感を、作業終了後の慰労のお茶会を通じて感じていたりもするからである。一人でも多くの人に集まってもらったほうが共同作業で分担し負担する仕事量が少なくなるので参加は歓迎されるし、また、活動経費に協力してくれる人が一人でも多くなれば、やはり全体として個々の負担も軽減される。このように、Ｉ集落に暮らす高齢者一人ひとりがお互いに大事に思われ、そこから得られる精神的な安らぎが存在することも指摘できる。

ところで、Ａ集落の場合は限界集落とまではいっていないため、高齢者が集まって活動する場面は主に老人クラブ活動になっていたが、単に生きがいづくりのために団体行動をとるだけでなく、その行為は農村集落特有のしがらみを打破するためにも有効に使われていることがわかった。というのは、「高齢者が単独行動で遊びに出かけるのは若い人たちに気が引ける、皆で出掛けるのだから気兼ねすることがなくて良い」という言葉の裏にある思いからそれを察することができるためである。また余談になるが、Ａ集落では、老人クラブに対して自治会が補助金を提供したり、敬老会を開催しているため、この

お礼と称して、老人クラブが集落の農村公園の清掃ボランティアをするといった団体同士の助け合い実践も見受けられた。

以上のとおり、Ｉ集落とＡ集落の高齢者の相互扶助実践に若干の違いはみられるものの、集まって活動することを通じて得られる福祉的な効果が双方より指摘できるのである。

Ｖ　仮説の３点目の検証について

秋田県の過疎農村地域においては、こうした住民の相互扶助による実践が住民福祉活動（地域福祉活動）への最も自然な参加方法なのではないかという観点から掘り下げてみたい。

Ｖ－１．住民相互扶助の担い手としての高齢者の存在

Ｉ集落ではグランドゴルフ仲間の結束を自治会活動場面に生かしていることから、住民の相互扶助による実践が地域の福祉活動への最も自然な参加方法なのではないかという考えを支持するデータが得られたといえる。Ａ集落の場合はどうかというと、少し趣が異なる。まず、16歳～29歳までの若年層で、自治会活動への参加意識は総じて低い傾向が示され、集落の行事やイベントに自分の子どもが参加するような年齢になる30歳代を境目に急速にこうした活動に関心を持ち始める傾向が見受けられた。この傾向は高橋勇悦の「近隣ネットワークは、子どもたちを中心に構築され、また、居住移動が少なく定着的に生活している場合に活発に形成される」[18]という指摘に類似していた。またＡ集落の場合は、若い人たちが働きに出ている間に集落内で起きているニュースや生活に欠かせない情報の交換をしながら近隣や本分家関係等と親しく付き合いをしている高齢者が多く、こうした付き合いは一家の高齢者に任せているといった様子も調査結果から映し出された。くわえて、全ての活動ではないが平日日中の相互扶助の活動には一家を代表して高齢者に参加してもらっている側面も見受けられることから、集落ぐるみの相互扶助の一翼を担っている実態も確認されており、見逃すことができない。

Ｖ－２．高齢者世帯の生活実態から見えてきた住民活動への参加実態

本研究では、とりわけＡ集落に暮らす高齢者世帯の３つを事例に、近隣住民との日常的な相互扶助実践、そして集落に存在する各種互助組織の一員に加わり一定の役割を果たしながらも、そこから恩恵を享受している生活実態の解明にも力を注いだ。その結果は以下のとおりとなった。第１に、自治会との関係では、自治会行事や各種の共同作業への参加、自治会費や行事開催費の負担への協力等、世帯人数に関係なく一世帯分の協力をしていた。第２に、自治会の下部組織としての班（Ａ集落では五人組と呼ぶ）の活動に対しては、回覧板の取りまとめ役である班長等の順が回ってくれば引き受けるなどの協力姿勢が確認された。第３に、老人クラブとの関係では、年１回の旅行や各種のゲートボール大会に団体で出場する際にこれに加わったり、活動費への協力にも応じていた。自治会では敬老会を開催し老人クラブの会員を招待しており、そのお礼と称して老人クラブでは集落内の農村公園の清掃奉仕作業をおこなっており、こうした活動へ参加も見受けられた。第４に、りんご共同防除組合・農事組合との関係では、りんご畑や農地があれば一人暮らし高齢者でもそれらの団体に加入し、一世帯分の負担金や各種共同作業への協力が求められるのでその役割も果たしていた。また、自治会活動とは違いこのような生産に関わる団体活動では、重労働の共同作業に参加できないときには手間賃を負担していた。第５に、婦人会との関係では、同会も会員の高齢化が進んでいるため、老人クラブの加入者がそのまま婦人会に残って活動してもらっている実態にもあった。また、婦人会も自治会の諸行事の手伝いを依頼される団体で

あるため、その一員として同会を支える女性高齢者の役割は大きいわけで、高齢者世帯の人とは言えこうした活動を通して集落に貢献している人もいることがわかった。第６に、神社の氏子会との関係では、基本的には各世帯が平等に負担すべき拠出金への協力は当然おこなわれており、たとえば、神社の改築整備費用のように多額である場合には、それを年賦で払っていくように工夫されていた。なお、多額の費用を負担しなければならない場合には、一人暮らし高齢者などは減免の対象になるといったように各々の家庭事情も勘案して負担割合を変えている助け合いもみられた。

以上のとおり、清掃はじめ各種共同作業や回覧板、神社の祭りの当番等、一人暮らしや高齢者のみで生活をしているといえども一世帯に求められる負担や役割を担っている姿が確認できた。また、高齢者だけで暮らしている大変な状態であることを察して当番の際に近隣世帯が手伝うといったことも含めて、地域ぐるみの助け合いが成立していることもわかった。相互扶助の活動を通じた住民参加の形態の有用性は、このように互助組織のネットワークに高齢者世帯が組み込まれ、最も自然な流れで地域福祉活動に参加している実態を浮き彫りにすることで指摘することが可能となる。また、高齢者世帯も互助組織を通して集落内の多くの世帯と接点をもっていて、それらが連鎖する構図を実際に描くと、一層こうした活動による住民参加の有用性が浮き彫りになるともいえる。

Ⅵ　仮説の４点目の検証について

住民活動の場面への参加が面倒だと感じたり、参加することへの義務感が生まれないようにするためにはどうしたらよいのか、相互扶助の表裏一体性的な性格と前向きに参加する意欲形成につながる要因を、実態からみていくことにしたい。

さらに、高齢者世帯の増加に伴い労力や金銭の提供について過剰な負担を求める相互扶助は長続きできないと考えられることから、良好な人間関係を維持するためにどのような規範（モラル）が形成されているのか、その観点についても明らかにしたい。

Ⅵ－１．平等意識に配慮する

農村集落には隣組などにみられる平等観を主徴とする地縁と、主家によって統制された序列関係（本分家関係）の血族同族関係といった社会関係がある。地縁には講と呼ばれる相互扶助が含まれ、血族には、いわゆる親戚関係が含まれることは周知の通りである。兼業就労が進んだり若年層を中心に恒常的勤務者なって集落に暮らしているといった混住化が発生すると、各世帯の農外収入も増えていき、耕作面積が大きいからといって収入が多いとは限らなくなる。こうなると、住民活動の際に家柄を重んじたり収入の多い世帯ほどその協力の度合いも増えるといった序列関係はなくなり、平等に負担すると共に対等な立場で参加し活動する機運が高まる。たとえば、Ａ集落のアンケート結果からもその傾向が確認されている。本分家との互助に対する意識を尋ねた回答結果でも、「時代が変わって迷惑をかけたくない」という回答が多くを占め、依存や期待が総じて低い傾向が示されたからである。一方で、近所との互助では、「話し相手になってもらいたい」など、大きく依存するわけではないが、内面に立ち入らない親密さを保ちながら対等な立場で支え合いたいという期待感が高まっている様子も見て取れる。

ちなみに本研究（その９）でも紹介したとおり、Ｉ集落の調査結果においても、昔の本分家関係と現代の本分家関係について意識が変化していることが確認されている。かつてのような堅苦しい相互扶助ではなく、あくまで「近所の人たちとの付き合いと同じように親しく会話を交わしたい」という回答が多かったからである。たとえば、高齢者世帯であれば見守りや声がけだったり、あるいは野菜のおすそ

分けで融通し合うといった回答をした人が多くを占めたのはその現われともいえる。いずれにしてもＡ集落、Ｉ集落とも平等意識によるつながりを重視する傾向が示されたといえる。

Ⅵ－２．表裏一体性と助け合う領域の線引き

米山俊直は「農村共同体の窮屈さとは、狭い地域につくられる人間関係が、感情的な対立を生み、それが重なり合って蓄積され、さらに長い時間をかけて続き、ついには世代を超えて継承される。というような伝統の束縛である」[19]と指摘している。Ａ集落・Ｉ集落の調査結果においても、同様の傾向が示されている。たとえば、Ａ集落の単純集計の結果であるが「地域の相互扶助活動にしがらみや煩わしさを感じることがあるか」という質問に対して、頻度の差こそあれ、「しがらみに感じていることがある」という回答が約６割に達していたからである。また、Ａ集落の高齢者層の間でも、前述のとおり外出行動への監視を気にしたり「働きもせず遊んでいる」との非難の対象になることへの懸念を抱き、それらの批判的な目をかわすために集団行動をとるといった一面もみられた。

だとすれば、監視・しがらみを感じないような見守りを心掛けると共に、住民同士の助け合いによって解決できる領域と踏み越えてはならない領域との間に線引きをすることで保たれるバランスがあることがわかる。たとえば、Ｉ集落の調査結果では、助け合いの優先順位が存在し、その規範をないがしろにすることの危険性について警鐘を鳴らす意見もみられた。それは、除雪作業等で困っている高齢者宅を近所や集落の人たちがボランティアで助けてしまうと血縁の関係者もそれに依存し甘えてしまうといった内容を示すものであった。

また、良好な人間関係を長続きさせるためには、一方が気疲れするような長期間にわたる助力の提供は望ましくないこと、繰り返しになるが住民同士の助け合いによって解決できる領域には限界があること、一人暮らし高齢者であっても助けてもらったら相応の謝礼をして対等な立場でかかわる姿勢が貫かれていることもわかった。本人が謝礼しない場合でも家族が帰省したときにお礼しているケースや、先祖の代に助けられたので一人暮らしになった高齢者にその時代の恩返しをする形で返しているケースも一部にみられたが、いずれにしても一方的に助力を受けることはしてはならないことをＡ集落・Ｉ集落とも共通の規範（モラル）としていることが確認された。

Ⅵ－３．同じ土地に住み続けてきた中で育んだ人間関係を大切にすること

農村部に暮らす60歳代の人たちは現役で農業に従事している人も多いため、70歳代に入ってようやく体力の衰えを受け入れ農作業を控えて生きがいづくりに活力を見出すようになるのではないか。そのように考えると、Ａ集落のゲートボール仲間、Ｉ集落のＳ会ともに70歳代が多くを占める実態に説明がつきやすい。また、このように同じ時代を生きた人たちの価値観は似ているといわれるように、話しやすさや集まりやすさが生まれるものと考えられる。だとすると、集落戸数が多くても夜勤の人、日曜出勤の人など生活時間がばらばらで住民が揃いにくいといった環境のもとでの住民活動をするよりも、むしろＩ集落のように高齢化率が高くても気の合う人同士集まりやすいという環境は、効率性が指摘できるわけである。

上記に加えて、Ｉ集落ではよく集まる場所の一つである集落会館を、自分たちの手でほとんど建設したという経験も同じ時代を生きた人たちの共通の価値観に影響を与えていた。その建物がシンボル的な存在になっていたからである。というのも、会館建設に当たっては、入会地の売却と各世帯からの建設費の拠出のほか、地元の小学校の改築工事で出た廃材を利用して安く造るため、住民が総出で運搬にあたった経験があった。もろちんその後の修繕や維持管理にも協力し合っているという現状にあった。会

館建設に象徴されるようにＩ集落のような21世帯という小規模集落で自治機能を維持するためには、男女問わずに集まって協力することが求められる。当然の事ながら一人暮らし高齢者でも支え手の一人として貴重な戦力になるのである。こうした現状から、集まる人が高齢者で作業が大変だからこそ、普段は週に１回グランドゴルフに集まって楽しみを持とうという機運が高まる実態もわかった。

Ⅶ　仮説の５点目の検証について

それでは、こうした結束力を維持するためにどのようなリーダーが誕生し、どのようにメンバーへかかわりをもっているのか、あるいは活動上の規範（モラル）はどのようなものが存在するのかについてみていきたい。

Ⅶ－１．人口高齢化による危機感の共有を前向きに活用するために

前述の通りＩ集落の高齢者の間で危機意識が共有できた背景にある住民リーダーのかかわりについて取り上げてみたい。

人口高齢化について危機意識を共有することをむしろ前向きに捉えることができた背景については、70歳を越えた高齢者の集団活動にならざるを得ない現状から「お互いに無理は禁物」の声がけが欠かせないこと、また、「自分も体調不良だったり、用事があったりして参加できないときがあるかも知れないし、そうなれば助けてもらう側になるかも知れない」という危機意識の共有がみられた。その上で、参加しなかった人を批判しないことや、来てくれたときには賛辞を送り、皆で仕事をやり遂げたときには成果を称え合うといった規範（モラル）も存在していることがわかった。こうして、人口高齢化の深刻な状態だからこそ、皆で集まる機会には会話して楽しみそれ自体が生きがいになるようにと前向きに考えられるようになり、グランドゴルフで使用するグラウンドの除草作業といった共同での作業は、まさにその典型例となっていた。「高齢者ばかりだから」と最初から諦めムードになってしまったら何も行動する意欲がなくなるし、欠席者への批判があったりすれば参加への義務感や負担がのしかかり人間関係の悪化につながりかねず活動は萎縮してしまう。むしろ若い人たちがいないといえるほど高齢化が進んでいるからこそ高齢者が気軽に集まってグランドゴルフができるし、しかもその結束力を生かして自治会活動にもいそしむことができて楽しいしという関係が築けるのである。お互いの家を訪問するときに若い人たちにも気遣いをしなくて済むのだ、と現状を前向きに捉えているようにさえ見受けられるのであった。

実は、人口高齢化によって各種の役員のなり手不足に陥る「人材不足」に悩むことも危機感の共有に含まれていた。また、除雪の生活問題を抱えた世帯が多くなっているものの、他家の手伝いに行きたいが行けないような状態に置かれている場合に、隣人の心の痛みを我がことのようにさえ感じるような悩みの共有もみられた。だからこそ、やれる範囲で助け合おう、皆でレクリエーションをして楽しむ機会には積極的に協力しようという機運が高まりやすくなるものとも考えられる。また、このような機運を作るためには、リーダーのかかわりが欠かせないため次で記述したい。

Ⅶ－２．住民リーダーの声がけに特徴がみられること

グループ活動の結束力が強まりその活動が継続する過程には、共通の課題に皆で取り組めるよう、またその取り組みをしたときに達成感が得られるように、誘導するリーダーの存在が欠かせない。本研究で事例にしたＡ集落の高齢者のゲートボール仲間、Ｉ集落のＳ会の活動、そして（その５～その８）で

取り上げたＳ町内会活動とも、そのような雰囲気づくりに努めるリーダーの存在が確認された。

たとえば参与観察を通じて、皆で集まって除草などの作業をし終えた際、リーダーが「皆の力でこれだけのことができた」というように肯定的な評価をすることにより、協力した人たちにも満足感や「高齢者の力でも結集すればすごい」というような自信が生まれていることが見受けられたからである。また、そうなると次の機会も協力したいという意欲も高まるし、「こんなふうにやればいいのではないか」という前向きな提案も出やすくなる。もちろん提案者は積極的な協力者となるし、またその人の活躍を皆の前で称えることができれば益々協力したくなるといった相乗効果も生まれやすい。メンバーのやる気を育て、こうした良好な仲間意識を形成するかかわり方こそ、高齢化の進む過疎農村地域で住民活動を展開する場面に求められる「リーダーの模範的かかわり方」だと指摘することができる。

考　察

第１に、近隣住民との助け合いや集落ぐるみの助け合い活動である相互扶助実践に加わることが高齢者にとって生きがいづくりになることについてである。過疎農村地域の多くは、買い物や通院にも難儀をするような交通の便が悪い地域が多い。とはいえ、一人暮らし高齢者になったとしても自分の食べる野菜を自分で作るといったように持続的に営まれる農村の生業を生きがいにできる環境や、災害を避け豊作を祈り自然と共生するために生み出された習俗文化があり、一人暮らし高齢者も含め、高齢者が手を携えそれらの活動を守っていくような機会の創出もみられる。そこに暮らし続ける利点や享受できる恩恵も少なくないのである。また、様々な共同作業場面でもお互いの健康を気遣うような会話を弾ませ、欠席したときには帰りに立ち寄ってみるといったように心を通わせている生活実態もあり、相互扶助実践から精神的な満足感を得ているものと考えられる。

第２に、相互扶助が持続可能となっている根本には、対等な立場で参加し協力するといった関係が存在することについてである。たとえ一人暮らし高齢者であっても回覧板や広報、ごみの集積場の清掃当番など生活していく中で共同作業や役割分担に協力していること、活動経費への負担にも応じ一世帯としての責務を果たしていること、それにより互助組織の恩恵も享受していることが明らかにされた。また、呼びかけによる集まりへの参加に限らず、普段の近所（本分家等も含む）付き合いを通じて社会関係を絶やさないことで自然に見守りもおこなっていた。つまり、こうした世帯が、強制されることなくごく自然な形で自治会活動や様々な住民活動に参加していたり、相互扶助のネットワークに組み込まれていることがわかり、過疎農村地域ではこの形こそが理想的な住民参加モデルなのだと指摘できる。

第３に、人口高齢化に伴なって、福祉的な有用性を帯びた住民活動の割合が高まっているのではないかという見方である。生活場面での近隣との助け合いや集落自治機能維持のためにおこなわれる助け合い活動が活発になれば、おのずと安否確認の機会も増えることになる。こうした性格を併せ持つ住民活動の占める割合が高まっていくことは「地域の自己防衛機能」や「地域の福祉力」の形成にもつながり、また、高齢者による相互扶助（結い）実践の福祉的有用性であるとも指摘できる。したがって、過疎農村地域ではこのネットワークを更に強化するようなコミュニティワークをおこなう必要性が見えてくるわけである。もちろん、その援助活動を得意分野とする市町村社会福祉協議会が積極的に関与すべきだということは指摘するまでもない。まして合併によって旧来の町や村の名前が無くなり、心の拠り所である地域の独自性を発揮しにくい時代になったからこそ、そのような地域に暮らしている人ほど、集落等のような小地域単位の住民活動を一層推進し地域福祉の底上げをしていくべきだと考えられる。

第４に、調査結果から「高齢化が進むことによって高齢者の相互支援になる活動がしやすくなる」と

いう条件もいくつか見出されたことについてである。地域で過ごす時間が長い人同士が集まりやすいこと、若い人たちが普段働きに出掛けて行くため高齢者だけが残ってしまう生活の中で、高齢者同士が助け合って様々な自治機能を下支えしていたり、若い人たちと同居している世帯に訪問するときに発生しがちな遠慮も気にせず訪問し合えるといった実態が浮き彫りにされたからである。またＡ集落・Ｉ集落ともに、現在の高齢者の相互扶助が活性化している背景には、農業機械が無かった時代に田植えや稲刈り作業を共同でおこなったり、不便な生活を相互扶助で乗り切った経験を持つ人たちの集まりであることが共通していた。だとすれば、そのような大変な中で助け合った経験が、極端に進む人口高齢化の局面に生かされるのだと前向きに解釈することもできるのではないか。

第５に、仮説１で示したとおり、地域の相互扶助意識の強化につながる可能性を示唆したものの、かつての運命共同体のような高い領域まで上昇するのは不可能という結論に至ったことについてである。本研究では、人口高齢化とともに危機意識が高まり高齢者同士が相互扶助に一層力を入れ、それが地域の活気にも影響を与えるのではないかと仮説を設定したが、ある場面を切り取って見た場合にはそのように見える場合もあったが、現実的にはそううまくはいかない面も多いことがわかった。たしかに、高齢者は地域で過ごす時間が長く、若い人より比較的時間に余裕があるので集まりやすいため、お互いに無理なく支え合うことを心掛ければ自治機能の維持や生きがい活動等の活性化を実現しやすい面（可能性）が見出せるものの、若年人口の流出により一旦低下した地域の活力を挽回したり、それを相殺する力としては、力不足であることは否めない。とりわけ調査対象にした限界集落のＩ集落でも世代交代が期待できない以上、自治機能低下と将来の崩壊局面は避けられないと実感したからでもある。だからといって何も対策をしなくていいはずがない。たとえば、Ｉ集落の高齢者の実践のように、生きがい活動の一環として自治会活動をおこなうような成功事例をモデルにすることが求められるからである。なぜなら、自治機能の崩壊を防げないまでもそのスピードを弱める力の形成についてそこから学び取ることができるためである。つまり、人口高齢化の進む過疎農村集落ほど、高齢者による相互扶助につながる活動への参加を勧め、それらの活動から生きがいを得られるような雰囲気づくりをすすめたり、またその営みが少しでも長く続けられるようにするため市町村社会福祉協議会等が今後更に支援をしていくことが求められる。もちろん、急激に人口高齢化してから対策をとるよりも一歩先にすすんだ地域の成功モデルの蓄積をして後に役立てるためにも、その対策を急ぐ時期に来ているからである。

第６に、上記の対策をとる際に心掛けなければならないことについてである。水が漏れないように木の桶は一枚一枚の板が温度や湿度に合わせて伸び縮みの変化をしているが、その微妙なバランスがあるというイメージを、コミュニティワークを展開する際にも心掛けることである。というのも、高齢者同士の助け合い活動がうまくいく状態とそれは似ている面があるからである。たとえば、「お互いに高齢者だから無理をしない範囲で力を貸したり借りたり、力を合わせて作業をしよう」という住民リーダーの声がけがみられたり、お互いが対等な立場で助け合うという観念に立ち、エゴを捨て支え合って負担を減らしながら前向きに生きることへ意識転換している様子が調査結果にみられたように、良好な人間関係を維持するためには活動上の規範があることにも注意を払う必要がある。そして、「高齢者だけでは活動が行き詰る」という閉塞感を打破し前向きに活動できるよう、高齢者の持っている力を引き出し、結集することができるように関わることが、コミュニティワークを展開する側にも求められるはずである。

最後に、以上の通り、人口高齢化のすすむ過疎農村集落において繰り広げられる高齢者を中心とした相互扶助の実践から、その形成要因や地域の活力に与える影響について探ってみた。総まとめという目的を達成するためには、調査対象地全てに共通する活性化要因を抽出して指摘することが求められるが、

調査の時期の違い、収集したデータの性質の違い等も多くそこまで到達できなかった。主に、農村集落であるＡ集落とＩ集落の調査結果から研究当初に設定した仮説の検証を試みただけで不十分だといえるが、残された課題は今後の研究課題としたい。

注

１）高橋和幸「秋田県の過疎農村地域における社会福祉面の相互扶助と住民参加に関する研究（その１）」青森大学・青森短期大学研究紀要，第25巻３号2003年２月 pp93―117
２）高橋和幸「秋田県の過疎農村地域における社会福祉面の相互扶助と住民参加に関する研究（その２）」青森大学・青森短期大学研究紀要，第25巻４号2003年３月 pp1―41
３）秋田県平鹿町は平成17年10月に横手市と合併し、現在は横手市の一部となっている。
４）高橋和幸「秋田県の過疎農村地域における社会福祉面の相互扶助と住民参加に関する研究（その３）」青森大学・青森短期大学研究紀要，第26巻２号2003年11月 pp49―101
５）高橋和幸「秋田県の過疎農村地域における社会福祉面の相互扶助と住民参加に関する研究（その４）」青森大学・青森短期大学研究紀要，第26巻２号2003年11月 pp103―170
６）高橋和幸「秋田県の過疎農村地域における社会福祉面の相互扶助と住民参加に関する研究（その５）」青森大学・青森短期大学研究紀要，第26巻３号2004年２月 pp87―127
７）秋田県西仙北町は平成17年３月に合併して大仙市の一部となっており、西仙北町社会福祉協議会も現在は大仙市社会福祉協議会西仙北支所となっている。
８）高橋和幸「秋田県の過疎農村地域における社会福祉面の相互扶助と住民参加に関する研究（その６）」青森大学・青森短期大学研究紀要，第27巻２号2004年11月 pp63―87
９）雄物川の堤防改築、国道の拡幅工事の実現に向けた陳情や署名活動は当時の建設省湯沢工事事務所（現国土交通省同事務所）に対しておこなっている。また、秋田魁新報に活動当時の様子が記事として掲載されたことがある。
10）高橋和幸「秋田県の過疎農村地域における社会福祉面の相互扶助と住民参加に関する研究（その７）」青森大学・青森短期大学研究紀要，第28巻１号2005年７月 pp151―174
11）高橋和幸「秋田県の過疎農村地域における社会福祉面の相互扶助と住民参加に関する研究（その８）」青森大学・青森短期大学研究紀要，第28巻２号2005年11月 pp61―79
12）高橋和幸「秋田県の過疎農村地域における社会福祉面の相互扶助と住民参加に関する研究（その９）」青森大学・青森短期大学研究紀要，第28巻４号2006年３月 pp49―75
13）親幸会はＩ集落農事研究会の親稲会の改組で誕生している。会員の高齢化に伴なって農事研究（水稲栽培の情報交換等の）活動からレクリエーション活動をおこなう親睦のグループに変わっている。活発な活動状況については秋田魁新報で紹介されたことがある。
14）高橋和幸「秋田県の過疎農村地域における社会福祉面の相互扶助と住民参加に関する研究（その10）」秋田看護福祉大学地域総合研究所研究所報，統合第２号2007年３月 pp3―16
15）高橋和幸「秋田県の過疎農村地域における社会福祉面の相互扶助と住民参加に関する研究（その11）」秋田看護福祉大学地域総合研究所研究所報，統合第２号2007年３月 pp17―29
16）岡村重夫『社会福祉原論』全国社会福祉協議会1993年 p6
17）松岡昌則「現代社会における近隣機能の一考察」『秋田大学教育学部研究紀要』人文社会科学第39集，昭和63年
18）高橋勇悦・菊池喜代志『今日の都市社会学』学文社1995年 p106
19）米山俊直『都市と農村』放送大学教育振興会1996年 p96

参考文献

田中　実『地域共同管理の社会学』東信堂1993年
高橋　誠『近郊農村の地域社会変動』古今書院1997年
山本努他『現代農山村の社会分析』学文社1998年
内藤辰美『地域再生の思想と方法』恒星社厚生閣2001年
大野　晃『限界集落と地域再生』秋田魁新報社2008年

[論　文]

秋田県における血液事業の展開過程

※奈　良　　洋

はじめに

血液事業とはいったいどのようにして形成されてきたのであろうか。全くの善意を基底におくこの事業を真に理解し、手を貸してくれる理解者がどれほど存在しているのであろうか、と疑問にさいなまされてくる。５年前に開催された県赤十字血液センター創立40周年記念シンポジュウムで、当時の県献血推進協議会の会長（医師）が「献血推進は家庭教育で行なうべきである」との発言は今も耳朶に残る。家庭教育で献血を推進できるとのこの発言には、そのための条件整備が必要であることを高校生へのアンケート調査であぶりだされている。一般県民の善意にすべてをゆだねる血液を、使用する側にもなんらかのアクションが求められる。

振りかえれば昭和39年12月に秋田県赤十字血液センター（以下秋田センター）が開所、以来その事業体を今日まで時には内側から、そして時には外から事業の応援団の一員として見守ってきた。そこにはさまざまな試行錯誤があったのも事実である。梅毒感染、血清肝炎、非加熱製剤によるエイズ感染[(1)]など輸血による陰惨な禍根の数々を「日本の輸血の歴史は血液行政の失敗、いいかえれば悲劇の歴史」[(2)]と言わしめ、また「血液事業がわが国に取り入れられた初めから、すべての方面に関して広い知識を有し、大所高所から判断でき、大方針を間違いなく決定しえる人が、学識経験者にも行政官にもほとんどいなかったことに起因するためだろうと思う」と分析する[(3)]。前者のコメントは高校生のころから長らく献血運動に携わってきた方であり、後者は日本赤十字社血液センター所長を務めた医師の悔悟である。

そのような経過を踏まえてもなお、血液事業は完全に安全な血液を供給できないというところに血液事業の悩ましいところがある。そうはいっても現在の技術の限りをつくしての安全性への挑戦によって安心・安全な血液供給で多くの命を救っていることは確かである。

血液不足におちいり献血者を勧誘する血液センター職員

しかし、今なお量的にはみちなお遠し、であることも現実である。年末・年始になると秋田駅前の広場などでは「献血にご協力ください」と呼び掛ける姿が恒例行事のようになっている。年末・年始は夏のお盆休みと共に常に血液不足に見舞われるのである。秋田センターがオープンしてから、もう45年になろうとしているのに慢性的な輸血用血液不足は解消されていないのである。同センターの職員は「20年度に何度、血液不足に見舞われたかわからないほどです」と嘆く。少子高齢化が進

行する秋田県の血液需給は深刻さを増している。

血液事業を一手に担っている日本赤十字社は効率化のため、各県ごとに設置している血液センターの再編整備を推進し、それに伴い秋田センター機能の見直しを図っている。既に一部機能（検査業務）は仙台に統合されている。転機に立つ秋田県内血液事業の現状を歴史的視点に立って検証してみよう。

輸血の歴史

治療法として輸血は古くから用いられていた。一説には1492年（明応元年）ローマ法王イノセント八世に対して行なわれたと伝えられている。どのような方法で試みたかは明らかでないが、若者の血を飲ませたとする説が有力である。新しい生理学の知識に基づき、初めて輸血を試みたのは1818年、ロンドンの外科医ジェムス・ブランデル（1790～1877）で胃がんの患者に輸血したのが最初とされているが、患者は数時間後に死亡した。この時期は血液型が知られていなかったためで型違いの輸血をしていたかもわからない。しかし、彼は1829年最初の成功を記録する。分娩後の出血性貧血に悩んでいた婦人に彼の助手の血液８オンス（約220ミリリットル）を３時間かけて輸血し、貧血から回復させることに成功した。血液型を無視しての輸血はABO式血液型の頻度から逆算してみると約65％は一応輸血を許される組み合わせなので成功例が出ても不思議ではない。とはいえ輸血の３大要件である血液型の照合、血液の凝固防止、滅菌についての処置をしなかったことからしてもやはり成功は僥倖であったといえよう。

ブランデルの成功は他の医師に刺激となり、イギリスでは1873年までに240例の輸血が行なわれたと記録されている。輸血はとっておきの治療法であるとはいえ、上記血液型などが未知なことから約四割の患者の血管のなかで溶血がおきたと考えられ、死亡率はかなり高かったと思われる。

輸血の普及におおいに役立ったのは19世紀末にオーストリアのカルル・ランドシュタイナーによるABO式血液型の発見である。1900年（発表は1901年）のことである。人の血清に他人の赤血球を混合すると、凝集する場合としない場合があることを知り血液に型のあることを発見したのだった。血液型の発見はハーベーの血液循環の理論と共に輸血史上の二大業績の一つであった。オーストリア人の彼は、後にナチスに追われてアメリカにわたりロックフェラー研究所で研究を続け、さらにMN式、Ｐ式、Rh式血液型を発見し1930年、ノーベル生理学医学賞を受けた。これとは別に1914年から1915年にかけてベルギー、アメリカ、アルゼンチンの医学者が相次いでクエン酸ソーダが血液の抗凝固剤として優れた効果を有することを発見する。一方、十九世紀末から二十世紀にかけて近代細菌学が勃興し、輸血面でも細菌汚染の除去技術が飛躍的に発展した。注射器などの輸血に必要な器具の改良、開発が相次ぎ輸血の普及は第一次・第二次両世界戦争を契機に献血組織の確立をもたらし、赤十字の献血運動は世界規模で広がりを見せていった。つまり輸血が治療面に活用されたのは３大発明、発見とともに世界大戦による大量の戦傷者の対応に用いられ、発展してきたのである。

日本人及び世界の血液型の発現率％(ABO式)

血液型	秋田県	日　本	アメリカ	フインランド	スイス	オーストリア	カナダ
A	34.3	40	41	40	47	44	40
B	24.0	20	12	14	8.5	13	20
O	32.0	30	44	40	40	38	30
AB	9.7	10	3	6	4.5	5	10

血液型と遺伝（両親と子の血液型）

母＼父	A型	B型	AB型	O型
A型	AまたはO型	すべて	O型以外	AまたはO型
B型	すべて	BまたはO型	O型以外	BまたはO型
AB型	O型以外	O型以外	O型以外	AまたはB型
O型	AまたはO型	BまたはO型	AまたはB型	O型のみ

日本での輸血の始まり

文献に残っている日本での最初の輸血は大正８年（1919年）２月、九州大学の後藤七郎教授が第一次世界大戦中の連合軍救護班任務から帰国後に、膿胸手術後の瀕死の患者にクエン酸塩加血液を300ミリリットル（mL）輸血して救命したのが初めてのこととされている。その年の６月、東京大学の塩田広重教授が子宮筋腫の患者に、名古屋大学の斉藤真教授が外傷患者にそれぞれ輸血した。このような輸血の試みは散見されたが、それは重症患者にごく例外的に行なわれていたに過ぎない。これは供血組織が十分に育っていないことに起因している。

しかし輸血が一般に認識されたのは昭和５年11月、当時の浜口雄幸首相が東京駅で暴漢に狙撃され、腹腔内出血で重傷を負った際、東京大学の塩田教授が輸血し、一命を取りとめたことが輸血に対して社会の関心を高めた。(浜口首相はほぼ１年後の昭和６年８月にこの傷がもとで死亡した）当時は血液提供者が患者のそばにおもむき輸血する、いわゆる枕元献血が主流であった。

昭和６年９月に勃発した満州事変は翌１月に上海事変に発展し、同12年には日支事変、さらには太平洋戦争へと拡大していく。これらの戦争による傷病兵に対する救命措置として昭和10年、乾燥血の試作、血液の輸送実験が行なわれ、重症患者への輸血で治療成果を収めたことは、わが国の輸血の揺籃時代を示すものといえる。

戦後の血液事業の模索

大戦後の日本は主要都市がアメリカ軍の空爆で灰燼に帰し、国民はあらゆる面で虚脱状態に陥り、医療界も例外ではなかった。血液事業は一時全くの野放し状態であった。このため、生血輸血・枕元輸血に伴う数多くの輸血事故が発生した。その典型的事件が昭和23年（1948年）11月、東京大学医学部付属病院小石川分院産婦人科で起きた。入院中の一患者が、生血の輸血を受けた約一ヵ月後に突然発熱し、三ヵ月後には視力障害を起こした。輸血による梅毒感染によるものと判明し、患者は国を相手取り損害賠償・業務上過失傷害の訴訟を提起した。十年越しの裁判で国の敗訴となった。この事件は血液事業に大きな警鐘を鳴らしたにもかかわらず、以後も輸血による血清肝炎（1960年代)、輸入血漿（凝固因子製剤）によるエイズ感染（1980年代）の問題を引き起こし、血液事業の苦悩を増幅させてきたのである。

梅毒事件をきっかけに当時の占領軍・連合軍総司令部から厚生省と東京都に対して輸血対策の確立を指示され、血液銀行を設置して安全な保存血液を供給するようにとの助言があった。同じころアメリカ赤十字社からも、血液事業を日本赤十字社で行なうよう要請され、必要な機械、器材等の助成が申し入れられたのである。このようなアメリカからの助言、援助により、日本における血液事業は日本赤十字社を中心にして全国に拡大していくのである。

これにより、日本赤十字社は昭和24年（1949年）９月から５ヶ月間にわたり関係者をアメリカ赤十字社に派遣し、血液事業を視察し、血液銀行設立に向けての態勢を固めることになる。同27年４月、日本赤十字社血液銀行東京業務所（通称日本赤十字社東京血液銀行）を開設するのである。ところが、健康保険で保存血液が療養給付の対象とされたため昭和29年ごろから献血（奉仕供血）が減少し始め、次いで30年ごろから返血、32年ごろから預血が減少し出した。他方では血液に対する医療機関からの需要が増え、これに対応するためやむなく買血をも扱かわざるを得なくなった。(4)

このような日本赤十字社の血液事業は、スタート時点で大きくつまずいたことが、日本の血液事業を混迷におとしいれたといえる。すなわち血液不足が買血を基盤とする商業銀行を各地に急増させたのである。乾燥血漿の製造が開始されたのをはじめ保存血液の製造も併せ行い、次第に各種の性格を有する民間の血液銀行が生まれていき、その製造量も大変な勢いで増加した。しかし売血者はそれに比例しては増えなかったため、過度の採血が横行し、当局も黙認していることから頻回売血人の健康を阻害し、その提供する血液の質の低下が著しく、社会問題化していく。昭和33年、日本輸血学会が全国のベット200床以上を持つ病院を対象に調査したところ約半数の病院が「保存血液は質が悪く問題だ」と回答している。

この間の事情は前掲の青木氏の「危ない血液はもういらない」に詳しく述べられている。同氏は高校時代から赤十字の奉仕活動に参加し大学時代は赤十字学生奉仕団を結成し、献血推進に取り組み以来約40年にわたり血液事業を見つめ、なかでも売血の実態を日本ばかりではなく、アメリカに渡りつぶさに実態を調査してきた人物。そのレポートは鬼気迫るものである。すなわち一日に800mL も採血、しかも毎日のように売血しているのはざらという信じられない実態をルポしている。そこには厚生省の指針「月に１回」は完全に反古にされている。当然その血液は薄く、公式発表でも輸血をした患者の50～70％は血清肝炎にかかったといわれていた、と記している。マスメデアがこぞって「黄色い血追放」キャンペーンを繰り広げたのはこのころである。

このような状態の中で昭和39年３月、ライシャワー駐日米国大使が暴漢に襲われ重症を負い手術を受けた際の輸血がもとで、血清肝炎を発症した。輸血したのが売血によるもので国際的に波紋を起こした。このことは売血が血清肝炎の温床になり、また過度の採血が重症の貧血症を起こし国民の健康維持に由々しき問題であることをさらけ出した。この前年の昭和38年のわが国の血液銀行は公立６、財団法人及び社団法人11、株式会社22、赤十字社16の合計55だが、保存血液製造量約58万５千Ｌのうち献血によるものはわずか1.9％にすぎず、売血が支配していた。つまり、わが国の輸血用血液の需要増加はそのほとんどが商業血液銀行の売血に依存し、献血による供給の理念からは程遠い状態であったことを、ライシャワー事件は白日のもとに天下に知らしめたのだった。

この問題は国政に大きな議論を巻き起こした。昭和39年６月、厚生大臣が「売血制度の是正、献血・預血の推進による血液行政の転換をはかりたい」と発表した。次いで同年８月20日、献血推進に対する方針を決定し、翌21日わが国血液事業史上特筆すべき次の閣議決定を行なった。

「献血の推進について」の閣議決定の内容

政府は、血液事業の現状にかんがみ可及的速やかに保存血液を献血により確保する体制を確保するため、国及び地方公共団体による献血思想の普及と献血の組織化を図るとともに日本赤十字社または地方公共団体による献血受け入れ態勢の整備を促進するものとする。

閣議決定はしたものの売血を法律で禁止する措置を講ずることはなかった。その背景には国民が積極

的に献血に協力することにより、買血業者及び売血常習者が次第に淘汰され、輸血用血液が献血による健全な血液に取って代わっていくことを期待してのことであった。しかし、政策としてはことの本質を理解していなかったといわざるを得ない。売血を残すことによって、献血思想の浸透を阻害し、以後の輸血に伴う薬害発生の温床を残す結果となったのである。悔やんでも悔やみきれない血液行政政策の失敗であった。

秋田県における輸血の歴史

さて秋田県における治療用血液はどのような推移をたどったのであろうか。輸血についてはっきりした記録は見当たらないが、秋田センター六代目所長の真木正博博士（秋田大学名誉教授）の話によると、初めての輸血は昭和10年前後としている。秋田組合病院診療費規定によると輸血料は15円以下との記録があるという。当時の個室入院料が１日１円20銭、食事料が１日60銭というから輸血料は大変な高額であったわけである。昭和38年ごろの秋田県内における輸血用血液の使用量は年間32,000本程度（１本は200mL）といわれ、そのほとんどは東京からの商業用血液、つまりは売血に依存していたとのことだ。

また、初代秋田センター所長の前多豊吉県立中央病院長（当時）は戦後の医療の進歩で肺切除手術、脳、心臓手術が盛んになり、その際必要な血液は患者家族などを集めて、血液型の同じ人から血液を提供してもらい、すぐ患者に輸血するいわゆる枕元輸血が主流であったので、患者側の負担は大変であった。そこに東京、大阪での売血による商業血液銀行から比較的容易に血液が得られるようになったので、大学病院などから、引っ張りだこになり、その価格は200mLで500円だったのが、1400～1500円にまで跳ね上がっていた、と秋田県赤十字血液センター20周年記念誌（昭和59年刊）に書いておられる。そして、手術が成功して退院してから血清肝炎にかかる人が目立ち始めた、とも記しているのである。

秋田県赤十字血液センターの設立

このような輸血事情の中での閣議決定に伴い、秋田県でも急遽、献血推進を迫られたわけである。全国各地に「献血受け入れ体制」が整備されていく中で秋田県でも昭和39年の９月定例県議会で県立中央病院内（現県脳血管研究センター敷地）に秋田センターを設置する条例案が可決されたのに伴い、中病棟地下を改装して同年12月24日に開所式が行なわれ、献血事業がスタートしたのであった。スタッフは前多所長のもと医師一人（中央病院の医師と兼務）看護婦３人、検査技師１人、事務員４人のこじんまりとしたものであった。

これに先立ち同年11月には松橋副知事を会長とする県献血推進協議会（62年からは県血液事業推進協議会と名称変更）が発足し、献血推進の体制が整った。とはいえ、この年の献血は零であった。保存血液の製造や管理する薬剤師が確保できなかったことなどからである。そのうえ献血に対する理解が県民に浸透されていなかったことにもよる。「是非年内に採血するように、と関係方面から矢の催促がくるし、報道機関からも開所式の翌日から何本献血があったか、と問い合わせの電話がくるのには閉口した」と初代事務部長の竹下金治さんは述懐する。(同血液センター20年誌)

本格的な活動は40年からで、献血第一号は県の献血推進を担当している県医務薬事課長であった丸山寛さん（後に副知事）であった。一般県民からの献血は１月８日まで待たねばならなかった。前多所長のはからいで患者の家族や知人など25人が献血に応じてくれた。開所と共に東京から送られてきた移動採血車「あかつき号」は１月下旬になってようやく秋田市消防本部で16人と秋田営林局で17人が献血に

応じてくれて晴れて出動となった。このころは献血者を募るのは容易でなく、秋田魁新報は献血者名を「献血有難う」とのカットつきで全員の氏名を掲載していたことを思い出す。今では考えられないエピソードといえる。このような苦難のみちを歩みながら３月末までに740本（１本200mL）の献血を得たが、センター収支は21万円の持ち出しであった。

献血の啓蒙組織の結成

献血推進協議会はその後各市町村単位にも結成され、44年２月の大潟村での結成を最後に県内69の全市町村で結成された。これに先立つ民間有志の献血推進のための組織は若い人たちを中心に活動の輪が広がっていった。すなわち、39年９月、黄色い血液追放の新聞社のキャンペーンなどを契機に秋田県内の大学、短大、看護学院の学生有志21人が「学生献血連盟」を結成し、献血のキャンペーンに取り組んだ。結成を呼び掛けて初代会長になった秋田大学鉱山学部３年の佐藤紀元さんはそのきっかけについて「献血センター20年誌」の中で次のように記している。

「友人を白血病で失った。彼の病名を知ってから数ヶ月、私は輸血用血液を求めて走り回った。一日も長く生きてほしいと願いからであったが、そんななかで20年前の学生献血連盟結成時代を思い浮かべていた。結成２年前から学生赤十字奉仕団員としてのサークル活動の中で施設慰問や点字奉仕、募金活動、母子寮の子どもたちへの学習指導をしているうちに、東京で開かれた全国学生赤十字奉仕団の大会に参加。そのとき、東京、大阪の代表から「常習売血者」の実態が報告された。輸血の90％を超える量が売血によって賄われ、それが血清肝炎の原因になっていることが生々しく語られた。参加者は一様に驚き、閉会式に際して各県で献血運動を起こすことを決議し、それから数ヵ月後に県内の学生に呼び掛けて学生献血連盟を結成した。賛同者は200名をこえ、献血推進キャラバンを２年にわたり県内くまなく走り回り献血の必要性を訴えてきた。献血車が県内を走りまわっているのを見るにつけ，感無量です。」
高校教諭として教育の現場に携わっているなかでの寄稿であった。

学生ばかりでなく、民間の企業やボランテア団体などが積極的に献血推進の役割を果たしてきた。ライオンズクラブでは昭和44年11月から取り組み、現在も続いている。会員の献血はもとより、献血ＰＲのため秋田市内をパレードしたり、県内19のライオンズクラブが足並みをそろえ緊急用輸送車を寄贈するなど多彩な運動を繰り広げている。その献血実績は25年間に延べ5,234人に上っている。秋田南法人会でも平成10年から社会貢献事業の一環として、税を知る週間内に献血キャンペーンを実施している。20年までの10年間は秋田駅前のアゴラ広場にテントをはり移動採血車を出動させて、会員の従業員のほか道行く人に献血を呼びかけている。10年間の実績が認められて平成20年11月、厚生労働省から大臣表彰された。同年は血液センターを会場に会員の従業員を中心に献血を実施し113人の実績を挙げた。

秋田県内での血液事業の変遷

オープン当時の血液センターはあくまでも仮住まいであった。献血者の増加に伴い昭和43年９月に、秋田赤十字病院の新築と同時に同病院西側に併設された秋田赤十字看護学院（４階建て）の１階と地階の一部761平方メートルに移転した。所長は日赤病院長の竹本吉夫氏の兼務。移動採血車も４台に増え献血実績は伸び続け、年間３万人の献血者が高度経済成長と軌を同じくして昭和58年には76000台に達

し、センターの狭隘が問題化してきた。

そこで、独立の施設を建設すべく検討の結果、国道７号沿い（通称臨海道路）の工業団地内の秋田市川尻町字大川の県有地に建設することになった。敷地は3300平方メートルを県から無償で借り、建築費８億7400万円のうち県から４億円、市町村から１億3400万円の補助を得て着工したのだった。昭和57年７月完成した。建物の規模は地上３階、一部地下１階建述べ3260平方メートル、前の建物の4.3倍の規模である。この建設計画の陣頭に立ったのが、県民生部長を務め初めて専任として就任した進藤正悦３代目所長であった。オープンからちょうど20年、これでようやく独立庁舎と専任所長を得て、県民の必要とする血液の供給体制が整ったのである。

ただし、新センターは市の中心地から離れているため気軽に立ち寄れる市の中心部に献血ルームを新設する構想を抱いていた血液センターは、秋田駅前の秋田総合文化会館・美術館通称アトリオンの地下に待望の献血ルームをオープンさせた。平成５年５月のことである。狙いどおり人気は上々、特に若者や女性の姿が目立つ。学校帰りや昼休み時間を利用する若者が気軽に立ち寄れるのが人気の要因である。

新しい皮袋には新しい酒を、のたとえ通りに、成分製剤の製造に本格的に取り組む。患者に対する輸血はこれまで採血した血液全部を供血していたが、患者によってはかえって体に負担になり、副作用も出てくることもあった。そこで患者の必要な成分のみを供血することが、より有効であることがわかり、それに対応する成分製剤が製造されてきた。秋田センターでも49年から小規模の無菌室を設け、成分製剤の製造に取り組んできたが、独立庁舎の完成とともに東北で初めて成分採血装置を導入した。

血液は大別すると赤血球、白血球、血漿、血小板からなる。これまでの全血血液から、赤血球、血漿、血小板ごとに分離し、それぞれ製品化して供給するものだが、医療機関ではなじみが薄く、専門家を招いて成分製剤の使用法の講習会を開催したほどである。

これに対応して、献血の方法も全血献血から血漿成分だけをとり、残りの成分を体内に戻す血漿成分献血および、血小板成分献血が導入された。また発足当時から200mL だけだったのを、400mL 献血を昭和61年４月から実施した。これは輸血の効率化と安全性を高めることを狙いとしている。

日本赤十字社の調によると、全国的に成分製剤の製剤が始まった昭和48年、全国の成分製剤供給量は全体のわずか１％にすぎなかったが、同59年は87％まで増えた。

検査サービスの充実

献血者の善意に応えるべく日本赤十字社は昭和50年から全国のセンターで準備の整い次第、健康チェックサービスを実施した。献血は無償の奉仕が建前だが、何らかのサービスを、との考えから、血液の１部を使って健康状態を調べようというもので、秋田センターでは昭和57年７月から献血者全員に対して生化学検査を実施し、その結果を献血者に通知している。検査項目はＡＬＴ（ＧＰＴ）、ＡＳＴ（ＧＯＴ）、TP（総蛋白）、ALB（アルブミン）、ガンマＧＴＰ、CHOL（コレステロール）、アルブミン／グロブリンの７項目。成分献血者には血球計数検査の赤血球数、ヘモグロビン量、白血球数、血小板数など８項目を通知している。これによって体の異常のチェックが出来るため、献血は手軽に健康状態を確認できるというわけである。始めた当時、異常値を示したのは献血者の１％ほどであった。

さらに平成21年３月から、糖尿病の疑いがあるかどうかを調べる項目を追加する。これまでも献血者から糖尿病の検査をしてほしいとの要望が出されていたのに加え、近年糖尿病患者・予備軍が急増しており、深刻化する献血者の減少に歯止めをかける狙いもある。

糖尿病の血液検査は、空腹時の血糖値を測定する方法が一般的だが、空腹では献血が出来ないため飲

食後でも数値に影響がない血液中のグリコアルブミンを測定することで間接的に血糖値を測定する方法を導入する。検査結果は生化学検査と同様、約２週間後に本人に通知する。

厚生労働省の「2007年国民健康・栄養調査」で糖尿病が強く疑われる人や「予備軍」を合わせると2210万人と推計されている。10年前に比べると840万人（38%）、06年比でも340万人（18%）増え、増加ペースが加速しているのが実情である。前記調査によると糖尿病が強く疑われる人の39%がほとんど治療を受けていないことが判明している。

これらの検査は勿論無料であり、献血は自身の健康を確認できる手軽な方法でもあるのだ。

少子高齢化時代の献血対策

献血実績はオープン以来、多少の曲折があったものの、順調に実績を上げ、昭和60年度の80,541人をピークに減少に転じた。献血実績が８万台を記録したのはこの年度だけである。以後献血実績は減少傾向を示した。唯一例外だったのは平成５年度の77,665人と60年度に次ぐ実績を上げただけで、これを除けばほぼ一本調子に減少した。平成５年度に回復したのは前述したようにアトリオンに献血ルームを開設したことが寄与している。珍しさも手伝って、オープン初日は130人もの献血者で溢れるなど一日に100人ほどが献血し、同年５月オープにもかかわらず、同年度のルームでの実績は13846人を超えたほか、移動採血車による献血も順調だったことによる。

しかしそれもつかの間、献血者は減る一方で平成15年度には56,691人まで減った。これは昭和52年度の水準である。落込みはなお続き、同19年度には49,697人でピーク時の約40%の減少である。この年は血液の在庫不足に悩まされ続きで、お盆の時期や年末・年始の在庫が払底し、職員は休み返上で献血者集めに奔走した。

減少の要因として３つが挙げられる。第一は構造的な要因、つまり人口構造による献血人口の減少である。秋田県内人口の減少は近年、年間１万人を越えている。そのほとんどが若者であり、少子高齢化が全国一に迫る勢いである。秋田県の献血の特長は高校生を中心とした若者が中心である。その若者の献血が不振であることが響いている。16～19歳の献血実績は平成15年度9,881人でピーク時の半分以下であり、19年度まで下げ止まりせず、同年度の実績は5,588人まで減った。15年度のこの年代の全実績に占める比率は17.4%だったのが19年度は11.2%に低下した。この傾向はさらに続くことは間違いなかろう。

第二には献血運動の劣化であり、危機感のなさであり、行政など関係者の熱意、意識の低下である。献血運動、啓発活動は近年低調の一語に尽きる。秋田センター開設当時のことは言うまい。しかし日常の態勢はほとんど機能していない。例えば平成元年10月23日「第一回の献血感謝のつどい」を秋田市文化会館で開催された。これは献血実績が昭和60年をピークに３年連続で減少したことに危機感を抱いた県が、日赤県支部、秋田センターを巻き込んで全県的規模で開催したものだ。会場には市町村の献血担当者をはじめ関係者400人が集い献血運動に功労のあった83団体、150人に厚生大臣や県知事から感謝状が贈られた。この後体験発表、講演、「献血の輪を広げたい」との誓いの言葉など多彩な行事を展開し、献血運動を盛上げた。「献血感謝のつどい」は平成７年まで毎年同じ形で開催された。しかし今はこの種の啓蒙運動は影を潜めてしまった。

また象徴的なことがある。それは献血の揺籃期に県、県医師会のほか各界から人材を集めた県献血推進協議会が結成されたが、58年３月、廃止された。代わって、県保健医療協議会献血部会が発足し、昭和62年２月に今度は県血液事業推進協議会に改組される。が、いつの間にかそれが解体され、県地域保

健医療福祉協議会献血推進部会に組織替えされたことである。当初の県献血推進協議会の事業内容は①献血思想の普及に関すること②血液製剤の需給計画検討に関すること③献血組織の育成に関すること④血液製剤使用の適正化に関することーなどを掲げている。この目標が既に達成され、問題がなくなったといわんばかりの改変である。つまり現在は新たに設けられた保健医療福祉協議会の一部会に格下げされたうえ、部会開催は年に一回というお粗末さである。

第三にとめどもない人口流出、県内経済の長期低迷、さらには平成の市町村合併により69市町村が25市町村に再編された結果、市町村の献血推進の機能が著しく低下したことである。

事実会社員の献血実績は昭和60年度の32,600人から平成15年度には20,700人に減り、100年に一度の不況といわれる20年度にはさらに低下することが予想される

深刻な経済不況、歯止めのかからない少子高齢化・人口流失は手をこまねいていては献血環境をさらに悪化させることは必至である。

厚生労働省は平成17年、変異型クロイッフエルトヤコブ病が国内で初めて確認されたことにかんがみ緊急措置としてイギリスに滞在した者の献血抑制に踏み切った。それと同時に「献血構造改革の推進」を打ち出した。少子高齢化のわが国献血環境に対応すべく、新たな政策を打ち出したのである。
その骨子を以下に示す。

Ⅰ．若年層の献血対策　　若年者に対する献血体験の促進及び献血への意識の向上を目指す。
Ⅱ．企業献血及び企業との連携　　企業献血の推進を図る。.
Ⅲ．複数回献血対策　　複数回献血者の組織化及びサービス向上を図る。
なお、厚生労働省では、日本赤十字社、都道府県等と連携し、例年血液の不足する秋口、年末・年始、年度末等に定期的な献血推進キャンペーン等を実施する予定です。

このような厚生労働省の献血推進策は秋田県には響かず、構造改革には手付かずといってよい。

これからの献血推進の支点

秋田県は全国的にも若年層の献血のウエイトが高いと言われてきた。事実、昭和60年の献血総数に占める10、20代の献血実績は56％を占めていた。それが、平成15年には44％に低下し、同19年度には34.5％にまで低下しているのである。日赤中央血液センターの調べによると、少子高齢化に伴って全国的に血液の需要が増加すると推定している。ましてや、高齢化率の高い秋田県においては推して知るべしである。若年層の献血低下の一方で、高齢化により血液の需要の増加は避けられない。需要統計によると、全血液需要の約60％は60、70歳代が使用している。この事実を見るとき将来の血液需給は非常に窮屈になることは必至である。では打開の道はあるのか、を考えるに、一つは当然ながら、若年層の献血実績を伸ばすことである。もう一つは複数回献血者を増やすことである。両者とも上記厚生労働省の「献血構造改革の推進」の指針と重なるが、こちらの考えは「指針」とは微妙に違う。

まず若年層の献血推進策だが、「秋田県献血を支援する会」(以下支援する会) では既に実施に移している。教育の問題は文部科学省の所管だが、その対応を待っていては埒が明かない。「支援する会」では秋田市内の中学校２校で献血講話を全校生徒を対象に実施した。中学校に依頼して総合学習の時間を利用させていただき１時間献血について講話した。講師は秋田センターの所長。中学生でも理解できるようパワーポイントを使って分かりやすく話した。講話後、その感想を書いてもらって小冊子にまとめ

て、関係者に配布した。感想文を読むと献血の重要性を認識し、「今日の講話を、家族に話し、16歳になったら是非献血したい」と率直に思いを綴っていた。

その後は秋田市内の高等学校に依頼し、献血講話の時間を設けていただいた。年間２校のペースで実施。講話の後はアンケートを取り後日の参考にさせていただいている。

例えば平成15年10月、県立秋田工業高等学校の１～３年生の全校生徒961人を対象とした献血講話後のアンケート調査で興味深い結果を得た。その主なデータは以下のとおりである。(調査対象961人、回収率79.8%)

Ｑ．あなたは献血したことがありますか

Ａ．１年生は献血年齢に達していない生徒が多いのでカット　２年生　23%　３年生28%

Ｑ．献血した人に尋ねます。今後も献血をしたいと思いますか　Ａ．思う91%（学年別省略)

Ｑ．献血についてあなたが知りたいことは何ですかＡ．血液の病気26.4%　血液の使われ方24%
献血の仕組み23.4%（上位３回答)

平成16年９月に秋田経済法科大学付属高校（現明桜高校）で献血講話後に実施したアンケートの主な結果を紹介する。　対象１・２年生1200人　回答973人 回答率81.1%

Ｑ．あなたは献血したことがありますか２年生のみ＝１年生は献血年齢に達していない生徒が多いため)　Ａ．ある15%
あると答えた方への質問

Ｑ．今後も献血にご協力いただけますか　Ａ．はい 91%
献血をしたことがない生徒への質問

Ｑ．その理由をお答えください　Ａ．機会がない30.6%　時間がない26%　痛い17%　怖い10.5%

Ｑ．献血について知りたいことは何ですか　Ａ．血液の使われ方36%　血液の病気32%　献血の仕組み31.9%（上位３回答)

平成20年９月、県立秋田北高校で実施したアンケート結果を示す
(対象は１年生145人。年齢は15～16歳)。

Ｑ．あなたは献血について考えたことがありますか　Ａ．ある64.5%　いいえ.54.5%

Ｑ．今回の講演を聞いて今後献血をしたいと思いますか　Ａ．はい59%　いいえ41%

Ｑ．いいえと答えた方に　その理由は　Ａ．怖い26%　痛い21%　機会がない11%　その他47%

Ｑ．献血についてあなたが知りたいことはなんですか

Ａ．血液の使われ方32%　血液の病気23%　献血の仕組み21%　献血できる条件21%その他12%

Ｑ．家族で献血のことを話し合ったことがあります　Ａ．ある　28.3%　ない　70.3%

Ｑ．あなたはこの講話を聞いて家族に話したいと思いますか　Ａ．思う66%　思わない34%
上記２つの問いで家庭での献血の教育機能が「はじめに」記した「家庭での教育機能」が読み取れるであろう。つまり何もしないでいては家庭での話し合いの機会は生まれないということである。

Ｑ．献血に対するイメージは？　Ａ．人のため、助け合い、健康、命の役に立つ、思いやり、ボランティア、大切―などの順。

以上３校でのアンケート調査結果の概要を紹介したが、他の高校でのアンケート結果もほぼ同様の結果が得られた。これによって高校生の献血に対する意識が明らかにされた。その中で特に注目すべき点は献血経験者が「今後も献血に協力する」と答えた比率が高いことである。また秋田北高校では献血講話を聞いて家族と話したい、と答えた生徒が70％近くに達しており、この点を含め、今後の献血推進運動のありかたを示唆しているといえよう。

それでは若年層以外の中高年に対する献血推進の有効な手立てはどのようなものかを論じる。献血は若年層を対象にすべきとの考えは勿論必要だが、同時に、間もなく日本一の高齢社会となる秋田県において「高齢者は献血を受けるもの」との位置づけでは問題は解決しない。高齢者になっても若さを保ち、献血に向わせる環境作りが肝心である。

確かに、秋田県の年齢別献血実績を見ると50～64歳の献血実績はそれ以前の若い層に比べて、際立って落ちる。しかし、この年齢層は今後発掘可能であることを示している。何故なら、若壮年層の献血率は高いが、高齢年齢層のそれが落ちるのは、健康問題はあるにせよ、頻度が低下することも考えられるからである。厚生労働省の「献血構造改革」Ⅲの「複数回数献血を推進」することにより、この年齢層の献血を増やすことが可能と考える。献血可能な壮高齢者層の増加は社会保障費の低減につながり，活力ある地域社会の構築に寄与することは間違いない。

その推進策の一つとして、献血年齢の再引き上げを実現すべきである。平成11年に献血年齢を64歳から69歳まで延長したが、さらに、74歳まで延長すべきである。69歳すぎても献血可能な数値を維持している高齢者は多いはずである。現に69歳まで延長した結果、当該年齢の献血者は初年度の平成11年こそ192人に過ぎなかったが、３年後は４桁に増え、19年度には1,345人を記録した事実を直視すべきである。マスコミの記事や投稿欄に「献血定年」の嘆きが散見される。その代表的な記事、投稿をここに紹介する。前者は64歳までの時、後者は69歳に延長された後の投稿である。

> 「65歳の誕生日前に最後の献血を心がけ、献血車が来る日程に備えた。献血定年は会社を定年になった時と同じくらい寂しかった。献血の都度送られてくる検査データをワープロに打ち込み一覧表にして健康状態をチェツクしていたからである。それがもう出来ない。169回で終わるのは本当につらい。献血回数を制限するなど条件付きで献血年齢を延長できないものであろうか」(誕生日前に最後の献血の見出しで平成10年３月２日付け秋田魁新報の記事)

> 「その日の献血は生涯最後の献血となった。３日後に70歳になるからだ。１回目は多分30歳のころであった。職場の従業員が大けがをし大量の血液が必要になったからだ。率先して献血、以後定期的に工場内で献血できるようになった。約40年間で成分献血を含め534回も数え、献血時に得られるデータを自身の健康管理に生かしてきた。最近、献血する人が減少し、特に若い世代の献血離れがめだつそうだ。このままでは必要な血液が国内で確保できなくなり、外国からの売血に頼る事態に成りかねないと憂慮している。(平成20年10月７日付け　Ａ新聞)

献血の使途と仕組み

＜使途＞　高校生を対象としたアンケート調査でもっとも知りたいと答えたのは「献血血」がどのように使われているか、血液の病気及び献血の仕組みである。善意の血液の行き先を知りたいと思うのは

至極当然である。ここではその使途と仕組みについて論じる。血液事業を一手に担っている日本赤十字社の発行する各種パンフレット類など啓発の PR 誌にはほとんどそのことが触れられていない。そのうえ、秋田市の中心部に位置し、高校生などに人気の高いアトリオン地下に設けられている献血ルームにもそれを知る手掛かりになるものは見当たらない。ここを訪れる献血者はリピーターがほとんどなので、そのような事実は承知しているはず、というのであろうか。

使途を記しているのは日本赤十字社発行のＰＲ資料のうち「愛のかたち献血」の中で「血液のゆくえ」と題する見開き２ページだけだ。それによると、「献血された血液は赤血球、血小板、血漿などの輸血用血液製剤として使われるほか、血漿中の特定の蛋白質を抽出・精製した血漿分画製剤の原料として使用されます。赤十字社の製造能力を超える需要は国の指示により一部国内製薬企業の協力を得ています」とあり。これらの製剤は必要に応じて医療機関に供給される。需要の一番多いのは悪性新生物（がん）の36.8%、次いで循環器系の17.3%、血液及び造血器の16.7%、消化器系10.4%、その他である。

県内の需要内訳を記載したものはなく、供給量を示しただけである。緊急時の供給体制として21時まで３人、翌朝８時30分まで２人の職員を待機させているという。それはさておき、善意の献血がどのように使われているか、丁寧な資料を出すべきである。

＜仕組み＞次に献血をする場合の仕組みについては、初めて献血する人は知りたいと思うのは当然である。献血が出来るのは16歳からである。但し採血量は200mL まで。18歳になって初めて400mL と成分献血ができる。成分献血は血液成分の一部、つまり血漿と血小板だけを採血し、回復に時間がかかる赤血球は体内にもどす方法である。

献血の手順はまず血液センター、移動採血車あるいは出張所（秋田県の場合はアトリオン献血ルーム）で申し込む。さらに問診表に必要事項を記入したうえ、医師が問診し血圧測定する。さらに血液比重の測定と血液型の事前判定をして問題なければ採血ベットで献血となる。採血に要する時間は200・400 mL 献血で10～15分。成分献血は約１時間かかる。終われば医師のチェックを受け、一休みし、水分補給して、献血手帳を渡されて終了となる。

献血方法別の採血基準

	成分献血		全血献血	
	血漿成分献血	血小板成分献血	200mL 献血	400mL 献血
１回の献血量	300～600mL(体重別)	400mL 以下	200mL	400mL
年　　齢	18～69歳*	18～54歳	16～69歳*	18～69歳*
体　　重	男性45kg 以上・女性40kg 以上			男女共50kg 以上
最高血圧	90mmHg 以上			
血圧比重	血液比重1.052以上			血液比重1.053以上
血小板数	――	15万/uL 以上 60万/uL 以下	――	――
年間献血回数	血小板献血１回を２回に換算して 血漿成分献血と合計して24回以内		男性６回以内 女性４回以内	男性３回以内 女性２回以内
年間総献血量	――	――	男1.200mL 以内　女800mL 以内	

*65歳以上の献血は、献血される方の健康を考え、60～64歳の間に献血経験がある方に限る。

200mL 献血に対する逆風

献血は当初200mL 採血からスタートした。献血が一般的でなく、牛乳ビン一本分を抜かれることに抵抗感が付きまとっていたからである。血液センターがスタートしたばかりの揺籃期には200mL の献血は健康上全く問題ない、と説明に躍起になっている推進員の苦労を思い出す。人間の血液量は個人差があるが、男性は体重の約８％、女性は約７％といわれている。体重50㌔㌘の男性では４Ｌ、女性なら3.5Ｌの血液がある。このうち、10％の血液が怪我などで失われたとしても、特に心配はないといわれている。全血液の３分の１を失うと生命維持が困難となるが、血液量の15％以内（男性600mL 、女性525mL）の血液が失われても医学的に問題ないことがわかっている。故に200mL の献血をしても健康を損なうことはない、と納得してもらう時代であった。

しかし、世界で200mL の献血を行なっている国はまれであることから、昭和61年４月から400mL 採血と成分だけを採血する成分献血を導入した。その背景には血液型が同じでもその他の構成因子は微妙に違う。違う人の血液を複数輸血すると副作用を起こすとして医療機関からできるだけ同じ人の血液が望ましいとの要請によること、そのうえ採血コストからも、400mL が効率的であること、そしてその背景には国際的ににも200mL は少なすぎることなどの理由からであった。

国際的に採血基準を見ると、イギリスでは470mL 、フランス450mL 、アメリカ500mL 、ＥＵでも400mL を基準としている。台湾も500mL （体重60㌔以上）で、200mL の採血基準を採用している国は見当たらない。日本では18歳以上は400mL 採血としたものの、17歳以下は200mL とし、18歳以上でも希望によっては200mL の献血を認めてきた。秋田県内では高校生の献血比率が高いこともあって、200mL 献血の比率が高く、全国一の高率を示してきた。医療機関や日赤本社からの400mL 献血推進の声に押されて採血を進めた結果、19年度は200mL 比率の全国ワーストを脱することが出来た。「400mL 製剤を使用したいとの医療機関からの強い要請をバネに400mL 献血率を74.2％に高めて全国ワーストを返上できたことは意義あること」と秋田センター19年度年報に所長が記しているほどの「快挙」であったのだ

ちなみに全献血に占める400mL 比率は最高が福岡県の99.2％、全国平均が84.5％である。そうはいっても400mL 献血の比率が高まったことを手放しで喜んでばかりはいられない。200mL 献血は献血者を増やす導入部の役割を担っているからである。秋田県は高校生の献血率が全国的に高いことは前述した。全献血者に占める高校生の献血比率は16％にのぼる。一度献血した高校生は生涯にわたってリピーターとなって献血を重ねてくれることは、高校生の前記アンケートからも読みとれる。400mL の献血比率が高まった事実は、裏返しにいえば高校生の献血が減ったことを意味するだろう。ということは高校時代に献血の扉を開く機会もなくしてしまうことは、献血機会を遠ざけることでもある。若者の献血者でにぎわうアトリオン献血ルームにある献血者の「落書き帳」には「これで150回目の記念すべき日を迎えた」と書かれ、それに触発された若者が「私もそれを目指したい」などと書かれているのを見ると、これからの献血人口の減少はリピーターをどう増やすか、そして献血のきっかけをどのようにして作るか、を考えるべきであると痛感する。

なるほど、200mL 採血は400mL と同じ採血コストがかかる。経営面からすれば、200mL はやめてほしい、というのは理にかなっている。しかし、長期的な視点でものみればこのカベを超えない限り血液不足は解消しないだろう。

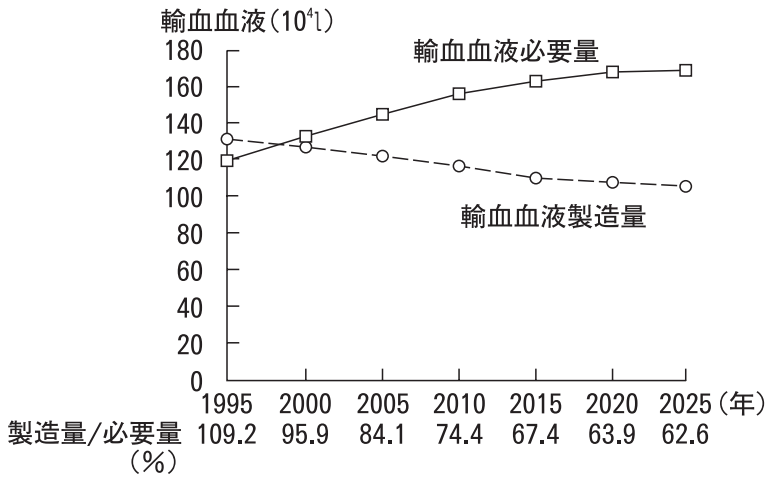
おわりに

歯止めのかからない少子高齢化時代に突入して、輸血用血液不足解消は深刻さを増す。下記の図のように今後血液需給の乖離はすさまじい。この需給ギャップをどのようにして埋めていくか、が問われるのである。献血者は50歳以下が全体の80%以上を占めているのに、それを使用しているのは50歳以上が80%に達している構造をどう打開するかも今後の血液事業の大きな視点であろう。

厚生労働省では採血基準の見直しを始めていると聞く。400mL 献血を現在の18歳から17歳に下げる、血小板採血を現在の54歳から60歳に引き上げるなどの措置である。この程度の手直しでは効果は余りない。同時に高齢者の献血可能年齢を現在の69歳からせめて74歳に引き上げるべきである。世界の献血年齢の上限を見るとかなり弾力的である。ＥＵは65歳までだが、それを超えても、医師の許可があれば延長できる。台湾も同じだが、アメリカには上限がない。献血年齢を一律に決めるのは無理があろう。個人差がかなり大きいからである。

何でも年齢で線引きするのが日本の悪い癖である。先ごろも、警察庁が道路交通法で75歳以上に表示を義務付けた高齢運転者標識（もみじマークー・通称落ち葉マーク）の罰則を凍結し70～74歳と同様努力義務にとどめる改正案をきめている。高齢者の猛烈な反発を受けてのことだが、これも個人差を認めないことから犯したミスだ。同じことが献血にも言える。69歳の誕生日がくると否応なしに献血をシャットアウトされる。若者をしのぐ採血適正数値があるにもかかわらず、である。すべて年齢で輪切りにする悪習からいまこそ脱却すべきだ。同時に繰り返すが、200mL 献血を目の敵にせず、200mL は献血参入の導入策、そして、基準上400mL が出来ない方の善意に応えるためにも門戸を開いておくべきである。善意を基底としている献血制度は効率一辺倒の経営はなじまない。それを露骨に押し進めれば、ほぼ半世紀かけて培ってきた献血制度が瓦解することは火を見るより明らかである。若年層の底上げにこだわらず、すべての年齢層の献血率の向上を図るべきときである。ここしばらくは人工血液の実用化は期待できず、現在の善意に依存する献血制度を維持するよりほかにないからである。

輸血用血液の需給予測（1995～2025年）



虎ノ門病院輸血部 高橋孝喜部長作成

注

※ノースアジア大学総合研究センター主任研究員　秋田県献血を支援する会会長
　主な著書　雪国の処方せん（共著）秋田魁新報　1980　定住の構図　同左　1985
　雄和とミネソタそして秋田に「ミネソタ州立大学秋田校13年の軌跡」（共著）2004年
　秋田の地域づくり（㈱）カッパンプラン　2006
　雪国の知恵　秋田魁新報　2007
　主な論文　秋田県における資源利用の展開過程の実証的研究―基礎自自体はどうかかわってきたか　2006
　安心安全な秋田県土づくりについての考察―平成18年豪雪の人的被害を検証　2007
　地球温暖化防止策による地域づくり―秋田県内の取り組みを検証　2008
　2006秋田県立大より博士（生物資源科学）取得

（１）薬害エイズ事件　1970年代後半から1980年代にかけて主に血友病患者に対して加熱してエイズウイリスを不活性化しなかった血液凝固因子製剤（非加熱製剤）を治療に使用したことにより多数 HIV 感染者及びエイズ患者を生み出し多くの死者を出した事件。世界でも日本だけが過熱製剤が開発された後も２年４ヶ月以上も放置され、承認されず非加熱製剤を使い続けたためエイズ被害が拡大した。1989年５月に大坂で、10月には東京で当時のミドリ十字（現在の田辺三菱製薬）と化学及び血清療法研究所、さらに輸入販売した製薬会社及び非加熱製剤を承認した厚生省に対して損害賠償を求める民事訴訟が提訴された。1996年２月、菅直人厚生大臣が謝罪し、３月和解が成立した。この事件は献血事業の信頼性を大きく傷つけ、血液行政に警鐘をならした。
（２）青木繁之「危ない血液はもういらない」P21都市文化社　1999
（３）村上省三「輸血」P5　講談社　昭和41年
（４）血液事業のあゆみ P53　日本赤十字社　平成３年

参考文献

薬害エイズ奪われた未来　毎日新聞社会部　1996
危ない血液はもういらない　青木繁之　都市文化社　1999
輸血　村上省三―黄色い血の恐怖と闘う　講談社　昭和41年
今日の輸血　霜山龍志　北海道大学図書刊行会　1998
少子高齢化時代の献血推進を考える　奈良洋　厚生労働６月号　2005
血液事業のあゆみ　日本赤十字社　平成３年
秋田県赤十字血液センター20周年記念誌　1984
　　同　　30周年記念誌　1994
　　同　　40周年記念誌　2004
秋田県赤十字血液センター　平成19年度　年報
日本赤十字の素顔　赤十字共同研究プロジェクト　あけび書房　2003
身体をめぐるレッスン２―資源としての身体　荻野美穂　岩波書店　2006
流通する人体―献体・献血・臓器提供の歴史　香西豊子　頸草書房　2007

教養・文化研究所所員名簿

教養部

福　山　　裕（運営委員）
稲　本　俊　輝
伊　藤　護　朗
遠　藤　純　男
ランディ・ケイ・チェケッツ
橋　元　志　保（運営委員）
中　橋　　誠
村　中　孝　司（編集委員）
渡　邉　　俊

経済学部

小山内　幸　治（運営委員）
庄　司　　信（編集委員）
西　尾　圭一郎
北　野　友　士

法学部

阿曽村　邦　昭
湯　川　　崇
上　村　康　之（編集委員）

2009年（平成21年）３月30日現在

執筆者紹介

講　演

岡　田　裕　介　　ノースアジア大学総合研究センター客員教授

福　岡　政　行　　ノースアジア大学総合研究センター客員教授

講　義

阿曽村　邦　昭　　ノースアジア大学法学部特任教授

論　文

村　中　孝　司　　ノースアジア大学教養部講師

高　橋　和　幸　　ノースアジア大学総合研究センター准教授

奈　良　　洋　　ノースアジア大学総合研究センター主任研究員

(掲載順)

教養・文化論集　第４巻　第２号 (通巻第７号)

2009年（平成21年）３月30日印刷・発行

編集・発行　ノースアジア大学 総合研究センター 教養・文化研究所
秋田市下北手桜字守沢46－1
電 話　018－836－6592
FAX　018－836－6530
URL　http://www.nau.ac.jp/~center/
印　　刷　秋田活版印刷株式会社
秋田市寺内字三千刈110－1
電 話　018－888－3500㈹

ISSN 1881−1981

THE BULLETIN OF CULTURAL SCIENCES

Vol.4, No.2 (7) March, 2009

CONTENTS

Lectures

On the Topics of the Year 2011 ……OKADA Yusuke

The Japanese Politics and Economy at the Crossroads
……FUKUOKA Masayuki

On the Media, Education, Children, and Homes……FUKUOKA Masayuki

President Chavez
— a hurricane blowing through Americas — ……ASOMURA Kuniaki

Articles

Philological Study of the Term "Alien (Exotic) Species" on the
Problem of Biological Invasion ……MURANAKA Takashi

A Study of a Small Community Network as a Social Welfare Infrastructure
of Depopulated Agricultural Communities in Akita Prefecture (Part12)
— Summary of Researches final report : As to the domain and limitations
of Old People's Mutual Support Activities ……TAKAHASHI Kazuyuki

Development of Transfusion related Activities and the Public
policies in Akita Prefecture ……NARA Hiroshi

The Institute of Cultural Sciences
North Asia University, Akita, Japan